蠅、その他

u_

蝿

　蝿が、四角い石の上に置いた林檎の周りを飛び回っていた。林檎を金槌で叩くと、林檎は石になって、細かく砕けて辺りに飛び散った。尖った石の破片は、赤い皮を被って丸みを帯び、どれも林檎になった。地面が揺れて林檎が転がった。日焼けした男達が、腰を屈めて、それを追った。男達は皆、林檎を追って急斜面を転げ落ち、その下を流れるドロドロの溶岩の中に消えた。林檎は転がる内に、赤い皮が剥げて、石になって、砕け散った。その破片はどれも、それぞれ水のある所まで転がって、その中に落ちた。大きな湖にも池にも水溜まりにも流し台の水滴にも、一片ずつ入って行って、その水の中心に収まった。

　蝿が、流し台の水を舐めようとした。しかし、中に石が入っていては、水の表面は石のようで、水を舐める事は出来なかった。石の入っていない水を探し回ったが、見付からなかった。蝿は、干涸らびて粉々になった。その粉々の残

骸の一つ一つが、それぞれ別の水のある所まで、風に飛ばされて行ったが、水はそれらを、悉くはね除けた。更に風に飛ばされて、それらは、一つの小さな孔に入って、そこで、自ら水に似たものになった。それらは、直に蒸発して、猫の目に入った。猫は目が見えなくなって、闇の中を恐怖に駆られて、走り続けた。暫くすると足音がぴちゃぴちゃ言っていて、水場に来たようだった。猫は足を止めて、それまでずっと我慢してきたかのように、そこで水を吐いた。水は、口から出っ放しで、なかなか止まらなかった。まるで、猫の尻にホースが突っ込まれて、そこから水が止め処なく、猫の腹に送り込まれて来るようだった。猫は、そのホースを振り払おうと、盛んに尻を振った。しかし、そんなホースはなくても、何処からか水は、猫の腹に送り込まれて来た。足音がぴちゃぴちゃ言わなくなっていた。その水場の水が全て、猫の腹に収まって、それを猫が吐いたに違いなかった。では、吐いた水は何処へ行ってしまったのか。

　猫は、目を開く事が出来た。大きな真っ白な雲が、風にグングン流されて行くのが見えた。腹の中の水を全て吐いた猫は、腑を吐き、肉も骨も吐き、皮だけになって、干涸らびて死んだ。雲は、全て地平線の向こうまで移動し、そこで雨になった。そこは海だったが、雨の水が、海の水と混ざる事はなかった。雨水は、海の上にくねくねと曲がる川になって、低い方に流れて行った。海面が傾いているのだ。その川は、海を越え、その先の平坦な砂漠に流れ込み、更

にその先の小さな町に、轟音を轟かせて襲い掛かり、町を押し流した。

　その轟音に、真っ白な肌の色の女は転倒し、石に頭をぶつけて死んだ。女の腹から、赤ん坊が流れ出て、水がそれを押し流していった。水は更に流れて、その先の岩山に全て閉ざされ、その北側の、一日中陽の当たらない、ヒンヤリした黒い崖から、雫を垂らした。赤ん坊は、その滴る水を乳の替わりにした。そこに、丸々と太った蠅が群がってきて、赤ん坊は、それを好きなだけ掴まえては、口に入れた。そうして飢える事もなく、丸々と太った赤ん坊は、立ち上がろうとして、そこから斜面を転げ落ちていった。斜面は何処までも続き、赤ん坊の全身の皮膚は破れ、血塗れの赤い肉の塊になった。それは巨大な林檎に見えた。しかし斜面はまだまだ続いて、その塊は、血や肉を飛び散らせながら、尚も転げ落ちていったので、次第に小さくなって、姿を消した。長い赤い筋が残った。

　岩山が崩れ、斜面に鉄砲水が襲って来て、その赤い筋を全て洗い流した。水は斜面を下りきり、その先の窪地に湖を作った。その水の真ん中で、赤い血と肉が固まって、暫くすると人の姿になった。それは女だった。彼女は、目を開けて浮き上がり、泳いで岸に上がった。女は、もう二度と水の中に入れなかったし、触れる事さえ出来なかった。喉が渇いて、飲める水を求めて、ただ当てもなく進んで行くしかなかった。足の皮が破れ、血塗れになったが、その血も

直に乾いた。心臓を掴みだして、握り潰して、噴き出した血を飲むしかなかったが、幾ら胸を掻き毟っても、心臓を取り出せずに、女は死んだ。死体は干涸らびて、独りでに、粉々に砕け、風に運ばれて、彼女を作った湖の上に被さった。その粉々に砕けた死体と湖の水は、決して交わらなかった。死体の細片は、薄い膜のように湖全体に拡がって、湖面をすっかり覆った。更に、風に運ばれてきた土や埃が、その上に降り積もった。湖は、その形を保って、すっかり地面の下に隠された。そのまま長い時を経て、湖水は丸ごと巨大な硬い石になった。（二〇〇一年十月七日）

＊

＊

＊

苺

目の見えない私に、男は、白い机の上の、小さな篭に盛られた苺の山を指差して、苺を目に擦り付ければ、目が見えるようになると教えた。私は、その一番上の、他より小さいが一際赤い苺を摘んで、見開いた右目に押し付けた。ザラザラした液体が滲み出て、目の中に満ちた。その潰れかけの苺で、左目にも、その液体を擦り付けた。私は、見えていた目が、見えなくなった。その闇の中

で、男が、私と同じ事をしているのが、気配で分かった。男は、暫くジッとしていて、目が見えるようになった、と叫んだ。

　もう一人、私の直ぐ横に、机に肘を突いて、机の縁に腹を押し付けるようにして、腰掛けている女が居て、男は、彼女にも、同じ事をするように勧めた。女は、微笑んだまま、幅の狭い背中を丸め、両手を腿の下に突っ込んで、上体を更に机の方に折って、微かに体を前後に揺らすだけだった。男は、女の顔を見て、左の頬を引きつらせて、笑った。しかし、私には、それらは見えない筈だった。

　苺の汁で目を塞がれた私が、どうして、二人の様子を見て取れるのか、私は、それを男に聞くべきかどうか、暫く迷ったが、口を滑らすようにして、男に聞いた。男は、さも狼狽えたように両腕を忙しく机の上に彷徨わせ、ちらりと女の方に目を遣ると、頭を抱えて、机の下に身を隠してしまった。その男の居た直ぐ後ろは、汚れた白い壁で、そこに、男の姿に隠されていた、分厚い額縁が、目に入った。その中に、殆ど色のない小さな絵が嵌っていた。海の絵で、海と空しか分からなかった。私は上体を前に倒し、両腕を、額縁の両側の壁に突いて、絵を見直した。海の手前に白い陸地が微かにあって、そこで、私と、私の隣の女が、並んで歩いていた。私は、女に、これは何時何処の出来事かと聞いた。女は、絵に向かって、思い切り身を乗り出して、腕を伸ばした。それでも

絵に届かないので、机を押して少し前に出し、もう一度、同じ動作をして、やっと、その絵の、私と女の描かれた所に、指先を届かせ、何度かなぞった。目の前がぼやけて、私は、その場に倒れたようだった。女が、私の頭を踏み付けるのが、微かに分かった。

私の頭は、真四角で、それは、微かな白い陸地の上に建つ、唯一の建物だった。女が、独りで、その建物に入るのを、私は、空っぽの広い頭の中を、こつこつと踏み付けられてゆく感触から見て取れた。足取りはジグザグで、女は、何かに怯えておろおろしているようだった。それが何なのか、女にも分からないようで、女は、腰にぶら下げていた、ナイフを取り出し、四つん這いになって、それを床に突き刺したまま、ジリジリと後退りを始めた。壁に行き着くと、そこで向きを変え、またナイフで、床を切り裂いていった。そうして、歪んだ五芒星形の線が閉じると、女は、後ろの壁に尻を擦り付け、床に左の耳を付けて、その奥から聞こえてくる音に耳を澄ました。

その下には地下室が掘られ、そこで、女が、大の字に仰向けになって縛り付けられて、喚き声を上げていた。床の女が、何時までも、その声に耳を澄ませたままなので、私は、彼女に、地下室で喚いている女が、何を言おうとしているのか、尋ねてみたらどうかと、忠告した。すると、その喚き声は、赤ん坊の泣き声のように舌足らずなものに聞こえてきて、ますます聞き取り難くなった。

しかし、女は、却って、その泣き声から、何かを聞き取ったようで、狙い定めたように、ナイフを突き立てて、グリグリと回した。床に穴が開き、そこから床は、みるみる突き破られていった。その下は、地下室と言うより、床下と言った方が良さそうな程、深さがなかった。女が、そこに降りると、しゃがみ込んで、思い切り身を屈めて、首を前に折らなければ、先に進めなかった。結局、中は空っぽだった。その一番奥から、首を捻ってやっとの思いで振り返ると、真ん中に、赤ん坊が寝かされているのが見えた。喚き声が聞こえてこないので、女は、それを赤ん坊に催促した。すると、赤ん坊は、何人もの、ゴワゴワしたケバケバした色の服を着た女達に、すっかり取り囲まれて、盛んに、尖って歪んだ木の棒で突っつかれた。中は静まり返って、赤ん坊の肉の裂ける音だけが聞こえた。その音を耳の中から振り払おうと、女自らが、長い喚き声を上げた。身を屈めた姿勢では、声は籠もってしまう。もっと大きな声を出そうと、女は、立ち上がった。頭が、床を突き破って、その頭だけが、上の部屋に突き出た。

　そこはちょうど、机の真下だった。私は、四つん這いになって、尚も喚き続ける女の顔に、ギリギリまで自分の顔を近付けて、出来る限り小さな声で、その大きく開きっぱなしの口の中に、切れ切れの言葉を、一本の糸のようにして、流し込んだ。それらが、女の舌の上で転がるのを見届けてから、私は、顔を離

し、立ち上がって、額縁の中の絵を、間近に見直した。男が、肩を並べて直ぐ脇に立ち、いかにも絵の説明をしたがっている風だった。私は、知らん顔をした。そして、絵を説明するのは、それが出来るかどうかに関わりなく、自分でなければならないと思った。私は、男に、この絵をどう説明すればいいか、尋ねた。男は、目を泳がせて、口籠もった。机の下から、女の笑い声が聞こえた。私はカッとなって、額縁を壁から外し、机を蹴飛ばして、埃で真っ白な女の頭を、額縁で殴り付けようとした。

男が、腰を落として、その額縁を両手でしっかり掴んだので、私の動きは止まった。女の笑い声も止まった。私の目から苺の汁が滲み出してきて、目の前が真っ暗になった。私は、二人掛かりで、テキパキと手足を縛られ、床下に放り込まれたようだった。私は、赤ん坊の鳴き真似をするしかなかった。目からは、苺の汁が、溢れて止まらなくなった。私の泣き声は、何時の間にか、金属音のようで、床を細かく震わせ、その震えは、壁にまで伝わって、収まりが付かなくなった。その震えによって、私は、自分が、床下に居るのと同じように、床の上にも、壁の中にも、居るように感じられた。

男が、額縁を壁に掛け直した。私は、壁を震わせて、それを落とした。男は、それを見越して、もう落ちる前から、その下に腕を伸ばしていた。男の腕の中の額縁を、今度は、女が手に取って、壁に掛けた。私は、また壁を震わせたが、

額縁は、ビクともしなかった。
　女は、細い両腕を、耳に付けて真上に伸ばし、弧を描いて、絵の中に飛び込む仕草をして、笑った。笑い声は、部屋中に響き渡って、私の鳴き真似とは比べものにならない程、激しく、床や壁を震わせたようだった。男は、その場に蹲った。両手で耳を塞ごうとしたのかも知れなかったが、男は、両目を押さえていた。目はしっかり閉じられて、血が流れ出ていた。その痛みと目が見えなくなった事を、大声で喚いているに違いなかったが、女の笑い声に掻き消されていた。私はもう、壁にも床にも床下にも、何処にも居なかった。
　絵の中の四角い建物は、海に浮かんでいて、更に少しずつ、沖へ流れて行くようだった。建物の中には、女だけが居るように、どうしても私には思われたが、誰にも確かめる事は出来ないだろう。（二〇〇一年十月九日）

＊　　＊　　＊

猿

　盥を少し改造しただけのような小舟に、乗せられていた。水面は、大きく揺れていた。星の形の金色の厚紙が、糸で吊されていて、小舟の周りで、飛び跳

ねた。風が、右に激しく入れ違って、回っているらしかったが、私は、その風を肌で感じる事は出来なかった。両腕を突っ張って、小舟の左右の縁を握り締めてはいたが、ヌルヌルしてきて、どちらか片方でも、手を滑らせた途端、私はバランスを崩して、舟から放り出されるに違いなかった。私は、そこに唾を吐き掛けては、ぬめりを少しでも落とそうとした。それを、誰かが、高い所から顔だけ出して、笑っているようだった。その笑いが、水面を揺らしているのではないか。私は、唾を吐くのをやめ、体の力を抜いた。そのまま、体は、舟の中に折り畳まれていった。それで少しは身を隠せて、笑いの対象から外れた積もりだったが、却って逆効果で、笑い声はますます高く響いて、水面を激しく揺らし、小舟は、殆ど垂直になる程に、前後左右に傾いた。しかし、またそこで、浅知恵を働かせて、何かをしようとすれば、それをまた、笑われるのだ。それなら、幾ら激しく揺らされても、何もしないでいるに越した事はない。しかし、そうして、ただジッと何もしないでいる姿もまた、笑いの対象となって、水面は、激しく揺れ続けた。

　いっそ、小舟が転覆して、水中で、水中に相応しい事が、私に出来るなら、たとえそれで水を飲んで息が出来なくなるにしても、この窮状から抜け出せるのだ。しかし、直ぐ間近に、水底が見えた。膝くらいの深さしかなさそうだった。もしも小舟が転覆して、そこに足を着けて立ち上がろうが、水の中に寝そ

べろうが、私の体は、激しく揺れる水にいいように弄ばれ、直にあちこちねじ切られて、バラバラにされてしまうだろう。

　小舟が軋む音が、盛んにした。小舟も、もう限界が来ているのかも知れない。何時バラバラに砕けてしまうか分からない。私は、他に私の身を守れそうなものを探して、辺りをキョロキョロ見回すしかなかった。もちろん、何の当てもある筈はない。周りには、もう紙の星もすっかり何処かへ行ってしまって、動き回る水ばかりだった。

　水の音だとばかり思っていた中に、獣の甲高い喚き声が混じっているのが、聞き分けられた。私の正面の小舟の縁に、小さな痩せた猿が、しがみついていた。目を真ん丸に見開き、口をへの字に尖らせて、私以上に激しく、辺りをキョロキョロ見回していて、いかにも醜く滑稽だった。笑われていたのは、この猿ではないか。こいつさえ消えれば、水の動きは、収まるのではないか。私は、手を使えないので、猿の顔面に唾を吐き掛けた。猿はキョロキョロするのをやめて、体を斜めにして、顔だけ私の方を向けて、細く小さな切れ長の目で、静かにジッと私を見詰めるままだった。私は、その顔から、目を逸らそうとしたが、出来なかった。辛うじて、私が吐いた唾に目を遣れるだけだった。その白くツルツルした表面に、私の姿が映っていた。覗き込むと、盥にしがみつく、毛むくじゃらの黒い大きな犬の姿が見て取れた。その後ろに、乾いた闇が開け

ていた。直ぐに、自分に出来る事を理解した。私は、身を翻して盥を飛び出し、闇の中を、四つ足で駆け続けた。水は追って来なかった。

　私は、狭いボイラー室を抜け、フカフカした絨毯の、狭く暗い廊下を、長い二本足を突っ張らせて、大股で歩いていた。途中、左の壁がなくなって、その奥では、大掛かりな改装工事がされているようだった。帰り支度をしている作業員の姿が、一人だけ見えた。ポケットから小さな紙を出し、暗い中で、そこに書いてある文字を、こっそり読み取ろうとしているようだった。裸電球が一つだけ灯っていたが、彼は、それに背を向けていて、人に見られてはまずいようだった。紙をポケットに仕舞うと、作業員は、二人になっていて、まだ木組みの剥き出しの壁の奥に消えた。しかし、その奥は明らかに行き止まりだった。別の作業員が現れて、誰も残って居ないのを確かめてから、裸電球を消し、ドアから出て行った。ドアの奥から光が差し込んだ。そこは給水室で、若い女が、お茶を入れていたが、直ぐ脇に、髭の濃い丸顔の太った男が木箱の上に腰掛けて、下卑た笑みを浮かべていた。

　その現場を過ぎて、また狭い廊下を進むと、前から汚れた柄のブレザーを着た背の低い男が飛び出てきて、私の袖を掴み、私がここを歩いているのを、脅し文句を並べ立てて、激しく詰った。私は、幾らでも反論出来たが、なぜ自分がここを歩いているのか分からなかったので、反論する事が虚しく思えて、黙

ったきりでいた。男の頭の天辺が見える程、身長差があった。男のやや長目の真っ直ぐの髪は、しっとり黒光りして、そこだけ浮き立っていた。男を罵る度に、更に背が縮んでいるようにも思えた。そこを、小さな細長い木箱を抱えた、すらりとした若い女が、足早に擦れ違って行った。その時だけ、男は、少し背が伸びた。私は、男を攻撃する材料を手に入れられたように思えて、男とその若い女との関係を問い質した。男は、前髪を垂らして、顔を背け、捨て台詞を吐いて、私が来た方向に引き返して行った。女とは反対の方向だった。右脚と左脚の長さがかなり違うような歩き方だった。男の両脇に、消えた二人の作業員が現れ、三人連れになって、何か嫌らしい事を言い合って、掠れた笑い声を廊下にまき散らした。

私はまた、先に進んだ。廊下の突き当たりは、下りの更に狭い階段で、人の気配が全くなかった。私は、その階段の前でグルグル回って、外に出るドアを見付け、そこから外に出た。

外は夜だった。大きな鞄を肩から下げて、私は、ノロノロ歩く太った女を、そっと追い越した。それでも、女は、私の姿に驚いて、その驚いた自分に向かって、寂しそうな顔をするようだった。私は、その顔を逃れるように、早足で先を急いだ。

四階建ての真四角のコンクリートの建物が、崖の前に建っていて、その前の

舗装された坂道に、白い車が一台止まっていた。私は、その車の下の、痩せ細った子猫に向かって口笛を吹いた。猫は、残り物のドロドロのスープを顔中に塗り付けられて、目も開けられずにいた。建物の二階の窓の灯りが、一つだけ灯った。その窓を見上げる私の姿を、ちょうどそこを通り掛かった猿が、足を止めて、ジッと見詰めた。私がそれに気付いても、猿は、私をきつく睨み付けるのを已めなかった。

　猿は、盥にしがみついていた時より、すっかり大きくなって、腹の出た人間の中年過ぎの男そっくりで、汚いスーツを着て、よれよれのネクタイをして、脂で汚れた眼鏡を掛け、薄くなりかけの髪の毛はモジャモジャで、その髪の間から覗く頭の皮膚は、日に焼けて脂ぎっていた。頭の形は、サイコロのように真四角だった。私は、二階の灯りの灯った部屋が、若い女の部屋であるのを思い出した。それなら猿は、人目を忍んで、そこに行こうとしているのか。それとも、もうそこに行って、女が居ないので、引き返して来たところかも知れなかった。猿は、私を見下すような態度で、汚れた目を尖らせて、私を睨み付けたまま、微動だにせずに、そこに立ち尽くしていた。私は、白い車のドアの鍵を開け、鞄を後部座席に乗せてから、車に乗り込み、そこから離れた。その一部始終を、私は、猿の汚れた目で、見詰められるままだった。バックミラーを覗くと、猿が、建物の階段を登って行くのが見え

た。
　廊下で私を脅した小男が、両腕を拡げて、道に立ち塞がった。私は、車から引きずり出された。改装中の大部屋の奥の小部屋で、待つように命令された。小部屋と言っても、まだ大部屋との仕切りは、全く出来ていなかった。私は、大部屋の方を向いて、そこにしゃがみ込んだ。大部屋には、裸電球が幾つも灯って、すっかり明るくされていた。私の直ぐ前を、大勢の中年男と若い女が、通り過ぎたが、誰一人、余程私と関わり合いたくないのか、決して私の方を見なかった。猿が小男を従えて、やっと現れた。猿は、私が、若い女の体を舐めようと部屋に近付いたのを詰った。しかし、その猿の口から、若い女の匂いがぷんぷんした。若い女の体を舐め回したのが、猿であるのは明らかだった。私が反論しようとすると、猿は、私が犬だと言った。私は、目をキョロキョロさせ、臭い息をハアハア吐いて、細長い舌を出して、揺らしていた。その舌が、動かぬ証拠だった。（二〇〇一年十月十一日）

＊　　＊　　＊

涎

未年生まれの人間は、急いで、診察室に集まらなければならなかった。私だけが、釣りに熱中していて、遅れていた。しかも一匹も釣れなかった。それではサマにならないので、まだまだ時間がある事にして、粘っていて、それで遅れたのだった。獲物の替わりに、私は、階段の踊り場に積み上がっていた、大きな段ボール箱を一つ抱えて、何とか、手ぶらであるのを誤魔化そうとした。診察室は、まだまだ上の階にあって、私は、何食わぬ顔で階段を登り続けた。小さな木の箱を腹の上に抱えた看護婦が、何人も、階段を降りてきて、私と擦れ違いざま、息を切らして階段を登る私を、軽くからかった。看護婦の白くのっぺりとした顔は、どれも猿のようで、私は、込み上げる笑いを隠すために、背けた顔を段ボール箱に擦り付けなければならなかった。その姿をまた、看護婦達は、からかうのだった。

階段を降りてくる足音が、また聞こえた。私は、初めから、顔を段ボール箱に擦り付けたまま、やり過ごそうとした。すると、それはどうやら看護婦ではないようだった。低い怒ったような男の声で、私に、行く先を指示した。私は、階段を登るのを已め、ツルツルした緑色の廊下を進んだ。

ドアを開けると、大きな病室で、ベッドがズラリと並んで、未年生まれの連中ばかりが寝かされていた。端まで見通したが、空いているベッドはなかった。部屋の西側の隅で、年取った背の高い痩せた男と、年取った背の低い太った女

が、額を寄せ合うようにして向き合って、湯気を上げるビーカーや試験管を弄って、何かの実験をしているようだった。私は、どうして、背の違う二人が、額を寄せ合えるのか不思議で、彼らに近付いた。女が、私の方を向いて、微笑みながら、この病室に寝ているのは、皆、私と先祖代々ずっと親しくしている間柄の人間ばかりだと言った。私は、その証拠を示して欲しいと言い返した。女は、目配せした。そちらを見ると、ベッドの脇に、一匹ずつ黒い犬が居て、好き勝手な恰好をしていたが、どれも尻尾を振って、決してベッドを離れないと心に決めているように見えた。それが証拠なのか。では、どうして私にだけ、黒い犬が居ないのか。私は、不満を示そうと、口を尖らせたが、女は、もう実験に掛かり切りで、私の方を見ていなかった。

　私は、大きな段ボール箱を抱えたまま、立ち尽くすしかなかったので、その私に指示を出す男と、一人二役をする事にした。その男は、青いガードマンのような制服を着て、ツカツカと私に歩み寄り、腕を水平に伸ばして、私がその段ボール箱を運んで行かなければならない方向を、指差した。私は早速そちらに進んだ。振り返ると、今度は、その青い制服の私が、腕を伸ばしたまま、そこに立ち尽くすしかなくなっていた。私は、段ボール箱の中を覗き込んだ。白いタオルが一本、入っているだけだった。段ボール箱を降ろし、タオルを取り出し、空の箱を適当に圧し潰して、一番側のベッドの下に滑り込ませた。そう

してから、そのベッドに寝ている者に、その段ボール箱についての許可を求めた。

見ると、その顔は、人間ではなく、蝋人形のようでしかなかった。それとも、病気のせいで、それ程までに、衰えてしまったのだろうか。私は、布団の上に手を乗せて、その者の体を軽く揺すった。饐えた匂いが立ち上って、私は何ともなかったが、その匂いに、その病人本人が、噎せ返った。明らかに栄養失調だった。部屋を見渡した。病人の他は、実験している二人の老人しか、見当らない。私は、二人に近付いて、病人に栄養が必要だと伝えようとした。しかし、二人は、先刻承知に違いない。実験も多分、病人に栄養を行き渡らせるためのものなのだ。そう思う直して、私はそのまま、病室を出ようとした。

ドアを開けると、後ろ髪を掴まれた。私の髪は、長く伸びていた。片手で束ねて掴まれると、尻尾のようだった。その手で、それは、更に高く掲げられ、黒い犬の尻尾のように振られた。まるで、それが合図であるかのように、ベッドに大人しく寝ていた連中が、一斉に上体を起こして、激しい身振り手振りで、食い物を要求しだした。犬共は、か細い鳴き声を情けなく絞り出して、皆、ベッドの下に潜り込んだ。ただ、私が段ボール箱を突っ込んだベッドの側の犬だけは、その下に潜り込めず、ベッドの周りを、怯えた目つきで、走り回った。ドアの私は、直ぐ側に立ち尽くすままの制服の私に、その犬を取り押さえるよ

うに、命令した。制服の私は、やっと動ける事に安堵の表情を見せ、身を翻した途端に、何処かに見失われた。私は、ひどく裏切られた感じがした。ドアの直ぐ横で、二人の老人が、やはり額を寄せ合ったまま、ビーカーや試験管を弄りながら、私の方を見て、ニヤニヤ笑っていた。消えた制服の私は、この二人の手下に違いない。私は、二人に説明を求めた。

　二人は、私に、黄色い液体の入った、ビーカーを差し出した。それが、彼らの説明なのか。私は、それをひったくるように取って、その液体を飲もうした。その瞬間、それが毒だと気付いたが、手遅れで、液体は、のろのろと喉に流し込まれた。毒が回って死ぬまでに時間があった。私は、ドアにしがみついて、ゆらゆらしながら、年老いた二人の姿を、明るい声を張り上げて、思い付く限りの汚い言葉でからかった。二人の顔は、みるみる土気色になって、目は虚ろで、口元は歪んだきり、干物のように固まってしまったようだった。それを見た私の舌は、ますます滑らかで、自分でも止められなくなってしまった。空いていた腹が、どんどん脹れてゆくのが分かった。腹一杯になって、やっと言葉に詰まった。それでやっと私は、二人に命乞いをした。男が言うには、死ぬ直前に、黒い犬の天敵になった自らの姿を思い浮かべれば、私は助かるのだった。しかし、女は直ぐに、その意見を、カラカラと笑い飛ばした。私は、その天敵が何なのか、男に聞いた。今度は、男が、カラカラと笑って、自分で考えろと

言った。逆に、女が、不機嫌そうに黙り込んだ。女は、私にそれを教えたいのだが、高笑いする男の手前、それが出来ないのが不満のようだった。
　手足の先が痺れてきた。私は、床から足を離し、両腕と両脚でドアを挟み付けるようにして、全身で、ドアにしがみついて、ゆらゆらした。そうすると、毒の回りが、また幾らか遅れるようだった。そうして私は、無理と諦めつつも、とにかく何か考えようとした。小鳥の姿が、頭に浮かんだ。鳥は、透明な涎を、だらだらと垂らしていた。その涎の溜まった小さな透明な池の中で、黒い犬共が、すっかり小さくなって溺れていた。それきり何も、頭に浮かばなかった。時間がない。もう、その鳥の姿に、託すしかなさそうだった。しかし、私には、何時が死の直前なのか、分からなかった。ひょっとして、もう死んでしまっているかも知れない。何時が死の直前かに気を取られて、鳥の姿を思い浮かべるのを、つい已めてしまった時に、死の瞬間を迎えてしまっては、元も子もないではないか。
　そんな事をぐるぐる思い巡らせながら、何時しか、私は死んだらしかった。私の体は、すぐさま、病人の数にだけ切り分けられ、病室にゾロゾロ入って来た看護婦達によって、慣れた手付きで、手際よく配られ、残らず病人の腹の中に収められた。病人達は、元気を回復し、一斉に蜂起した。自分達が、病院側によって、いかに飢え死にスレスレの状態にされていたかを、口々に訴えた。

看護婦達は、自分の着ている制服を、尖った爪でビリビリに引き裂いた。すると、どれも狼だった。病人は羊で、ベッドの上で、大人しく、狼に食い殺されるだけだった。

私は、その様子を、病室の一番太い梁の縁に掴まって、詰まらない猿芝居を見物するように、冷ややかな沈んだ気分で、見下ろしていた。狼も羊も、縫いぐるみを被って、私を騙すために演技しているだけのものに違いないのだ。第一、血が一滴も流れないではないか。その間も、私は、音こそ立てなかったが、物凄い勢いで途切れる事なく涎を垂らしていた。床は涎だらけで、犬達は、予想通り溺れ死んで、少しだけ気が晴れた。

ただ段ボール箱を押し込んだベッドの脇の犬だけは、その段ボールの中に身を隠して無事だった。私は、どうしたらその犬を殺せるかで、頭を一杯にするしかない自分が、ひどく滑稽で、笑いが止まらなかった。着ぐるみの連中は、その私の笑い声にすっかり気分を害したようで、皆、縫いぐるみを脱ぎ捨てて、病室から出て行ってしまった。そこで、思う存分、私は啼いた。二人の老人が、後片付けを済ませ、病室の電気を消して、静かに出て行った。私は、啼き続けるべきかどうか、迷うばかりだった。或いは、ずっとそうして迷っていなければならない事が、私の死かも知れない。そうなのかどうか、あの二人に聞ければよかったが、もう手遅れだった。(二〇〇一年十月十三日)

*　*　*

舌

　掴み取れるだけの真珠を、汚れた右手に掴んでいた。手を開いたら、真珠は掌から零れ落ちる。だから、手は、ずっと握り締めたままでいなければならない。その拳を白い壁の方に向けると、壁の前に、手の中の真珠が、その数だけ現れた。その一粒一粒は、どれも人の姿をしていて、全身埃を被ったままのようにくすんだ色で、互いに、顔を背け合っていた。私は、強く握ったまま、拳の指を微かに動かして、中の真珠が擦れ合う音に、耳を澄ました。その音に呼び出されるかのように、彼らの中から、三人の人の姿だけが、明るい光を受けて、浮かび出た。その三人も、全く別の方を向いていた。私には、三人が見えるが、その三人は、互いに誰の姿も見えない。

　一番手前の者の顔だけが、こちらを向いていて、それは、私の知っている誰かに似ていた。それが誰なのかを、私は、尋ねた。その者は、その誰かに似ているように、私が思い込みたいだけで、自分は誰にも似てはいないと答えた。そう言われて、見直すと、確かにそれは、見覚えのない顔だった。しかし、そ

うしてその顔を、ずっと見詰めていると、それは、私の知っている誰かより、余程、馴染みのあるものになっていった。私が、それを言うと、その顔は曇って、光を受けるままであっても、暗い色のザラザラした石のように、沈み込んだ。すると、その三人以外の人の姿も、沈み込んで、それらは、人の姿ではなくなって、一塊りの凹凸のある大きな石になって、三人を取り囲むようだった。

　その沈んでしまった顔を、石の中から、救い出さなければならなかった。私は、その暗い顔に向かって、水に飛び込むように、飛び込もうとした。その飛び込もうとする姿のまま、自分が石になって行くのが分かった。しかし、石になりきる事もなかった。口だけは、変わらずに柔らかかった。ただ、直ぐにも、何かを口に入れて、それを噛むなり、舌で転がすなりしなければ、口も、石になってしまうだろう。

　唇に誰かの指が触れ、私の口に柔らかいものを、含ませたようだった。私は、それを、ゆっくり噛んだ。それは、噛み砕かれる事も、それ以上柔らかくなる事もなかった。実際、そんなものがあるだろうか。それは、私の、噛み切られた舌だった。誰かの指だと思ったものは、私の歯だったのだ。

　光を受けた三人が、私を取り囲んでいるようだった。私には、見えなかった。逆に、三人には、私が見えているようだ。殆ど石になった私をどうするかを巡って、話し合っているのが聞き取れた。そして、その内の一人が、私に意見を

求めて来た。舌のない私には、答えようがなかった。答え方があるとすれば、口の中の舌を、呑み込むか、吐き出すかの、どちらかだ。答えを拒んでいるのを、三人に伝えるため、私はそれを、ずっと同じテンポで、ゆっくり噛み続けた。その内に、それが、光を発しているのが分かって来た。私の口の中からの光だけが、三人を、照らしているのだ。それで、少しだけ得意な気分になると、それは三人に見透かされ、一人が、私の口を開けて、私から、舌を取り上げた。

　辺りは、真っ暗になった。誰も口を利かなかった。私を含めた四人は、ひたすら耳を澄ませた。その内に、二人と二人に別れた。片方は、音を立てる事が出来るのは、ここに居る四人だけなので、音を聞くには、自分達が音を出すしかないと考えた。もう片方の二人は、自分達は音を出す事が出来ないので、音を聞くには、飽くまでも、ジッとして、周囲に耳を澄まさなければならないと考えた。私は、自分がどちらに属するか、分からなかった。自分達が音を立てなければならないと考えた二人は、体を揺すったり、叩いたり、互いに肌を擦り合わせたり、唇を震わしたり、喉を鳴らしたりした。しかし、その音を、少しも聞き取れなかった。別の二人が、その中から音を聞き取ろうとしている沈黙が、邪魔で仕方なかったからだった。その音を聞き取ったのは、沈黙にジッと耳を澄ます方の二人だった。しかし、その彼らに聞き取れたのは、音ではなくて、沈黙の奥にだけある筈の音が遣って来るのを妨げ、掻き消してしまうも

のでしかなかった。
　そうしている内に、四人が四人とも、自分がどちらに属しているか、分からなくなってしまった。私は、四人の中から自分を見付けようと、握っている右の拳を捏ねるようにして、中の真珠同士を軋ませた。しかし、四人共がそれをしているように思えてしまう。仕方なく私は、掌を拡げた。真珠は、誰の手の中にもなかった。しかしそれは、掌から零れ落ちてしまったからだ。四人は、別々の方向に、転がる真珠を追って走り出した。凹凸のある大きな石だけが残った。その凹凸に触れて、その感触から、人の姿を取り出そうとしているのが、私だった。
　三人が戻って来て、一人一粒ずつの真珠を、私の口に含ませた。私は、それらを舌で転がした。甦った舌は、ひどくネバネバしていて、真珠は、その粘りの中に絡め取られ、舌の表面は、真珠の形を捉えられなくなってしまった。私は、その形をまた何とか探り出したかったが、ただ舌だけが、訳の分からない形になって、ますますネバネバして、口の中を蠢くだけだった。真珠は、もうその中で、すっかり溶けてしまったと考えるしかなさそうだった。
　私は、握り締めた右の拳の中に三粒の真珠を、感じ取った。三人の姿は、消えていた。私は、右手を口に持って行って、その三粒を口に含もうとした。しかし、拳は、どうしても、唇を探り当てられなかった。唇だけでなく、顔も何

処かに行ってしまったようだ。顔がないのなら、体もなさそうだった。ただ、真珠を握り締めて振り回されている拳だけが、私のようだった。

「そうなんですか？　それが、私なんですか？」

「何ですって？　何処からそんな考えが出てくるんですか？　あれは、ただ真珠に振り回されている、握り拳でしかないでしょう。石の礫と大して変わらないようなものですよ。」

石の礫は、言葉を交わした二人の周りを、物凄い速さで、回り出した。その中から出られなくなって、何時その礫が、頭を直撃するかビクビクしながら、身動き取れないのが私のようだった。

「そうでしょう。他に、私の居られる所なんてありませんよね。」

答えはなかった。私は、そこに居ないのかも知れない。（二〇〇一年十月十五日）

*　　　*　　　*

火花

雨上がりの草原で、若い雄牛が死んで横たわっていた。その様子からして、

牛は、高い所から転落して死んだに違いない。見渡すと、そこはずっと平原で、遠くにうっすらと白茶けた山の連なりが見えたが、崖などは、何処にもなかった。その牛の青くて太い首を撫でながら、埃まみれのゴワゴワした服を着た男が、その牛に、呼び掛けた。男は、牛の事を、自分の息子だと言った。それから、男は、空を見上げた。空白の他に、何もない。そこから掴み取れるものは、一つもない。空は、地面の直ぐ上から、もう始まっていて、そこに空白しかないのは、驚きではないか。私達は、その空白に身を晒して、どうして生きていられるのだろう。まして、空に留まって生きる事は出来ない。だから、息子は、空には居られず、墜落して死んだのだ、と男は主張した。

私は、多分男より先に、ここに来ていて、ずっと火打ち石を探していた。どうやらそれは、牛の死体の頭の直ぐ側の、紙屑が、一杯になって溢れ出している籠の中にありそうだった。この周りの他の所はもう、散々草を掻き分けて、探し回った。残るは、その屑籠だけだ。そして、その屑籠へは、私は、牛か男かの、どちらかの脇を回り込んで行くしかないが、どちらから行くにしても、ひどく危険に思えた。いや、男の側は、確かに危険かも知れない。とんでもない事を言い出す男なのだ。とんでもない事をされるかも知れない。しかし、死んだ牛の側を回り込んで行くなら、牛の脚に躓いたりさえしなければ、何の危険があるだろう。私は、そちらに一歩を踏み出した。

気を付けていた筈なのに、牛の脚に躓いた。私は、そこから斜面を滑り落ちそうになったが、草をしっかり掴んで、俯せで、何とか踏み留った。ゆらゆら揺れる地面は、斜めになった水面の上に浮かんでいるようだった。そのせいで、決してそこでは、立ち上がれそうになかった。しかし、そこは水面ではないので、泳いでそこから這い上がる事も出来ず、ずっとそのままで居るしかなかった。私は、男に助けを求めた。私の声は、妙にか細かった。男は、もう誰もお前には注意を払わないだろう、と言って、横になった大きな牛の背中の向こうに姿を消した。

牛の頭の脇の屑籠に、小さな女の子が、黒い大きな鋏を持って近付いて来た。紙屑の山は、彼女の背より高かった。彼女は、そこへ突っ込んだ鋏をジョキジョキ鳴らして、手当たり次第のように紙屑を切っていった。しかし、彼女は、滅茶苦茶に鋏を入れているのではなさそうだった。紙屑の山は、段々と、立体的な切り絵のように、何かの形になって行くようだった。女の子の目は釣り上がって、ギラギラしてきた。あともう少しで、私にもそれが何の形か、分かりそうだった。彼女は、鋏を投げ捨てて、その自ら浮き上がらせた形の中に、飛び込んで行った。

女の子の体は、その形に抱き抱えられるようにして、紙屑の中に埋もれた。私は、彼女がきっと、私のために火打ち石を探していてくれるものと信じた。

紙屑の山は、雲のようにモクモクと脹れ、屑籠の中から、紙屑が湧いて出てきているかのようだった。しかし、それらは、一方で、炎を上げる事もなく、どんどん灰になって行くようだった。灰は、紙屑の山を崩す事はなかった。しかし、紙屑が全て灰になると、山は一挙に崩れて、風と共に、私の方に流れてきた。汗びっしょりの私の体は、灰まみれになった。

ただ、そのおかげで、私は、反り返る程に勢い良く立ち上がり、斜面を跳ねるように、二、三歩で登りきって、屑籠のあった所まで、一息に駆け付ける事が出来た。黒く生暖かいネバネバした灰の中に、親指大の、薄っぺらな、研ぎ澄まされた火打ち石が、見付かった。私の直ぐ後ろで、男が言った。

「まさか、それで、息子の肉を切り分ける積もりじゃないだろうな。」

図星だったので、私は、動揺を覚られまいと、何とか無表情を保って言った。

「女の子はどうしたんでしょうね。紙屑と一緒に、灰になってしまったんでしょうか。」

「知り合いなのか？」

「いいえ、あなたこそ知り合いじゃないんですか？」と、言ってから、私は、男が、私と全く違ったものを見ているのに気付いた。そして、私も、その同じものを見ようとしたが、その方向は、まるで透明な扉に閉ざされたかのようで、私は、何も見て取れなかった。男が話題にしているのは、女の子とは別の誰か

ではないのか。そう思って、私は男に聞いた。

「でも、誰と知り合いなんですか？」

男は、表情一つ変えず、私の知らない名前を、ずらずらと並べだした。私は、それを聞いて、ひどく眠くなった。眠いのを堪えながら、私がそれらの名前を一つも知らない事を、何とか男に伝えようとしたが、眠気のせいで、とても声など出せなかった。男の声が途切れた。私は、つっかい棒を失ったかのように、その場にくずおれて、黒い灰の中に、頭から突っ込んだようだった。目から火花が散った。それが、火打ち石を使ったからなのかどうか、確かめたかった。私は、指先でまさぐったが、直に、自分が何をしているのか分からなくなった。

それから、大分時間が経っていて、私は、眠りから覚めようとしていた。誰かが、私の口に、雫を垂らしているらしかった。私は、それをはっきりと感じ取りたかった。そのために、早くスッキリと目覚めたかった。しかし、なかなかそうならなかったので、私は、私の口に雫を垂らしている誰かに向かって、どうしたらいいのか、尋ねた。口が開いて、雫が、喉の奥に直に落ちて、私は、その冷たさに、パッチリ目を開けて、辺りを見回す事が出来た。空と草原が見えただけで、また私は、眠りへと、強く引き寄せられた。空と草原の他に、もう一つ、私は、何かを見ていたようだった。空と草原の映像を振り絞るようにして、それを思い出そうとした。白くて、こんもりとした山の形が思い浮かん

だ。その突端には、小さな孔が開いていて、そこへ、女の子が、首を傾げたまま、握り締めたスポンジ状のものを絞って、雫を垂らし込んでいた。女の子は、先程より、大分成長して、背も大きくなっていたし、顔付きも変わっていた。しかしまだ、女の子ではあった。

　その雫が、私に違いなかった。なぜなら、それが、孔から、その小山の中へ染み通って行くのが、自分の全身の感覚のように、感じ取れたからだ。女の子が、握っているものをきつく握って、その中の最後の水気を絞り出すと、私は、すっかりその白い小山の中に入り込んでいた。私を脅かすものは何もなかった。私は、女の子に声を掛けた。冷たい風が私の中を吹き抜けた。

　私は、牛の白骨だった。目だけは、そのままに残っていた。女の子は、手に黒い火打ち石を持っていて、それで、骨である私を、削り始めた。私は、どれも大体一定の長さに切り揃えられ、袋に詰められた。彼女は、ハミングしながら、その袋を手に提げて、何処かに行ってしまった。二つの目玉だけは、草叢の中に残していった。私は、それで、火花を散らす方法を考え続けた。辺りが暗くなってくると、その目玉から、途切れる事なく、火花が散っているのが見えた。それまで、周りが明るくて、見えなかっただけなのだ。火花は、その暗い中で、濡れた草の葉に跳ね返されるばかりだった。（二〇〇一年十月十七日）

＊

＊

＊

幻覚

　直ぐ後ろに、三人の中年の男が、横一列に並んで立っていた。一人は、背が低くて鼻をヒクヒク鳴らし、口を尖らせて、何処か不機嫌そうで、目は何も見ていないようだった。一人は、頭が禿げて、痩せていて、丸い目を忙しく動かしていた。もう一人は、体格が良くて、顔が真っ赤で、腹を突きだしていた。

私は、三人に、私の見た幻覚を説明しなければならなかった。別に、彼らは、私の説明を聞くために、ここに居る訳ではない。ここは、元々彼らのための場所で、そこに私が入り込んでいるからには、彼らのために、何でもいいから、何かしなければ恰好が付かないのだった。私は、彼らの方を振り向きながら、前を指差した。丈の長い草が生える草原の中に、球形の鏡張りの建物があった。それを指差しただけで、私は、男達に、自分の幻覚を説明出来たようだった。三人は、突っ立ったまま、眩しそうに眉間に皺を寄せ、体を強張らせるようだった。私は、彼らを残して、建物の方に歩き出した。

　全面鏡張りにしては、そこには、何も映っていないように見えた。何事か、形を映しているようではあったが、色は全く見て取れなかった。私は、入り口

を探した。三人の内の背の低い男だけが、草の間から、姿を現した。彼は、濃い緑の駅員の制服のようなものを着ていて、草よりも背が低いので、ここに居られる、と、不機嫌な顔付きからいきなり卑屈な笑みを浮かべて、小声で申し訳なさそうに説明した。私の背は、草よりも高かった。頬が火照った。どうして鏡張りの外壁に何も映らないのか、分かった。太陽の光ばかりを映すからだ。私は腰を屈めて、草の中に身を隠そうとした。男が、私の細い足を払った。私の前のめりの体は、宙に浮いた。

　私は、球形の建物の床の真ん中に向かって、転がり込んだ。床も鏡張りで、球形の内面を映していた。それなら、そこに映るのは、壁と一続きの丸天井である筈だが、まるで違うもののようだった。私は、それが何であるか、確かめるために、手を差し伸べた。入り組んだ形の、表面がザラザラしたものが、そこにあるのが分かった。しかし、何かもの足らない。見えないからだ。私は、両手の中に一つずつある、球形のずしりと手応えのあるものを、その入り組んだ形の方へ投げた。それは、私の目玉だった。目玉だと分かって、慌てて手繰り寄せた。直ぐ後ろに誰か居て、その目玉を欲しいというので、私はそれを手渡しした。

　一気に霞が晴れるように、目の前が開けた。しかし、そのままにしておいたら、直にくすんで、その奥行きも失われてしまいそうだった。そうなるより先

に、急いでそこに踏み込んだ。私の体は、両側から、大きな葉っぱのような形の白い石に挟まれて、動けなくなった。その先は、真っ白だった。脚を宙に浮かせていないと、腹が圧迫されて苦しかった。逆に、脚を浮かせてしまえば、ずっとそのまま居たいと思う程、心地よかった。その薄い石の裏側に、恐らく、一人ずつ男が隠れていて、石に唇を付け、その唇を震わせて、石に密着している私の耳に、言葉を流し込んで来るようだった。両方の言葉は、似てはいたが、同じではない。私は、二つ同時に聞き取る事が出来ずに、苦しんだ。苦しみを紛らすために、せめて身を振りたかったが、石に挟まれてそれも叶わない。しかしやっと、どちらからの言葉かは知れないが、私の頭の中で、混ざり合って渦を巻いている言葉の中から、一つだけ何か、聞き取れたようで、それを切っ掛けに、他の言葉も順々に分かっていった。

　それは、どのように、私がこの窮状を脱すればよいかを、私に教えようとする言葉だった。私は、それを疾っくに知っていた。分かり切っていて、今更、聞かされる程の事ではない。言葉の中身が分かると、それを聞き続けなければならない事が、愈愈苦痛に感じられた。私は、石の直ぐ向こうの二人に話し掛け、それらの言葉の要らないのを、伝えなければと思った。すると、そう思っただけで、それを察した二人は、石から離れて、姿を消した。言葉はもう、耳に流し込まれていないのに、それでも頭の中を巡り続けた。二人を探し出して、

私の口から彼らの耳に、直接、それらの言葉を返さなければ、収まらないに違いない。辺りの気配に、ジッと神経を研ぎ澄ました。私がここでこのようにな ってしまうのに係わった者達は、皆、その役割を終えて、それぞれのねぐらに帰ってしまったようだった。しかしそうなると、私はもう迂闊に、その言葉を口に出来ないのだ。もし口にして、それが、二人の耳に届かないまま消えてしまったら、ずっとその言葉は、私の頭の中に残って、取り出しようがなくなってしまいそうだった。

二人をねぐらから呼び出すために、何としても私は、頭の中にあるのとは別の言葉を、見付けなければならなかった。それは、頭の中を巡っている言葉と言葉のほんの隙間に紛れ込んでいて、そこにあるのは分かるのだが、どう取り出せばいいかは、見当も付かなかった。それでも私は、根気よくその隙間を追い続けた。すると、それは、何時も間にか、頭の外に出ていて、私の周りをグルグル回っているのが見えた。私は、大きな葉のような石を体の左右にくっつけたまま、立ち上がり、その隙間に向かって、飛び込むようにして駆け込んだ。両側の石が砕けて剥がれ、私は、身軽になって、その隙間を通り抜け、その先の真っ白なだけの中へと、身を投げ出す事が出来た。それが、言葉によっても示された、私の疾っくに知っていた、ここから抜け出す方法に違いなかった。私は、その通りにやり遂げたのだ。頭の中を巡っていた言葉は、綺麗に消えた。

しかし、それでいいのか。私の頭は、ただ言葉を巡らせるためにあるのだ。言葉が消えては、巡らすものがない事に苦しむしかない。私は、言葉を求めて、辺りを見回した。すると、私自身が、グルグルと回りだした。見上げると、球体の内側が見えて、そこに無数の同心円が、様々な色で水平に浮き出ては消えているのが分かった。その円の一本一本の線の中には、それぞれ或る事柄が、丸ごと、ぎっしりと詰め込まれているに違いない。

　ゆっくり手を差し伸べると、指の腹に、その線を立体的に感じ取る事が出来た。そこに指を押し付けると、指は、みるみるその中に削り取られて、消えて行く。その切り口を見たくはない。血も肉も見えない、真っ白で、真っ平らな切り口に違いない。血が噴き出すのを見るより、余程おぞましい。私は、更に強く、口に指を押し付けた。指だけでなく、手も、腕も、そして胴体までも、その同心円の密集に、削り取られていって、遂には、丸ごと全身が消えた。

　三人の男達は、それでやっと、私の見た幻覚を理解出来たようだった。彼らは、それをぼそぼそと語らいながら、強い風の吹き下ろす、草原の脇の斜面の細い道を、肩を寄せ合って、髪を逆立てながら、降りて行った。私はまた、元の姿に戻って、草原で、一人で、球形の鏡張りの建物と向き合った。その表面は、草原はもちろん、地平線の向こう側のものまでも、色々と映し込むようだった。その中に私は、私の姿も見付けた。その前に立っているのだから、映っ

て当たり前だ。しかし、私は、素早くしゃがみ込んで、そこから私の姿を取り除こうとした。私の姿は、そこに映ってはいけないもののように思えた。草の間から目だけ出して、また建物を見ると、その二つの目が映っているのが見えた。それもまた、どうにかしなければならないが、どうしていいか分からず、とにかく見失わないようにと、ずっと、その映った目を、見詰め続けた。陽が落ち掛けて、鏡の表面が、紫色に沈んで行く。そこに映るものの形が、その紫色に溶けて行っても、その目だけは、見失う事はなかった。

いや、それは果たして、私の目だろうか。ただの二つの穴ではないか。何処も彼処も、紫一色に染まっているのに、そこだけが紫に染まらず、空白なのだ。その空白の形が、鏡に映っているのだ。そして、これこそ、私が見た幻覚に違いない。あの三人は、途中で帰ってしまったばかりに、私の幻覚を見損なった。しかし、その考えは直ぐに揺らいだ。私が今見ているのは、幻覚ではなく、現実ではないか。私の目玉は、刳り抜かれていたのだから。

目玉を刳り抜かれた者でなければ、ここには居られない。だからあの三人は去ったのだ。いや、こんなただ風が吹くだけの暗い所に居ても、何も得るものはない。誰も、何時までも、こんな所に居たくはないが、目玉を刳り抜かれた私だけは、他にもう帰る所がなくて、ここにいるしかないのだ。（二〇〇一年十月十九日）

＊　＊　＊

梯子

　体のあちこちにゴムが結わえ付けられて、後ろにぴっぱられているように、もう前には進めなかった。前に進むためには、姿勢を変えなければならない。左の肩を突き出し、前屈みになって、膝を折った。足元の水溜まりが見えた。瓢箪のように真ん中が括れていて、水は濁っていて、底は見えず、案外深そうだった。この水溜まりのせいで、先に進めないのかも知れなかった。その先にガラスの壁があって、奥は真っ暗だった。私は、灯りを持っていた。或いは、掌が光るのかも知れなかった。灯りは、その壁の奥を照らすためのものではないだろうか。それなのに、水溜まりを照らしているのは、尤も、ここで灯りの角度を変えたところで、壁の奥までは届かない。ここでは、水溜まりしか照らせない。私のいる所は、周りより少しだけ高かった。私の周りの少しだけ低い所では、作業服姿の男達が、ショベルを持って、土を掘っていた。彼らの頭の位置が、少しずつ低くなって行く。私一人を、高い天辺に、置き去りにする積もりなのか。

どうしたら、水溜まりを越えられるのか。私は、男達の一人に、ここへ来て、この水溜まりから水が出て行くような溝を作ってくれないかと、頼んだ。男達は、一斉に笑った。笑い声は、緩やかに波打って風に乗る、薄っぺらな紙のようだった。もしその端が、私の肌に触れただけで、それは剃刀のように、私の身を切るだろう。私は、水溜まりの縁にしゃがみ込んで、様子を窺った。男達の背後も暗かった。しかし、壁の奥程ではない。男の一人が、私の方に眼鏡を放り投げた。

「そんなに見たければ、その眼鏡で見ろよ。それが気に入らないなかったら、他にもあるぜ。」

私は、それを掛けて見た。男達の背後が、微かに明るく、赤っぽく見えた。男の一人が、真っ赤な頬っぺに笑みを湛えて、私の側まで来て、ガチャガチャと両手一杯の眼鏡を、私の足元に置いていった。私は、とっかえひっかえ、眼鏡を掛けた。色が変わるだけで、明るさは似たようなものだった。しかしどれも、壁の奥を明るく見せる事だけは出来なかった。そうしている内に、水溜まりの水は、少しずつ減っているようだ。確かめようと、水溜まりの縁に目を凝らすと、足が滑って、水溜まりの中に、頭から落ちて行きそうになった。何本かの、筋肉質の太い腕が伸びて、私の体を力強く支え、私は、水溜まりに落ちる事なく、水溜まりを越えられたようだった。

しかし、私はまた、水溜まりの方を向いていた。その向こうには、同じような水溜まりが、幾つか見えて、その周りを男達が取り囲んで、土を掘っていた。闇を閉ざすガラスの壁は、後ろにあるに違いなかった。振り返って、そこに灯りを翳せば、その奥を照らす事も出来るだろう。そうせずに、私は、ただ、そこから眺め渡す事の出来る水溜まりの数を、ぼんやり何度も数え直すばかりだった。水溜まりの中も、また、闇なのだ。私は、順々にそこまで出向いて、その中を照らすべきかも知れない。そして、その数を確定出来た。その数の奥に、水溜まりの闇が、全て閉じ込められていて、その数さえ、憶えておけば、闇を頭の中に蓄えておけるようだった。忘れないように、それを、何処かに書き残さなければならない。私は、水溜まりの表面の間近に、両手の灯りを差し出して、水面を強く照らした。水は濁るばかりで、水溜まりは底なしのように思えてきた。しかし、数字を書き付ける事が出来るのは、水溜まりの底しかないのだ。周りの地面は柔らかすぎて、直ぐに掻き消されてしまうだろう。しかし、もし、更に前屈みになって、水溜まりの中に腕を差し込めば、そのまま全身、水溜まりの中に呑み込まれてしまうのではないか。

私の周りの男達は、土を掘り続け、ずっと下の方に遠ざかって、もうここは、私独りだった。私は、頭を垂らし、唇を水面に付けた。水は、唇より少しだけ温かかった。そこから私は、私の真っ黒な血を、ゆっくりと、水の中に流し込

んだ。血が、緩やかな螺旋を描く筋になって、水の中を落ちて行くのが分かった。やはり、水溜まりの深さは半端ではなかった。唇を微かに動かして、その筋を、数字の形にした。水から唇を離すと、その血の数字は、そのまま、水底に降りて行った。もし、数字を忘れたら、また唇を水に付ければ、その血の数字は、唇に向かって、浮き上がってくるだろう。

それから、唇が乾くのを待って、後ろを向いた。もう水溜まりの事は、気に掛けずに済みそうだった。闇を閉ざすガラスの壁は、全面ガラスで出来た伽藍のような大きな建物の正面だった。両側面に梯子か掛けられ、小さな痩せた男達の黒い影が、そこを次々に登って行くようだった。その上は、三角の屋根で、黒い影は、どれも、直に、そこからずり落ちた。私は、何をすればいいのか、分からなかった。私もまた、彼らを見習って、屋根に登るべきか。それとも、手の灯りを壁の間際に持って行って、そこから奥を照らすべきか。

三角屋根の天辺に、一つだけ、白い人影があって、私を見下ろしていた。私は、それに向かって、唇を尖らせ、細くて長い息を吐いた。それは線のように、伸び上がって、その白い影まで達した。その影は、私の息に向かって掌を翳し、それを跳ね返した。私は、それを、そこまで登って来いと言う合図に受け取った。私は、立ち上がって、フラフラと前に進んだ。しかし、右か左かを選ぶ事が出来ないまま、正面の壁に突き当たった。建物全体が、ミシミシと揺れた。

見上げると、白い影が、一本の垂直な線になって、真っ直ぐ上に、昇って行くのが見えた。私は、それを呼び戻したくて、声を上げた。私の声は、屋根と梯子の黒い影達を、全て吹き払った。

私は、空腹を覚えた。胸から腹までが、空っぽのガラスの容器のような感じで、それは、私の掌の灯りが、私の体の熱で作られているからに違いないと思った。私の体は、どんどん冷えていた。灯りも、何時まで持つか分からない。私は、両掌を、ガラスの壁にぴったり着けて、額をガラスの壁に擦り付けて、中を覗き込んだ。

ミニチュアのような、ちっぽけな白い梯子だけを、微かに照らす事が出来た。そこを、ちっぽけな人影が一つ、弱々しい足取りで登っていた。その掌から微かに光が漏れているところを見ると、どうやらそれは、私の姿のようだった。梯子の上は、闇だった。登り切ったら、多分、その向こうに真っ逆様に、落ちるしかない。私は、知らず知らず、その足取りに合わせて、額をガラスの壁にコツンコツンと打ち付けていた。そして、ちっぽけな私の姿が、梯子を登り切ると、その音が消えた。私の体は、ガラスの壁を擦り抜けて、建物の中に入り込んでいた。

中は真っ暗だったが、手探りすると、何一つ触れて来るものがなくても、私は、私の行く先を見通す事が出来た。闇を、見て取れるのだ。その内、手探り

さえ要らなくなって、私は、闇の中を、ごく普通に歩いて行けた。

　そして、そこがもう、建物の中ではない事も分かってきた。私は、建物を探して歩いているのだった。その目当ての建物もガラス張りで、闇を見通す私の目でさえ、何一つ見通せない程に、中は真っ暗でなければならなかった。

　私の頭の真上で、三角屋根の天辺にいた人影が、声を上げるのが、見えた。その影は、一本の垂直な白い線になったまま、ずっと私の頭の真上に浮かんでいたようだった。ただ、声は聞こえたが、内容は聞き取れなかった。私は、歩きながら、顔の前に、二枚の掌を並べて掲げ、そこに落ちてくる声を掬い取った。耳を澄ますと、声は、私に、先に進むなと言っていた。私は立ち止まり、なぜ先に進んでいけないのか、聞いた。

　辺りが少しずつ白くなって、見えていた闇が、呆気なく掻き消されていった。何も見えなくなった。どちらが前で後ろか、上か下かさえ、分からなくなった。微かに光を漏らす、掌だけが頼りだった。それを揺らすと、その光は小さくキラキラ輝いて、辺りに散って行くようだった。また声が聞こえてきて、その散って行く光を見るなと言っていた。私は、目を閉じてから、なぜ見てはいけないのか、聞いた。聞こえていた声が、聞こえなくなった。耳を澄ますと、左右の耳朶が、羽根のようになって、私の頭をクルクル回転させるようだった。その耳も何処かに消えてしまって、私は、クルクルクル回る一個の点かも知れなかっ

た。しかし同時に、自らの姿を、そのように、一個の点のように見なしてはいけないと、自らに言い聞かせてもいた。点は、遠ざかっていって、私は、静かに頷く事が出来た。遠くで、男達の笑い声が響いていた。しかし、私はそれを聞いていないのだった。それを知って、私は、静かに頷いた事を後悔し、それを取り消すように、身を後ろ向きに捩った。視界を閉ざした白い闇が、光に変わって行った。私は、何処までも見通す事が出来た。見通しても見通しても何も見えなくて、だからこそ幾らでも見通す事は出来ても、見通す事しか出来なかった。しかし、誰が見通しているのか。私は、もう一度、後ろ向きに身を捩ってみた。それをしたのは、私ではないのが分かった。その分かった私が、最後だった。（二〇〇二年十月二十三日）

＊

＊

＊

子供

眩しく明るい日が、何日も続いていた。その日は、特にそうで、私は、光に満ちた白っぽい広場を横切ろうとしていた。右手に、傾いた黒っぽい建物が、固まって三軒並んでいる。後は、草の生えた空き地ばかりのようだが、空が眩

しくて、はっきり見て取ろうともしなかった。人の姿はなく、その辺りだけ、街から取り残されているようだった。それ程広い広場ではなかったが、なかなか先に進まなかった。眩しさに気を取られて、地に足が着いていないようで、果たして、足を交互に前に送っているかどうかも、はっきりしなかった。私は、足元に目を落とした。珍しくひんやりした風が、微かに項を撫でた。その季節にしては珍しい、茶色の落ち葉が、一枚だけ、白い石ころの下に挟まっているのが目に入った。それを見て、自分が裸だと気付いた。私は、ひんやりした風を吹き出す、広場の北側の小さな日陰の側に、身を寄せて、持っていた紙袋の中から、白い服を取り出して着た。しかし、それを着て歩き出した途端、それは、衣擦れの音を立てる薄い風になって、広場を満たしている白い光の中に、溶け込んでゆくようだった。それなら、私は、光で出来た服を着ているに違いない。決して、服が溶けて、また裸になってしまう訳ではない。

　広場の突き当たりは、小さな駅舎で、やはり白い光を浴びて、瓦の屋根まで、白く染まっているようだった。その奥は、材木が積み上げられていて、黒い地面は、ぬかるんでいた。駅舎に入って、斜め奥の少し高い所にあるホームの方を見上げると、もう列車は入っていたが、動く気配はなかった。改札口も閉まったままだった。私は、一度外に出て、直ぐ横の白く塗られた木の引き戸を開け、天井の高い、広々とした待合室に入った。天井の直ぐ下に、ぐるりと広い

窓が開いていて、外と同じくらいに明るかった。そこは、何かの資料館のようでもあり、背の高いガラスのケースがズラリと壁を取り囲み、部屋の真ん中には、背の低いケースが並んでいた。特に、東側は、天井付近まで、殆どガラスケースばかりで、その真ん中だけ、小さく四角く凹んでいて、その中に係員が一人入って、ジッと前を向いて腰掛けていた。私は、その係員に、ここには何が陳列してあるか、聞きたかった。しかし、それは、見れば分かるに違いない。聞いても、冷やかしと取られるに決まっている。しかし、私には、ガラスケースの中が、巧く見られないのだった。やっと、その中の一つか二つのものを見て取れても、それらはどれも、何処にでも転がっている、間違えてゴミ箱に投げ込んでしまいそうなものにしか、思えなかった。

　日焼けしたがっしりした中年の男が、足早に踏み込んできて、係員の所に行き、何かの券を買ったようだ。受け取った色の着いた紙切れを手にすると、私の直ぐ側の長椅子に来て、腰を下ろし、突っ立っている私を、丸い目で見上げた。私は、その視線に押されるように、部屋の真ん中の展示品を見て回らなければならなくなった。もし足を止めたら、まだ何の券も買っていないままで、私は、どうしてここに居るか、怪しまれるだろう。

　しかし、そうではなさそうだった。歩き回る方が、怪しまれるのだ。別の痩せた背の高い係員が私の側にやって来て、何を見ているのか、聞いてきた。仕

方なく、逆に私は、ケースの中を指差して、陳列されてあるのが何なのか、聞いた。係員は、何か少し呟いて、無表情になって黙り込み、身を強張らせるように、立ち尽くした。私の問は、余程、的はずれだったのだ。それなら、これらは、陳列されているのではなく、何か別の目的で、ここに置かれているに違いない。私は、居たたまれなくなって、外に出た。陽が殆ど真上にあって、広場は、更に真っ白く輝いた。白い引き戸の前にも長椅子が置かれていて、白い日傘を差した女が、広場に背を向けて腰掛けていた。その横に、その女の息子かも知れない子供が一人居て、私の姿を見たからなのか、椅子から立ち上がって、窓から、待合室の中を、眩しそうに覗き込んだ。いや、今私が出て来た所は、待合室ではないのではないか。駅の待合室なら、改札口の脇にあった筈だ。子供と一緒になって、窓から中を覗き込みたくもなったが、私に見て取れるものは、何もなさそうだったので、やめた。子供も直に、窓から離れた。

の広場の向かい側の、傾いた黒っぽい建物は、三軒とも、どうやら土産物屋に違いなかった。やや後ろから陽を受けていて、中は暗かったが、殆どがらんどうであるのが、離れた所からでも分かった。陳列ケースも幾つか置かれてあるが、中にものが入っているようには見えなかった。他に、目に入るものもなく、その土産物屋を眺めているしかなさそうだった。

しかし直ぐに、駅舎の方から、透き通った冷たい風が吹いてきて、私は、駅

舎の出入り口に目を向けた。そこから待合室の半分くらいが見えた。厚着をした人達が、頬を赤くして、盛んに出入りしていた。その奥の改札口の横に、オレンジジュースの自動販売機があって、母親が子供に、紙コップに入ったジュースを与えていた。そこは、特に、冷たい風が強く吹き抜けて行く所で、子供は、なかなか、冷たいジュースに口を付けられずにいるようだった。私は、大勢の人達が居るのに惹かれ、駅舎の方に歩き出していた。広場を満たしていた白い光を、冷たい強風が吹き払い、広場は、澄んだ空気に包まれて、それぞれのものの色が、その形と共に、一斉にくっきりと現れて、キラキラと輝くようだった。しかし、そのまま駅舎の中に入ったら、待合室を通り過ぎて、子供と同じように、冷たいオレンジジュースを飲まなければならなくなりそうで、私の足は、駅舎の出入り口の前で、大きく逸れた。

　初めは、北西の強風に煽られながら、途中からは、白い光にだけ包まれながら、私は、広場を横切って、三軒の内、駅舎から一番そっぽを向いている、西側の土産物屋に入った。するとそこは、土産物屋にしては寂しい感じはしたが、そこそこの商品が、店全体に満遍なく並べられてあった。ただ、誰も居なかった。奥の部屋も丸見えだったが、やはり誰も居なかった。私は、店番が戻ってくるのを待とうと、駅舎の方を眺めて、店の中に突っ立っていた。風など少しも吹いていなかった。ただ、駅舎の中の人達は、誰も、髪を靡かせ、肩を聳や

かし、寒そうに口を結んでいるようだった。駅舎の屋根も、陽を浴びて輝いてはいたが、白くは見えなかった。

　そうして待っている内に、私はまた、自分が裸であるのに、気付いた。剥き出しの肌のひんやりした感じが、全身に伝わった。日陰に入ったからだ。白い光の中に出て行けば、直ぐに、その光で出来た布で、私の体は覆われるに違いない。しかし、不意に店番が帰ってきたら、私は、裸を晒す事になるのではないか。そこに裸で居るべきか、ほんの数歩前に出て、光の中に立って、布を纏うべきか、迷った。もし外に出ても、冷たい北西の風が、白い光を、広場全体から吹き払ってしまっていないとも限らないのだ。そうなったら、私は、裸で、寒風に晒されなければならないだろう。しかし、冷たい風が広場から白い光を吹き払ったら、それはきっと、土産物屋の中にも吹き込むだろう。それなら、直ぐにでも外に出て、少しでも白い光の布を纏って、寒風に備えるべきなのだ。

　私は、駅舎に向かって、何も見ず、何も考えず、自分が裸だろうとなかろうと構わずに、真っ直ぐに走った。広場は、白いままだったが、縮んでゆくようだった。ただそれは、私がそこを裸で横切っているからでも、そこを冷たい風が吹き抜けているからでもなく、そこに人の往き来がされるようになったからだろう。私も、その中の一人になったような顔をしようとした。ただ、恐らくはそのせいで、私は、駅舎を直ぐ目の前にした辺りで、自らの姿を見失ったの

かも知れない。

　靴音が、立て続けに私の耳を打った。私は、オレンジジュースの自動販売機の前にいて、疲れた体で、コインを入れていた。剥がれ掛けたコンクリートの地面は、濡れてネバネバしていた。肌があちこち、チクチクして、私は、普通に服を着ていた。改札口に駅員が立っていて、そこを行き過ぎる客に、大きな声で、列車の案内をしている。客達は、特に厚着でも薄着でもなかった。私は、オレンジジュースでいっぱいになった紙コップを取り出して、口に付けた。ジュースは、少しも冷えていなかった。私は、右も左も分からない子供だった。それだけは、自分でも呆れ返るくらい、紛れもない事実だと思えた。直ぐ横の売店の中年の女が、私の方を睨んでいた。私が、冷えていないジュースに文句を言わないように、機先を制している積りかも知れない。周りに、私を導いてくれそうな、知った者は誰も居なかった。売店の向こうの空は、明るかったが、青の中に微かに金色が混じって、陽が傾き掛けているのを知らせていた。改札口も待合室も、人が流れていたが、到底私には、その中に入る事は出来そうになかった。そちらに向かっても、何をどうしていいか、分からないからだ。ひょっとして、私は、今、待合室の客達が乗り込もうとしている列車から、降りてきたばかりではないのか。ジュースと同じ、生ぬるい風が、売店の奥の方から吹いてきて、私の体を、愈愈疲れさせた。ぬるいジュースは、不味くて、

とても喉を通らなかったが、それを何処に捨てていいか分からずに、私は、自動販売機の前で、コップを口に付けたまま、突っ立っていなければならなかった。（二〇〇一年十月二十七日）

＊　　　＊　　　＊

糸

四人の痩せた男に、四方を囲まれていた。四人とも、私に背を向けていて、頭に大きな穴が開いていて、そこから、礫のような塊が、次々に飛び出ていた。私には、四方の四人が、どれが前でも後ろでもなく、背を向けた全く同じ姿に見えた。私の目が横に長く延びて、一繋がりになって、私の頭をぐるりと巡っているに違いない。

礫のような塊は、地面に落ちる事なく、真っ直ぐ斜めに、何処までも高く昇って行ったが、遠ざかってはいないようだ。それらは皆、何時までも同じ大きさに見えた。そして、何時の間にか、それらは全て、私の頭から生えた太く丈夫な白い糸と繋がっていた。私の頭蓋がグルグル回り、それらも、空中でグルグル回った。私は、四人に、それらの数が多すぎると文句を言った。四人は、

自分達の頭を手で押さえて、穴を塞いだが、それきり何もする気配がなかった。私は、我慢出来ずに、立ち上がった。頭の、目から上だけが宙に浮いた。糸で繋がった礫のような塊が、プロペラのようになって、頭の上半分だけが、物凄い勢いで、空に昇っていった。

　地上は、どんどん遥か下に、遠ざかって見えた。四人の男達が、その場を動かずに、私を見上げているのが分かったので、私は、彼らに声を掛けた。しかし、目から下は、地上に残したままだ。私の声は、地上の私の口から、彼らの耳に伝わっただろうか。地上から離れすぎて、もう彼らの姿も、頭の天辺が小さな点に見えるだけになってしまった。

　そこは、遥か空の上なのに、板張りの床の上に、頭の上半分の私は、転がっていた。後ろ向きの、二本揃えられた、女の細い脚が見えた。礫のような塊は皆、何処かへ行ってしまったようだったが、それでも私の頭には、太く長い糸が、何十本も生えたままで、それらは束ねられて、女の腰に繋がっていた。女がほんの微かに腰を捻ると、床の上を、毛むくじゃらの大きな犬が歩き回っていて、頭の上半分の私を蹴飛ばした。私は、ゴロゴロと大きな音を立てて、板張りの端から落ちた。私が犬を睨み付けると、犬は、女の腰に飛び掛かって、糸の束を噛み切った。

　私は、自由を手に入れた気分で、冷たい風の中を、クルクル回りながら、飛

び回った。しかし、噛み切られた筈の糸の束の端は、礫のような塊を全て一つに集めて固めたような、巨大な塊に結び付けられていて、それが、物凄い勢いで落ちて行くと、私も、独楽のように回りながら、真っ逆様に、地上に向かって落ちて行くしかなかった。私は、三六〇度一繋がりの目を、四等分し、四方を別々に見詰める事で、自らが独楽のように回るのを止めた。四つの目は、空中で、吸盤のように何かに吸い付くようだった。

　下の方から、四人の男達の声が聞こえてきた。口々に、私のしている事を、激しい口調で詰っているようだった。しかし、良く聞いてみると、彼らは、私が頭の上半分になって空高く飛んで行ったのを、非難しているのではなく、私が、彼らの姿を、目を四つにして、別々に見ている事を、非難しているのだった。私は、自分が何処にいるのか分からなくなった。

　私は、自分が何処にいるか、はっきりさせたくて、パックリと大きく開いた傷口から、私の肉片を飛び出させた。いや、それはどうやら、私の傷口ではなさそうだった。四人の男達の内のどれかなのだ。私は、四つの目を見開いた。その目つきが、男達の気にひどく障ったのだ。背を向けていた男達が、一斉に私の方を向き直った。四人とも、顔面ごと大きな穴を開けていた。彼らの怒りの拳を受ける寸前、その顔の事を彼らに告げると、拳はどれも空を切った。空を切る音が、私の耳元を掠め、地面の上を這うようにして、飛び過ぎた。私は、

その音の行き先を目で追って、地平線を見て取り、自分が何処にいるかを知る事が出来たように思えた。

　私は、地上に居た。知れたのは、しかし、それだけだ。素早く立ち上がると、頭の上で、数え切れない程の礫のような塊が、宙に舞っているような気がした。それを見上げた途端、私の体は、板張りの床に仰向けに横たわり、頭を激しく左右に振っていた。

　頭が割れて、割れ目から、脳の欠片が細かく飛び出すのが見えた。細い脚の女が、膝を付いて、不機嫌そうに、その汚れを雑巾で拭き取り始めた。拭いても拭いても、私の頭の割れ目は床を汚すので、女は直に諦めて、静かに出て行った。殆ど入れ替わりに、四人の男達が、どやどやと踏み込んできて、四人掛かりで私の体を蹴って、床から突き落とした。私は、何処だか分からない所を、ゴロゴロと転げ落ちていった。上の方から、私を呼ぶ四人の声が聞こえてきた。四人の足は、私の体に突き刺さったままだから、戻って来て足を返してくれと、言っているのが聞こえた。転げ落ちながら、自分の体をまさぐると、八本のナイフが、体に突き刺さっているようだった。私は、その一本一本を順に抜き取っては、頭の割れ目に突き刺していった。八本目のナイフを突き刺して、割れ目は塞がり、私は、立ち上がる事が出来た。

　私は、ヌルヌルした斜面を、少しも滑らず一気に駆け上り、男達の待ってい

る筈の所に戻った。誰も居なかったので、急いで辺りを見渡すと、その勢いで、ナイフが、八本とも頭の割れ目から飛び出た。飛び出るたびに、割れ目を更に深く抉った。八本のナイフは、その割れ目と糸で繋がっていて、プロペラのように回って、私を宙に引き揚げた。私は、激しく体を揺すって抵抗した。糸が順に一本ずつ切れて、私はまた、何処かを転げ落ちて行った。それを引き留めるものは、何もなさそうだった。ただ転げ落ちて行くだけなのは、心地よかった。しかし、長くは続くまい。私は、一時の憩いを満喫しようと努めた。

　割れ目が自ずと塞がると、私はもう、転げ落ちている訳にはいかなかった。立ち上がって、遠くを見渡すと、四方から四人の男達が、私目掛けて、全速力で走って来るのが見えた。そのままジッと待っていたのでは、直に私は、四人の体に一斉にぶち当たられ、私の体は、その真ん中で圧し潰されてしまうに違いない。私は、何とか逃げようと試みた。しかし、そうして焦る程、足がふらついて、二、三歩踏み出しても、また元に戻ってしまうのだった。ここを動けないなら、穴を掘るしかない。私は蹲って、地面に爪を立てた。穴は、思いの外、順調に掘り進められ、私の体は、穴の中に収まった。

　頭の直ぐ上で、物凄い音がした。四方から来た四つの体が、真面にぶつかったのだ。その体は、擦れ合って燃えて煙になって、細かな灰が、私の頭に降り掛かった。四つのそれを振り払おうとすると、頭には、八本のナイフが突き刺さっ

ていた。全身を穴に隠した積もりだったが、頭の上半分だけは、穴の上に出ていて、また男達の足が突き刺さったのだ。四人の男達が煙になってしまって、私は、自分の頭をどうしていいか分からなかった。

　穴から出た。恐らく、体を四つに裂いて、男達の来た四方に向かって、走り出さなければならないのだ。そうすれば、私は、助かるに違いない。しかし、そんな事が出来る筈はない。私はただ、穴の脇で、独楽のように静かに体を回転させるしかなかった。ナイフが順に飛び出して、頭に、八つの傷口が開いた。そのナイフが、硬い地面から跳ね返ってきて、私の目を切った。私の目はまた、一繋がりになって、頭をぐるりと巡るようだった。

　私は、走り出した。体は一つだったが、私の目が見渡せる三六〇度の地平線の全ての方向に向かって、走っているようだった。八つの傷口から、また脳の欠片が、細かく飛び出ていた。きっと、それをまた拭き取ろうと、女がやって来るに違いない。私は、わざと頭を振るようにして、何時までも、走り続けようと思った。しかし、走っている内に、同じ所をグルグル回っているだけと、どうしても気付いてしまうのだった。気付かない振りをしようにも、地面に突き刺さったキラキラ光る八本のナイフに、八方を取り囲まれ、その中から出られないでいるのが、嫌でも分かってしまう。ただ、それが分かったからと言って、走るのをやめてしまってもいいのだろうか。走るのをやめたら、また八本の

ナイフが、私の頭目掛けて、飛んで来そうだった。八つの傷口から、もう何も飛び出さなくなった。私の脳味噌は、全て地面に撒き散らされた。もう何も考えなくていいのだ。私はただ嬉しくて、止まれの合図を待ち続ける犬のように、走り続けたようだ。

実際、私は、犬のように四つ足で、地面を這っていた。そうして、飛び散った脳の欠片を手で掬い集めては、また傷口から頭の中へ、それらを押し込んでいたのだ。粗方、頭の中が脳の欠片で満たされると、私は、立ち上がって、八本のナイフを地面から引き抜いた。それでも、私は、地面の八つのナイフの跡に、八方を塞がれて、その外に出る事は出来なかった。その内に、八本のナイフは、私の頭と糸で結ばれている訳でもないのに、私の頭の上をプロペラのように回り出し、私の体は、愈愈宙に浮くようだった。（二〇〇一年十月二十九日）

＊　＊　＊

坂道

銀色の小さな機械を右手に持って、粘っこい黄色の土の急な坂道を、駆け下

りていた。坂の下には、白く細長い、大きな建物があって、そこで、手にしている機械を使って、或る仕事を頼まれていた。その仕事が何なのかは、もちろん分かってはいたが、それを思い浮かべようとすると、何も思い浮かばなかった。しかし平気だ。それより建物に辿り着く事が先決だ。手にしている機械に目を落とすと、それは強い日差しを受けて、ただ眩しく銀色に輝くだけで、その形を見て取れなかった。

　つい先程まで、その建物の中で、仕事をしていた。或いは、しようとしていた。しかし、機械がおかしな動きをするのに、気付いた。その機械の５センチくらいの細い溝の中に、それと同じ幅の長い銀紙が、一定の間隔で、入って行かなければならないのに、逆に、中から、だらだらと銀紙が外に出てきてしまう。それを直そうと、直ぐにその建物を出て、走って坂を登って、見晴らしのいい所で、機械を直した。それからまた、その建物に戻ろうとしているのだ。ただ、時間が心配だ。建物の中には、沢山の人間が、色々な所から集まって来ていて、それぞれが役割を済ませば、さっさと帰ってしまう。彼らが帰ってしまってからでは、幾ら機械の調子が良くても、私だけでは、何の仕事も出来ない。それに、私の仕事が巧く行っているかどうかに関心を持つ者は、誰も居ないだろう。誰も、私のために、待っていてはくれないのだ。

　坂道が、大きく右にカーブしていて、そこからは、日差しを照り返す海が、

一面に見渡せた。それを見て、足の筋肉が突っ張っているのを感じ、足が縺れ、危うく倒れそうになった。海と反対側に居る誰かが、私の腕を掴んだ。もし、そうしてくれなかったら、私は、そこに右手を着いて、機械を潰してしまったに違いない。顔を覗き込むと、うっすらと髭を生やした中年の男だった。男の直ぐ後ろには、２メートル四方くらいの、銀色の板が、ほぼ垂直に立て掛けられてあった。しかしまだ、銀色の薄い所や、全く塗り残してある所も、あちこち目についていて、私は、気になって、聞いた。

「まだ、仕事の途中なんですね。」

「それは、まだ、壊れたままだぜ。」と、男は、私の問いに答える替わりに、私の機械を見て、言った。

男が、手を伸ばしたので、機械は、男の手に渡った。機械の溝から、銀紙が、だらだらと出て来た。私は、男の足元の缶の中に、銀色の塗料と刷毛を見付け、それを手に取って、塗りかけの板を仕上げる事にした。男は、ニヤニヤ笑いながら、両手を後ろに回した。カチャカチャと音が聞こえてきて、男が、私に隠して、機械をいじっているのが分かった。その音を聞きながら、刷毛を動かすたびに、眠気が襲ってきた。その度に男に呼び掛けられて、目を覚ました。それを繰り返していると、目を覚ました時に見える景色の色が、透き通ってゆくようで、頭も、冴え渡ってゆくようだった。その分、眠気も急激になって、目

を覚ました時に、眠った覚えさえなかった。

　坂を、一人しかいない仲間が登ってきた。眠気が襲ったので、手を止めて、何とか頑張って眠気を堪えた。仲間は、私に、もう余り時間もないのに、こんな所で何をやっているのかと、言っているようだった。その先は、眠くて聞き取れない。替わりに、男が聞いているようだ。機械が直っていない事を、説明してくれているに違いない。仲間も、急くのを我慢して、聞いてくれているようだ。男が呼び掛けて来たので、私は、勇んで目を見開いた。景色も頭も、ひどく濁っているようだった。機械を手渡されると、銀紙は、カチカチと音を立てて、溝の中に、一定の間隔で収まっていった。仲間は、私の左手を掴んで、急ぎ足で坂を駈けた。いや、間違って男の手を掴んでいた。二人が、よろけながら、坂を降りて行くのが見えた。

　私は、また刷毛を缶に突っ込んで、板に塗料を塗りだした。二、三度、手を動かしただけで、板は全面、均一な銀色に仕上がって、そこに更に塗料を乗せれば、却って、その綺麗な仕上がりを汚してしまいそうだった。私は、少し離れて、全体を見た。それは、大きな鏡のようで、私と、その背後の海と、白く細長い建物が映った。目を凝らすと、海は、海底までが透き通って見えた。それなら、建物の中も、透き通って見えるに違いない。私は、鏡に映る白い壁に向かって、更に目を凝らした。すると、男の姿が見えた。彼は、ただ機械を手

にしているだけで、使い方が分からず、他の者達が、忙しく立ち働いている中で、ただそれを眺めて、小さくなっていた。仲間の姿も見付けたが、自分の仕事をこなすだけだった。そして、人の数がみるみる減りだした。

どうやって建物に辿り着いたか、思い出せないだけなのかも知れないが、一瞬の内に、私は、建物に移動したようだった。男から機械を奪い取って、仕事の出来る場所を探そうと辺りを見渡すと、もう清掃係しか居なかった。男も、肩を落として建物から出ていった。機械の溝から、銀紙がだらだらと出て来た。機械は直っていなかった。それなら、私がもっと早く戻ったところで同じ事だ。それにより、坂の途中の大きな鏡が気になる。あれを仕上げたのは私だ。せめて、それによって、ここでの失敗の穴埋めにしなければ、顔が立たない。

男の後を追おうと、外に出た。坂に通じる道が、分からなかった。坂も、そこをノロノロと登る男の姿も見上げられたが、歩き回っている内に、直に陽も暮れて、それも見えなくなった。

私は、疲れて、体を休めようと、何時しか白い建物に戻っていた。少し高い北側の小さな窓を、椅子に立てて膝を付いて、誰かが見上げていた。建物の中の灯りは、最小限に抑えられていたので、男なのか女なのかも、分からなかったが、その者は、私に気付いたのか、軽い身のこなしで、くるりと向き直って椅子から降り、私の脇を通って、何か挨拶の言葉らしきものを低い声で呟いて、

ドアから出て行った。その足音が消えてやっと、それが若い女の声で、「おはよう、おはよう」と、尖らせたままの唇を殆ど動かさず、二度続けて言ったのだと分かった。私は、窓に近付いて、夜の景色を見上げた。もう一棟の、白く細長い大きな建物が、光を浴びて、闇に浮かび上がっていた。しかし、それは、私の居るこの建物が、坂の途中の鏡に映ったものかも知れないではないか。幾ら目を凝らしても、そうであるともないとも、判別は出来なかった。

　音のする方を振り返ると、エレベーターのドアが開いて、中から中年の女が出て来た。エレベーターの中だけは、明るかった。女は、目を丸くしたまま、私を睨み付けた。私は、女に、それとなく隣の建物について聞いた。すると、女は、隣の建物ではなく、私達の居る建物について、建物は一つしかないのを前提にしたような事を、語り出した。やはり、隣には、建物などないのだ。私は、鏡に映った建物を見ているのだ。

　逆に、私は、女に、今さっきまで、窓の側に誰か居るのを見掛けなかったか、聞かれた。見ただけの事を答えると、女は、嬉しそうな顔をした。それが誰なのか尋ねると、鏡に映った別の女の姿だと、彼女は答えた。私は、椅子の上で立ち上がって、高い窓から、下を見下ろした。建物に沿った舗装された青い道を、白銀色に輝く服を着た女が、こちらを見上げて、行ったり来たりしていた。私は、振り返って、直ぐ脇の壁に目を凝らした。私が、坂の途中で仕上げた銀

色の板が、立て掛けられているのが、分かった。
それなら、目の前に見える建物は、鏡に映ったものではなく、本物なのか。
もう一度、しっかり目を凝らすと、真ん中辺りの階の窓から、こちらを見下ろしている者に目が留まった。その髪が短くて、肩が尖っていて、足が細いのまでが、見分けられ、どうやら、私の姿だった。それなら、それが、本物の私で、ここでそれを見ているのは、壁に立て掛けられている銀色の板に映る私なのだろうか。私は、それをそのまま、中年の女に問い掛けた。女は笑って、
「そんな時のために、それがあるんじゃないの？」と、私の右手の機械を指差した。
銀紙は、すっかり中に収まっていた。ボタンを押すと、カチカチ音を立てて、溝から、銀紙が、一定の間隔で出て来た。その銀紙には、鏡に映ったものだけが写し取られるのだった。今さっき、椅子に膝を付いていた女も、私の姿も、隣の建物も、銀紙の上に乗っていた。銀紙自体が光を出していて、辺りが暗くても、それらは、綺麗に見て取れた。
「今日は、あなたが居なくて、大混乱でしたよ。これからは、気を付けてね。」
女はそう言って、エレベーターに乗って、行ってしまった。入れ替わるように、ドアから、下の道を歩いていた女が、少しだけ息を切らして、入って来た。私はまた、窓から道を見下ろした。誰も居なかった。女は、鏡に映っている私

の姿にびっくりして、それから、その彼女の姿を見てびっくりしている私の顔を見て、声を立てて笑った。それから、女は、右に左に、さも楽しそうに、小さな掛け声と共に素早く動き回って、壁に据え付けられた大きな鏡を、壁から外し、それを抱えて、エレベーターの奥の倉庫に仕舞おうとした。手伝ってくれと言うので、手伝おうとすると、女は、更に甲高い笑い声を、他に誰も居ない部屋中に響かせた。私は、右手に確かに機械を持っている事を確かめて、倉庫に仕舞われる前に、鏡の中から外に出て、全て灯りの消された真っ暗な建物の中を、一晩中うろつき回っていなければならなかった。立ち止まったら、その姿は、たちどころに闇に溶けてしまうようだったから。

昼間、刷毛を握りながら寝たせいで、全身に力が漲り、足取りは確かだった。思わず、笑いが込み上げてきた。笑うと、その声は、先程の甲高い女の声と全く同じように、誰も居ない部屋や廊下を響き渡って行った。（二〇〇一年十一月一日）

＊　＊　＊

垢

　私達は、ちゃんと許可を取って、何頭かの猪を追い掛けていた。私の直ぐ脇で、仲間の二人が、獲った猪をどう料理するか、言い争っているのが、耳に入った。私は、決して、食うために猪を追い掛けているのではなかった。私は、猪の体を、石のように磨き上げ、その真上に向けた口から水を噴き上げる、噴水を作りたかった。そう思って前を見ると、私は、独りはぐれていて、冷たい浜風が左から吹き付けてくる松並木の脇を、その先に何があるかも分からず、足を引きずって、進んで行かなければならなかった。一番端の松まで来ると、優に二メートルはある、長四角な頭の大男が、木の皮を囓っては、樹液を吸っていた。もう一人、それを指図している丸っこい小さな男が居て、私は、その男に、私の行く先を聞いた。私は無視されたので、その男の小さな顔を殴った。小男の体は、何処かに吹っ飛んで、その立っていた所から真っ直ぐな道が開け、その先に役所の建物が目に入った。サイレンの音が聞こえると、頑強そうな男達が、その建物の入り口に殺到するのが見えた。私も遅れてはならないと、走り出したが、私独りが、ずっと遅れているのはどうにも出来なかった。

　建物に入ると、私は水の入ったコップを渡されて、その水の匂いのする所に行くように言われた。私は、コップの水が零れないように注意しながら、直ぐに階段を駆け上り、目当ての階に辿り着いて、真っ直ぐその部屋のドアに向かった。ドアを開けると、そこは薄暗い狭い部屋で、傷だらけの机が一つある切

りだった。私は、紙を一枚渡された。会合の内容が書かれてあった。それは、前々から、私一人が、頑張って、会合を開く事にさえ反対していたものだった。直ぐに、会議室の場所を聞きだし、急いでそこへ行き、ドアを蹴破った。彼らは、一斉に手を挙げようとしていた。私抜きで、結論を出そうとしているのは明らかだった。私は、ドアを蹴って傷めた左脚を引きずりながら、中に踏み込んで、口から水を吐いては、彼らに掛けていった。「バアー」と声を出せば、水は幾らでも口から出た。そこに居たのは坊主ばかりだった。彼らは、口々に私を非難したが、椅子から立ち上がる者は、一人も居なかった。

彼らの内の、部屋の奥の壁を背にしている　いかにもリーダー格のような坊主の袈裟が濡れると、その下から、髪の長い細面の女の顔が透けて見えた。他の坊主達もそれには驚くようだった。リーダー格の坊主は、一人立ち上がり、驚いている顔に向かって、箱から灰を掴みだしては、投げ付けた。坊主達は、灰まみれになって、部屋の真ん中に体を寄せ合って集まり、ここを出てみんなで行水を浴びに行く相談を始めた。

女が、袈裟の下から姿を現した。ふっくらした顔の割りには、体は痩せていて、小さかった。女は、私に近付き、黙って水を吐いた。恐らく、私に掛ける積もりだったのだろうが、水は、顎を伝って、自らの胸に掛かるだけだった。胸の周りはびしょ濡れになり、服地が透けて、肋骨が浮いて出た。黙って水を

吐くからいけないのだ、「バアー」と声を出しながら水をはかなければならない、と、私は、女に注意した。女は、自分の胸を濡らした事で頭がいっぱいなのか、ただ体を硬直させるだけだった。私は、彼女を軽々と抱き上げ、まだ、ただ一人残っている、リーダー格らしき坊主の腰を蹴飛ばして、そこを出た。

　廊下では、他の坊主達が、一列になって、壁に向かって小便をしてた。その流れが、太い一本の筋になって、その先の階段を流れ落ちてゆく。私は、女を片腕で抱き上げたまま、その流れに乗って階段を降りた。まるで私の腰から下は、小さなボートのようだった。見上げると、坊主達が一斉に後を追って来ていたが、びしょ濡れの階段に足を滑らせて、階段の角に頭をぶつけて、額を割り、血と小便まみれになっているようだった。

　外に出て、陽に当たると、女の体は、直立したまま更に硬直した。私は、それを、私の膝に打ち付けて、真っ二つに折ってしまいたい衝動に駆られたが、木陰の郵便ポストの奥から現れたサラリーマン風の男が、無駄な殺生はやめろと嗜めたので、思い留まった。その替わり、私は、女の体を前に突き出して、その男の腹に突き刺し、そこから走って逃げた。先程の、血と小便まみれの坊主共が、直ぐ後ろに迫っていたのだ。彼らは、ドタバタと物凄い足音を立て、それを耳にする私の足を重くする程だった。

　私は、噴水の池の側まで来た。その周りでは、学生達が、レポートを書いた

り、本を読んだりしていた。私は直ぐに、噴水池に入り、飲めるだけの水を飲んだ。学生達は、みるみる痩せ衰えて、骨と皮になっていった。池の底に、先程のサラリーマン風の男の水死体が見付かった。腹に大きな穴が開いていたが、女の姿はなかった。坊主共が直ぐ後ろに迫っていた。私は、振り返り、水を鋭く吐いては、坊主共の腹に、打ち付けていった。彼らは、その衝撃で、首の骨や腰の骨を折って、その場にくずおれた。しかし、役所の階段を降りる時に割った額から、血を噴き上がらせて、直ぐに甦り、更に私に迫った。私は捕らえられ、水のなくなった噴水池の底に、大の字に横たえられたまま、縄で縛られて固定された。それから、私の腹に、あの髪の長い痩せた女の硬い体を突き刺す事に決まったが、彼女の行方が知れなくては、私の処刑は、延期されるしかなかった。

　その替わり、私は、口から水を噴き上げる事を強要された。少しずつ池に水が戻っていった。夜になって、私の直ぐ隣で横になっているサラリーマン風の男の死体が、徐々に水に溶けてゆくのが分かった。噴水池が満たされると、私は、その死体の溶けた水を飲んでは、吐かなければならなかった。

　深夜、髪の長い痩せた女が、池の縁にやって来て、池の方を向いて、一人佇んだ。夜風が、彼女の体を芯まで冷やすのを待つかのようだった。それから、女は、池の水を、細かく震える手で掬って、一口、含んだ。サラリーマン風の

男の死肉の味を、その舌に感じ取った彼女は、池に顔を突っ込んで、池の水を飲みだした。池の水は干上がって、私は、水を飲むことも吐く事も出来ず、私の喉は、焼けるようだった。

　彼女は便意を催したらしく、顔を歪めて、ベンチの陰にしゃがみ込むと、ビチャビチャと、尻から、サラリーマン風の男を、ひり出した。と言っても、彼はもう、素っ裸で、全く何の特徴もない男でしかなかった。女は、そのぐったりしたままの男の体を、ベンチに乗せ、その体にこびり付いた汚物を、舌でベロベロ舐めだした。男の体は、ツルツルになって、月明かりに白銀に輝いた。私の喉は、もう限界だった。喉の粘膜が、ザラザラした風に裂けて、口から血が噴き上がった。それは、私の目には、月まで届く程だった。そうして、月を一巡りしたかの私の血の殆どは、女と男の上に降り掛かった。女だけが、私の血を弾いた。女は、血塗れの裸の男の肌を揉んで、私の血を、男の肌に擦り込んで行った。男の肌は、すっかりピンク色になった。それから、女は、涸れた噴水池の中に、足音をコツコツと立てて入って来て、私にお礼を言った。それして、お返しに、私の体を舐めてくれる事になった。

　私は、大の字に縛られたまま、裸にされ、彼女に舐められた。しかし、私を舐めてどうするのか。私の体は、幾らか自分の返り血を浴びてはいるが、別に汚物がこびり付いている訳でもない。きれいなものだ。ところが、彼女が私の

体に唾を吐き、それを舌先でベロベロと捏ね回すと、私の肌から、ドロドロの垢が、次々に浮いて出てくるのだった。その、唾と垢の混じったドロドロが、次第に池に溜まって、私の体は、池の底から少しずつ浮き上がっていった。そのドロドロの水位は、愈愈上がり、遂に、浮力で、私の手足を縛っている縄が切れた。私の体は、そのまま、池から溢れ出す唾と垢のドロドロに乗って、池の外に滑り出た。女は、名残惜しそうな風情で、やっと舐めるのをやめた。私の肌はもう、内臓の色が透けて見える程、白かった。その白さに怯えて、私は、身動き一つ出来なかった。女は、二体の男の体を、石畳の上に並べて、自分の長い髪を一本ずつ抜いては、それで、二つの体を結び付けていった。

　彼女は、全ての髪の毛を使って、二人の体を結び付けた。二つの体は、微かに肌も覗いているが、殆ど彼女の黒い髪で覆い尽くされた。丸坊主の女は、その男の腹に片足ずつを乗せて立ち上がると、男の二つの体を滑らせて、自分の思い通りの方向に進んで行けた。

　朝が来て、坊主達がまたやって来た。朝日を受ける坊主達の顔にはどれも見覚えがあった、真っ黒に日焼けした、猪を追う仲間達の顔だった。女が、広場を一回りして、彼らの側に近付いた。私は、彼らに声を掛けた。聞こえてはいるようだが、私の姿に気付く者はいなかった。女も坊主頭で、誰も、彼女だとは分からないのだった。それより彼らは、噴水池に溢れている唾と垢のドロド

ロの匂いに、いたく刺激され、欲情して、我先に池に飛び込んで行った。坊主達の体を次々に呑み込んで、池の表面は、丸々と盛り上がった。暫くして、ポコンポコンと、弾けるような音がして、彼らの体が、飛び出してきた。どれも、窒息して死んでしまっていた。女は、それらの周りをグルグル回って、その姿に、何時までも飽く事なく見入っていた。(二〇〇一年十一月三日)

＊　　＊　　＊

(毒↓ヒビ↓見晴らし↓泥水↓話題↓宙返り↓樹液↓霧↓無知↓瞼↓上下↓柱↓無防備↓輪↓合奏↓翼↓垂直)

毒

頭の中で、幾つかの水の音が、混ざり合って鳴っていた。私は、目の前の壁の穴を見詰めながら、手に力を込め、気分を高ぶらせて、台所で洗い物をしていた。壁を見渡すと、ただ白く塗られているだけだった。何処にも蛇口がない。水なしで、それまで、どうやって洗い物をしていたのか。両手に一枚ずつ皿を持っていた。それなら、どちらか一方を、水だと思い込んでいたのだろうか。そう思い込まれた水は、何処から来たのか。手掛かりは、壁に開いた穴だけだ

った。
身を乗り出して穴を覗いた。明るい屋外の光が、目に飛び込んできた。明るさに慣れると、丈の短い若草が生え揃った小さな山と、それを取り巻く段々畑が、見えた。段々畑の一角が崩れて、崖になっていた。そこから滲み出た水が、小さな流れを作って、こちらに向かっていた。その途中で、何人かの者達が集まって、捕まえた獣の肉などを焼きながら、パーティーをしているようだった。その中の私に似た者が、彼らの中を動き回って、汚れた皿を集めていた。
私は、咄嗟に、穴から目を離し、出口を探した。今更、汚れた皿を、ここに持ち込んで欲しくない。水なしで、どうやって洗っていいか分からないからだ。兎に角、外に出て、あの皿を抱えた奴がこっちに来るようなら、追い返すのだ。しかし、出口を探す内に、皿がここに持ち込まれる筈がないと思えてきた。奴にここが分かる筈がない。こちらとそちらは、ただ壁の穴一つだけで繋がっているに過ぎない。それなら、私は、あれらの皿を洗いに行かなければならないのではないか。奴は、私の居場所を探して、何時までも、この辺りをうろつき回るだろう。それも鬱陶しい。出口が見付かったようなので、私は、意を決して外に出た。
出口は、壁の穴と逆の方向だった。建物を回り込んで行かなければならない。弧を描く急な坂道を登ると、建物はみるみる低くなって、周りは一面、キャベ

ツ畑で、建物は、その下に見失われた。どちらに向かえばいいのかも、分からなくなったし、引き返そうにも、坂が余りに急で、濡れてヌルヌルと輝いていて、とても降りられそうになかった。私は、込み上げて来るものを吐くように、或る人の名前を呼んだ。そして、その名前の人が、私に、水を使わずに、ずっと遠い所から、遥々、私にそれを授けてくれたのを、思い出した。その人は、壁の前で洗い物をする方法を教えに来てくれたのだ。そして、私がその洗い物の方法を教わると、私達を取り巻いていた者達が、待っていたようにそれを咎め、その人は、何処かにしょっ引かれて行ってしまった。なぜか、誰も、私には、目もくれなかった。それ以来、私は、隠れ家に籠もって、誰にも知られず、ずっと洗い物をして来たのだ。

いや、一人だけ、知っている者がいる。汚れた皿を集めていた者だ。知らない素振りでいるが、私が、穴から覗いていると分かっていて、その私に見えるように、皿を集めて回ったに違いない。それをみて、私が、建物から出て来るのも、分かっているのだ。しかし、こんな何処からも見晴らせるような所で、あの者から皿を受け取ったりして、それが誰かに見付かったら、取り返しが付かない。

少しでも身を隠せる場所を探した。背の低い、赤く細い幹のひょろひょろと曲がった木が、一本だけ見付かった。私は、そちらに向かって、腰を低くした

まま駆けた。木の根元で、裸の男と女が、横になって絡み合っていた。木の枝のちょうど私の目の高さくらいに、黄色い鳥と緑の鳥が、一羽ずつ並んで止まっている。木の根元から、水が湧き出していた。男と女は、その水を巡って争っているのだ。服も、同じようなものをちゃんと着ていて、裸に見えたのは、それがびしょ濡れで、体に密着していたからだ。二人は、息を荒げて髪の毛を引っ張り合い、少しでも相手の口を、水から引き離そうとしていた。形勢は全く互角に見えた。

「やっぱり、水ですよね。」と、私は、出来るだけ親しげに声を掛けた。女が、微かに頷いた。私は、自分の体が、自ずと女の方に傾くのが分かった。それを察知したのか、男も頷いた。傾きは、元に戻った。縄でもあれば、二人纏めて縛り上げて、水を私だけのものにも出来そうだが、そうした途端、水が涸れてしまいそうにも思えた。二羽の鳥は、困ったような目つきで、二人を見下ろしていた。よく見ると、鳥の脚は、細い糸で枝に縛り付けられていた。恐らく、鳥は、二人のどちらかの持ち物で、水を巡って争っている間、何処かに飛んでいってしまわないようにされているに違いない。

「そこをどけ。」と言って、木の箱を抱えた、狡賢そうな鋭い目つきの男が、猫のような足取りで近付いて来た。私は、二、三歩、後退った。男は、箱を、争っている二人の反対側の木の根元に置き、その上に乗って、二羽の鳥の縛り

付けられている枝を折った。そしてまた箱を抱え、その枝を持ち去ろうとした。二羽の鳥が、その綺麗な色にしては、獰猛な感じで、長い翼を羽ばたかせた。枝が、男の手を離れたかと思うと、その先端が鋭く振り回され、男の頭を何度も打った。男は、逃げていった。鳥は、深追いはせず、直に戻って来て、羽ばたきしたまま、枝ごと、二人の上に留まった。二人の争いは全く膠着状態で、どちらも開けたままの口を、水に付ける事さえ出来ずにいた。そんな事なら、交代で水を飲めばよさそうだったが、どうしても、水を独り占めしなければ、気が済まないのだろう。

　枝の折り口が、ヌルヌルと光っているように見えた。頭を打たれた男の血でも付いているのだろうか。しかし、そんなに赤くもない。やがてそれが、幹の折り口に合わさって、枝が元通りの位置に戻った。ヌルヌルしたものが、その接着面からはみ出した。私は、それにそっと触った。まだ微かに温かかった。私にはそれが、抉り取られた男の目玉の潰れたものに思えた。ずっと遠くの、強風が吹き付ける黒い岩の上を、男が、目を押さえて、暗い方に向かって、尚も走って逃げて行くのが見えた。

　木の葉が、みるみる枯れて落ちて行った。枝の先端が、どれも下を向いて、幹も、グニャグニャと曲がった。枝の継ぎ目から、男の目玉の毒が、木全体に回ったに違いない。となれば、その毒は、木の根元から湧き出している泉にも、

混じり込むだろう。私は、それを、争う二人に言った。二人は、呻き声で、それに応えたきりだった。私は、まどろっこしくなってきて、二人の体を蹴った。それは、重なったまま、斜面を転げ落ちていった。直ぐに私は、二人の居た泥濘に身を投げ出し、水を啜った。

　スースーと冷たい風が体の中を吹き抜けるようで、毒が回っているのが分かった。私の体は、そこから、水の流れに乗って、流されていった。二羽の鳥が、先程にも増して、翼を激しく振り立て、木を根刮ぎにして、私の後を追ってきた。私は、それを睨み付けて、威嚇した積もりだったが、何の効果もなかった。鳥と木は、私を追い抜いて、先に行ってしまった。私は、流れ過ぎて行く景色の中に、キャベツ畑を探したが、景色は流れ過ぎるばかりで、何も目に留める事は出来なかった。やっと流れが緩くなって、今にも崩れそうな黒い崖と、そこを動き回る長い灰色の毛の獣と、それを追って崖をよじ登る何人かの人の姿を見付けると、水と私は、四角いコンクリートの小さな貯水池に、流れ込んだ。私の体は、その底に仰向けに沈んだ。水面を通して、池の周りを見上げると、鬱蒼と赤い幹の木が茂り、黄色い鳥と緑の鳥が、数えきれず止まっていた。鳥達は、目を剥いて私を見下ろしていた。直に水に浮く私の死体の肉を狙っているのは明らかだ。私は、力を全身に込めて、鳥を驚かせる積もりで、立ち上がった。それを見て、飛び立って行く鳥もいたし、木に留まったままの鳥もいた

し、ボトボトと地面に落ちる鳥もいた。

池の周りで、身を潜めていた者達が、一斉に、地面に落ちた鳥を、一羽ずつ捕まえて、我先に私の前に掲げて見せた。彼らは、口々に、掲げ持った鳥を指差して、その自分の鳥を選べと叫んだ。私は、どう選んで良いのか分からず、何時までも、選べずにいた。私の顔は、彼らの唾だらけになった。池の水で顔を洗うと、肌がひりひりした。私は、池の水を掬っては、彼らに掛けた。彼らの顔は、焼け爛れたようになって、鳥の脚を握ったまま、その場を転げ回った。すると、彼らの保護者を名乗る者達が現れて、彼らを介抱しながら、鳥を手放すように説得し出した。直にそれを諦めると、池の縁に手を置いて、一斉に私を罵りだした。気圧されて、私は、彼らに鳥だけなら全て引き取ると告げた。

保護者達は、鳥の脚を切って、我先に、脚を切り取られた鳥を、私に差し出した。しかし、私は、彼らに他に何が出来るか見定めようと思って、知らん顔を決め込んだ。彼らは、直に諦めて、それぞれ鳥を抱えて、黙って帰っていった。切り取られた鳥の脚だけを握り締めている者達は、尚も転げ回りながら、木々が茂る中に、順々に姿を消していった。誰も居なくなると、私は、自分の体が冷え切っているのに気付いた。池から出たかったが、体が強張って動かなかった。木に止まっている鳥達を見上げた。鳥達は、皆知らん顔で、余所を見ていた。体がブルブルと震えだした。池の水もブルブル震えた。鳥達は、そ

の水が池の外に溢れ出すのには、興味を示して、途切れ途切れに鳴き声を上げた。

　私に似た者が、皿を抱えてやって来た。鳥の鳴き声で、私の居場所が分かったと言う。

「では、この池の水で、皿を洗えばいいのか？」と、私は、聞いた。

「そうかも知れない。でも、そんな冷え切った体では、皿は洗えないだろう。」

「そんな事はない。震える体を、色々に向きを変えれば、水が飛ぶのを、操る事が出来るさ。」

　私は、色々に体の向きを変えて、水を色々に飛ばして見せた。鳥が、歓声を上げているように聞こえた。私に似た者は、黙って皿を置いて、池から少し離れ、じっと私を見詰めて、立ち尽くした。その後ろでは、飛び立った鳥達が、上空で幾重にも輪を描いていた。

　早速、私は、皿に狙いを定めて、水を飛ばした。しかし、水は、少しも、皿に掛からなかった。鳥達がまた歓声を上げた。水は、流れ込んで来るので、減る事はない。やっている内に、少しずつ体が、温まってきて、震えが止まってしまった。それでも、無理に体を震わそうとして、私の体は、どんどん熱くなった。木々の茂みの中から、笑いを堪えるような声が、無数に聞こえてきた。

　私は、そちらに水を掛けた。水を掛ければ掛けただけ、茂みの中から、鳥の脚

を握った爛れた顔の者達が、転げ回りながら飛び出てきた。彼らは、自分の場所を決め、その鳥の脚で、地面を引っ掻きだした。段々とそこに穴が開いた。穴は、隣と繋がって、どんどん大きく深くなっていった。掘っている者達の姿は、逆に、どんどん小さくなって見えた。彼らはさぞかし、腹を空かしているだろう。私は、彼らにお弁当を出さなければと思い、池を出ようとした。全ての穴が、一つに纏まって、池の脇に、大きく深い洞穴が出来てしまった。

私は、それを覗き込んで、バランスを崩し、池の縁を強く蹴ってしまった。私の足は、鉄のように硬かった。コンクリートの縁にヒビが入って、そこから池の水が、一本の滝になって、洞穴に流れ込んだ。池の水は、あっと言う間に底を付いて、ただ一本の水の流れが通り過ぎるだけになった。積み上げられてあった皿が、洞穴の底に落ちて行くのが見えた。(二〇〇一年十一月五日)

ヒビ

皿は、ヒラヒラと穴の底の水の上に落ちて、浮かんだ。どれも真っ白で、汚れ一つなく、よく磨かれているようだった。皿の縁と縁が触れ合う高く透明な音が、響いた。水面は、グルグルと動いていたが、鳥の脚で土を掘っている者

達の姿は、一つもなかった。水の毒にやられて、全身が水の中に溶けてしまったのだろうか。私に似た者が、猫のように音もなく近付いて来て、穴の底を覗き込んだ。私は、その直ぐ横に立って、話し掛けた。
「皿は、無事なんだ。無事なようだ。」
「どう無事なんだ。」
水はみるみる引いていって、穴を掘る者達の丸まった背中が、見えて来た。皿は、その背中に乗ったものもあったが、振り落とされて、どれも、彼らの足元で泥塗れになっていった。
「皿に気を付けるように、注意しようか？」と、私は言った。
「余計な事をするな。」
「じゃあ、底まで降りて行って、取って来るしかない。でも誰の仕事なんだろう？」
私に似た者は、黙り込んだ。やはり、私が降りて行かなければならないのか。私達は、互いに相手の顔を覗き込んだ。先に、目をまた穴の方に向けるか、声を上げた方の、負けに違いない。穴の中からの音だけが響いた。カシャカシャと、鳥の脚と皿と地面の中の砂や石ころなどがぶつかり合うような音が、混じり合って聞こえてくる。そうしている内に、それらの音で埋まってゆくようだった。それらの音を味方に付ければ、耳の底が、寧ろ先に声を上げた方が、有

利にも思えてきた。
「まさか、諦める訳にはいかないだろう。私達は、皿のおかげで、居場所があるんだろう。いや、あなたの事は、良くは知らないが、私には、皿をあのままには出来ない」と、私は言った。
「面白い事を言うんだな。皿がどうなろうと、少しも困らないさ。皿の替りは、幾らでもあるだろう」と、私に似た者は、先に私が話し掛けた事に安堵したのか、薄笑いを浮かべ、尚も穴から目を背けるように、私の頭の上の辺りを見上げるようにして、言った。
「じゃあ、その替わりを探してきてくれ」と、私も負けずに、相手の頭の上の空を見上げた。
「探すまでもないさ。この洞穴が、私達に居場所を与えてくれているじゃないか」と言って、私に似た者は、私を挑発でもしたいのか、ゆっくり穴の方を見下ろした。
では、私は、これからずっと、洞穴の縁で、私に似た者とお喋りを続けるのだろうか。私は、多分、もっと体を使って何かをしたいのだ。それなら、この私に似た者を殴って、穴に突き落としてやろうか。それでも、奴は、ここを有り難い居場所と思うだろうか。私が足を踏ん張っただけで、奴はそれを直ぐに察したのか、笑いながら穴の縁を踊るように走って、穴の反対側まで逃げた。

私は、一歩も動けなかった。するとまるでその動けない弱みに付け込むように、両目に包帯を巻いた男が、息を荒げ、汗びっしょりで、手探りしながら近付いて来て、私の腰を強く引っ張った。

「水の音で分かりました」と、男は言った。

「ああ、ご自分の目玉を、お探しなんですね」と、私の言い方は、少し見下すような調子になってしまった。私に似た者が、穴の反対側で、私が男の相手をしているのを面白がって、目を剥いた戯けた顔で、猿のように飛び跳ねていた。

「やっぱり、ここだったんだ、どけ」と、男は、態度を急変させ、私の体を池の方に押し遣って、穴の方に身を乗り出した。目が見えないなら、耳を澄ましているのだろうか。それとも、別に何かを感じているのだろうか。試しに、私は、貯水池の縁のヒビを手で押さえてみた。すると、意外にそれで、水の漏れるのを完璧に防げた。水音が止まった。男の体は、微動だにしなかった。どうやら、男は、水音から何かを感じ取ろうとしているのではなさそうだ。私は手を離した。しかし、ヒビは塞がっていて、徐々に、また池に水が溜まり出した。水の色は真っ青で、よくこんな中に沈んでいられたものだと恐くなって、足がすくんだ。そして、男の探し物は、洞穴ではなく、池の中のあるように思え、それを、男の背中に向かって言うべきかどうか、迷った。しかし、何とい

う無防備な背中だろう。何時でも突き落とせる。それとも、私がそうするのを誘っているのか。下手に関わらない方が得策だ。

「皿を取って来いよ」と、男は、微動だにせず、後ろ向きのまま静かに言った。私は無視した。しかし、私に、皿を取って来る以外に、何が出来るだろうか。皿を取って来ない限り、洞穴と池の間に、ずっと立ち尽くしているしかないではないか。私は、男から少し離れながら、穴の縁に近付いて、中を覗き込んだ。すると、私に似た者が、掘られた穴の内側を、途中まで降りていた。穴の底にはもう、水溜まり一つなく、切り取られた鳥の脚を握り締めた者達は、互いにぶつからないように、素早く身を躱して、そこを歩き回って、地面を踏み締めていた。皿は、その下に埋まってしまったに違いない。

「皿を取って来いよ」と、男は、今度は、肩を震わせ、掠れた甲高い声で怒鳴った。下の者達が一斉に見上げた。彼らの顔は、どれも爛れたまま固まっていた。そこに皿を乗せたら、ちょうど巧い具合に、お面になりそうだ。そのアイデアを伝えれば、彼らに、皿を掘り出させる事が出来るのではないか。しかしそれより、私に似た者が、途中から降りられなくなってしまっている。上に上がる事も出来なくて、そこを動けなくなっている。ひょっとして、奴を置き去りにして、ここを立ち去るチャンスではないだろうか。

　左右を見回したが、何も見えなかった。不用意に踏み出せば、足を滑らせて、

水を争っていた男女ように、斜面を転げ落ちて行く事にもなりそうだ。私は、自分が、私に似た者を真似て、知らず知らず穴の中に降りて行ってしまいそうで、そうならないように、足をすくませながら後退っていた。男の背中が、急にぴくりと鋭く動いた気がした。それで、私は、泥濘に足を滑らせ、体が浮き上がって、池の中に落ちた。凄い水飛沫が上がったようだった。それによって、男が何をやり出すか、気掛かりだった。直ぐに起き上がるべきだったろうが、私の体は、すっかり力が抜けて、ゆるゆると水の底に沈んで行くしかなかった。池の底には、皿が何枚も沈んでいた。誰が何時、穴の底から取って来たのだろうか。

それが出来るのは、男しかいない。目が見えないのは演技なのだ。私と私に似た者が、互いの顔を見合って黙り込んでいた間、さっさと穴の底に降りて行って、皿を集め、直ぐに穴から出て、その皿を池の底に並べ、それから目に包帯を巻いて、私の腰を引っ張ったのだ。テキパキこなせば、それくらいの時間はあった。そうしておいて、私と私に似た者を、穴の中に誘い入れようという魂胆だ。しかし、そうして皿を独り占めして、それをどうする積もりなのか。男の目当ては、枝に縛り付けられた鳥だった筈だ。私は、俯せで、池の底スレスレをゆらゆらと動いて、皿の一枚一枚の表面を見て回った。一枚だけ、殆ど目には留まらないが、ヒビの入っているものを見付けた。そのヒビの形が、翼

を拡げた鳥に見えた。取り敢えず、それを男に見せて、男の反応を見てみたくなったが、水から起き上がろうにも、体が言う事を聞かなかった。
私は、別の皿を、両手に一枚ずつ持ち、それで水を掻いた。青い水の中に、いきなり、男の顔が現れた。両目はきつく塞がっていた。それならやはり、目玉は、自分の折った枝を突き刺されて、取り出されてしまったのか。
「ヒビの入った皿を見付けただろう」と、男の顔は、水の中で、私の耳に口を寄せて来て、言った。
私は、答えようとしたが、臭くて苦い水を飲むだけだった。何とか水面に顔を出して、息を継ぎたかった。私は、身を翻し、ヒビの入った皿の所に戻って、それを掴むなり、二つに割った。それから、その片方ずつを、両手に持ち、池のコンクリートの側面の、塞がれたヒビの所まで進んで、皿の割れ目を、そのヒビの中に差し込んだ。(二〇〇一年十一月七日)

見晴らし

腕を振り下ろすと、割れた皿の一番尖った所が、確実に、ヒビの裂け目に命中した。そして、その度に、皿の尖端が少しずつ欠けて、ナイフのように益々

尖っていった。しかし、それで、裂け目が拡がるどころか、そこの劣化したコンクリートが細かく砕け、却って、ヒビは埋まってしまうのだった。何処にヒビが入っているのかも分からなくなっては、手を止めるしかない。握り締めていた割れた皿が、両方の掌に突き刺さり、手の甲に突き抜けている。痛みはないが、傷口から、水の毒が入るのが心配だ。両手だけでも、水の上に出せないものか。

「その皿は、お前のものなのか？」と、男の声が耳元で聞こえた。私は、男の首根っこを掴まえて、ついでに、尖った皿が、男の喉に突き刺さればと思った。しかし、私の腕は、水を切るだけだった。丸っこい水流が、背中を撫でるのが感じられて、男の顔が、私の直ぐ前に来た。ヒビが入っていた辺りだ。顔に突き刺してくれと、言っているようなものだ。望み通りにしてやろう。両腕を鋭く前に突き出した。尖った皿は、男の塞がれた目に突き刺さった。腕を引っ込めると、皿は私の手から抜けていた。急に体が軽くなって、抛り出されるように、私の体は、水面に押し上げられた。そこで、足をジタバタさせると、水を地面のように蹴って、私は、池の外に飛び出ていた。当然、穴の縁に、男の姿はなかった。私は、池の方を振り返った。池に迫る赤い幹の木々の茂みが、ざわついた。見上げると、先程飛び立った鳥達が、一斉に戻って来ていた。水面が８の字に渦を巻いていた。出来る事なら、男をこのまま池の底に沈めたままに

したい。水面に出て来たところで男の頭を殴ってやろうと、私は、石ころを探した。足元は、一面泥濘だった。腰を下ろし、その泥の中に爪を立てた両手を突っ込んで、掻き回した。そんな事をしては、いけなかったのだ。傷口が直ぐに塞がる筈もない。痛みが両手を襲ったが、それ以上に、泥の中の毒が、傷口から入り込む恐怖に囚われた。

見上げると、池の縁に、男の上半身が出ていた。両目に、皿が突き刺さったままだった。びしょ濡れの服が体に密着して、もっとがっしりした体付きに見えていたが、思ったより痩せている。両手を頭に持って行って、髪の中の水分を絞りながら、言った。

「探し物は見付かったか。どうせ、お前の事だ。また、碌でもない物を探してるんだろう。そんな事ばかりしてるから、益々泥濘に嵌り込むんだ。どうせ探すんなら、木の箱を探して来い。そうしたら、少しは、お前の居場所も考えよう。希望があるんなら、聞いておいてやる。だけどもう、皿洗いだけでは、ダメだぞ。ハッハ。」

私は、泥の中に石ころの手応えを感じ、それを掴んで、男に投げた。男は、上体をぐにゃりと反らして避けた。石は、池を越え、その先の茂みに消えた。男の目に突き刺さっていた皿が、ヒラヒラと揺れて、鳥の翼のような形になった。それは、本物の鳥の翼のようにぱたぱたと羽ばたいて、男の体を浮き上が

らせるようだった。翼の表側が覗くと、右目から生えた翼は黄色、左目のは緑だった。男は、軽々と緑を跨いで、池の外に出て、茂みの方を振り返った。黄色と緑の鳥達が一斉に池に降りてきて、激しく羽ばたきながら、水を飲み出した。男は向き直り、そっと地面に足を着けた。男女が水を巡って争っていた背の低い木の所では、呆気なく鳥達に追い立てられたのに、ここでは男は、茂みに止まった全ての鳥を手懐けている。私は、また泥の中から石ころを掴んで、男に投げようとした。

「何をしてるんだ。毒が回って手遅れになっても知らんぞ。」

私は、霞んできた目を見開いて、何とか石を投げた。石は、池の縁に当たった。そこは、ヒビの入っていた所だった。そこからまた、水が漏れだした。男は、立ち尽くして、それを眺めるばかりだった。私は、少しだけ勝ち誇った気分になれた。しかし、水が私の方に流れてきて、このままでは、泥と一緒に、直ぐ後ろの洞穴に、私の体は、滑り落ちてしまいそうだ。水を飲み終えた鳥達は、また順々に、飛び立って、木の枝に戻った。

また、泥の中に石ころの手応えを感じた。また、池の縁に命中させ、ヒビを大きく拡げれば、水がそこから吹き出して、私だけでなく、男も水に流されるのではないか。すると、石を投げるまでもなく、池の側面が、ヒビの所から、パチンと大きな音を立てて割れた。水の流れが激しく突き上がり、真っ直ぐ男

の背中を打った。男の体は宙に舞った。両目の翼が、激しく羽ばたいた。男は、私の真上を飛び越えて、洞穴に落ちて行った。それから、水が私にも押し寄せた。下半身は泥濘に沈み込んでいて、踏ん張れば、持ち堪えられそうだ。その水の流れの中に、次々に皿を見付けた。手を出せば、必ず取り逃がす事はない。水がまた、細い流れになると、私は、皿を抱えて、泥に半分埋まったのと、皿の重みとで、身動きが取れなくなっていた。

　私に似た者か、それとも、切り取られた鳥の脚を握ったまま、洞穴の底で地面を踏み固めている者達か。どちらに助けを求めるべきか、迷った。洞穴に背中を向けたままでは、彼らがどうなっているかも、分からない。何時の間にか私は、ぼんやりと木々の茂みを見上げ、鳥達の中から、背の低い木に縛り付けられていた、初めの二羽の鳥を探していた。どれも殆ど同じようにしか見えず、見分けられる筈もない。それに、もう脚を切り取られて、持ち去られたかも知れない。しかし、黄色と緑と一羽ずつ、どこともなく、枝に縛り付けられたままのように見えてしまう鳥が、目に付いて仕方ない。見るからに元気がなさそうで、目がしょんぼりしていた。私は、その二羽に向かって、口笛で鳴き真似をした。二羽だけが、そっぽを向いた。

　他の鳥達の何羽かが、鋭い鳴き声を、立て続けに上げた。枝に止まったまま激しく羽ばたきをする鳥もいて、茂みは騒然となった。それを待っていたかの

ように、水が池に流れ込んでくる方から、歌を歌いながら、人が一列になって降りてきた。池の直ぐ手前で危うく立ち止まり、辿々しい足取りで、滑り落ちないように池を巡って、私の方に来た。五人の男で、五人とも灰色の毛皮を、体の何処かに纏っていた。先頭の男は、それを首に巻いていた。次の男は、上半身に纏っていた。次の男は、それで腕を覆っていた。次は、脚を覆っていた。最後の、一人だけ目立って痩せた男は、腰に巻いていた。

「誰かと思ったら…、何時まで、埋まっている積もりですか？」と、先頭の男が、私を見下ろして言った。他の四人は、歌うのをやめた。口をへの字にして、まだずっと歌っていたかったようだ。私に出くわした事を、恨めしく思っているような顔付きだ。彼らの顔には、一つも見覚えがなかった。最後の痩せた男だけが、壊れた池の側面に興味を示し、コンクリートの破片を集め出した。他の三人は、笑顔で、互いの毛皮を撫でたり引っ張ったりして、少し離れた所でじゃれ合っている。泥濘が嫌なのかも知れない。多勢に無勢、下手な事を言ったら、何をされるか分からない。しかし、黙っている訳にもいかない。

「どうしたらいいんでしょうね？」と、私は、彼らの素性は問わず、さも知り合いであるような顔で聞いた。じゃれ合っていた三人が、笑い声を上げた。

「どうしたらって、一人じゃどうにも出来ないのに、ハハハハ」と、毛皮で腕を覆っている男が、手を叩いて、叫んだ。

「そうですね、では、引っ張り上げてくれませんか？」
「もちろんです」と言って、毛皮を首に巻いた男だけが、私の後ろに回って、私の胴に腕を回し、私を泥の中から引っ張り上げようとした。積み上げたまま抱えている皿が、グラグラと揺れた。三人は、さもその皿が心配そうに、私達を見詰めるだけだった。しかし、危なっかしくて見ていられなくなったのか、直に、そっぽを向いて、大きな声で、お喋りを始めた。
「もっと、見晴らしのいい所に行きたいなあ。ここは、何もなくて殺風景な上に、見晴らしも悪いね。空だって、首を真横にしないと見えないよ。でも、何がその空を遮っているのかも、分からないよ。それとも、空が、独りでに遠ざかって、小さくしか見えないのかな。変な空だ。」
「でも、風が暖かいから、まだいいよ。鳥の鳴き声が、南風を呼ぶんだろうな。鳥の鳴く方にやって来て、正解だったね。鳴き声が聞こえなかったら、今頃僕達は、ブルブル震えて、喉もカラカラだったろうな。」
「風なんか、吹いてないじゃないか。鳥が、木を揺らしてるだけだよ。」
「じゃあ、吹いてると、思えばいいだろう。」
「じゃあ、見晴らしがいいと、思えばいいだろう。」
「でも、僕たちは、さっきまで、見晴らしのいい、風の暖かい所に居たじゃないか。それと比べたら、ここは、そんなに、いい場所じゃないよ。」

「だから、またそこへ戻りたいんだよ。」
「でも、もう、獲物は獲っちゃったし、戻ってもする事がない。崖から落ちるのが、オチだ。次がまだあるんだし、もう、そこへ行かなくちゃ。」
「そこも、見晴らしがよくて、風が暖かいよ。しかも、それだけじゃなくて、もっといい事だってありそうだろ？」
「そうかなあ、ここと比べても、もっと狭くて冷たい所だと思うな。」
「見晴らしのよさも、風の暖かさも、色々あるって事さ。そこへ行けば行ったで、感じ方も随分変わるだろうし。でも、次があるって、何だっけ？」（二〇〇一年十一月九日）

泥水

　私の体は、とても一人では持ち上げられそうにない。せめて皿をどうにか出来れば、両手が利く訳だし、まだ何とかなるのではないか。話が通じそうなのは、この一人だけだ。私が、他の者に話し掛けて、却って彼らの機嫌を損ね、思いもかけぬ面倒に巻き込まれたりするのも嫌だ。しかし、毛皮を首に巻いた男は、どうして、一人でやろうとするのか。お喋りしているだけなら、彼から、

三人組に協力を求めてもよさそうなものだ。

「他の人は、どうして手伝ってくれないんですかね。」と、私は、小声で言った。

「じゃあ、私だけでは不満なんですか？」と言って、毛皮を首に巻いた男は、私の腋から腕を抜き、それきり黙ってしまった。私は泥に埋まり掛けて後ろも向けないので、男が、そのまま立ち尽くしているのか、何処かに行ってしまったのかも、分からない。私は、人に頼ったのが間違いだと思い直し、独りで、泥濘から這い上がろうと、すっかり埋まった脚で泥を蹴ったり、腰を捻ったりした。それが、何の効果も上げていないようでも、兎に角、続ける事にした。毛皮を腰に巻いた痩せた男が、私の正面で、黙々と貯水池の側面を直している。その姿を眺めながらなら、焦る気持ちも紛れそうだった。

そこへ、毛皮を首に巻いた男が、池の脇の茂みの中から縄を持って現れた。互いの首尾を確かめ合っているのか、彼らは、二言三言、言葉を交わした。何を言っているのか、全く聞き取れなかった。では、三人組は、もっと遠くに居るのに、どうしてそのお喋りが、逐一聞き取れたのだろう。私は、三人組の方を見た。口が動いているところを見ると、まだお喋りを続けているようだ。しかし、その声も全く聞き取れない。縄を持った男が、私に近付いて来た。

「もう、お喋りは、やめたんですか？」と、男が私に聞いてきた。

「さあ、分かりません。」
「分からない？　見晴らしがどうとか、風がどうとか、私が、一生懸命持ち上げようとしてたのに、そっぽを向いて、独りで、お喋りしてたじゃないですか？」
「誰が？　私が？」
　そうだったろうか。では、三人組の声が、間近に聞こえていたようだったのは、私の声だったのか。試しに、声を出してみた。しかし、三人組のお喋りの声とは、まるで違うようだ。
「ハハハ、さっきは威勢が良かったのに…。ところで、これで皿を縛りましょう。あなたが、泥濘から出たがらないのは、皿が心配だからなんでしょう。纏めて背中に背負ってしまえば、落とす事もないし、動き易くなりますよ。」
と、男は、腕に幾重にも抱えた縄を翳しながら言って、また、私の後ろに回り込んだ。私は、取り敢えず、ここは従っておこうと、胸に抱えている皿を、慎重に背中に持って行った。両腕を後ろに回し、積み上がった皿を下から支えて、それを負んぶするようにした。直ぐに、縄は、私の目の前を素早く飛び交い、耳元で唸りを上げ、男の手際の良さが伝わった。それに連れて、徐々に、背中の皿の重みが増すようだった。私は、どんどん前屈みになって、腕を泥濘に突き立てなければならなくなった。首をいっぱいに捻って背中を見ると、綺麗に

揃えられて背負われた皿が、しっかりと括り付けられている。
「これなら、独りで大丈夫でしょう。」と、男は、冷たく突き放すように言った。
私は、四つん這いで、泥濘を抜け出した。三人組が、笑いながら走り寄って来て、「亀みたいだ」と囃し立てた。亀も悪くないと、私は思った。壊れた貯水池の側面が少しずつ直って、また水が、溜まりだした。水漏れする所は、泥を擦り込めば収まった。もう、泥濘に水は流れて来なくなった。三人組が、はしゃぎながら池の中に入った。水はまだ、膝の辺りまでしかなさそうだ。彼らは、腰を屈め、池の底を探って、次々に皿を掴み取って、池の縁に乗せていった。同じ大きさの円く白い皿が、みるみる積み上がった。毛皮を腰に巻いた痩せた男は、茂みの側の池の縁に回り込んで、そこに腰を下ろし、微笑みながら、三人組を見下ろすだけだった。壊れた池の側面は、すっかり直っていた。毛皮を首に巻いた男が、独りで、積み上がった皿を纏めては、縛り上げていった。そして、水嵩が増してきたからなのか、中の三人は作業をやめて、水から上がった。そして、縛られて纏められた皿を、私の背中に乗せていった。それを、毛皮を首に巻いた男が、忙しく、縄で、私の体に括り付けてゆくのだった。背中だけでは乗り切らず、私は仰向けにされ、腹の上にも、皿を括り付けられた。それからまた、俯せにされ、更に背中に皿を積み上げられた。私は、頭と手足だけを

出し、後は完全に皿の甲羅で覆われて、もう何処からどう見ても、巨大な白い亀だった。その姿を満足げに眺めてから、四人は、毛皮を腰に巻いた男の方に行き、五人並んで、池の縁に腰を下ろした。当分そこで、のんびり休む積もりのようだ。水は、池いっぱいになって、またこちらへと、ゆっくり溢れ出した。

私は、両手両脚を、順々に泥濘から抜き差ししながら、ノロノロと後ろに向きを変えた。洞穴だった所が、すっかり泥水で埋まっていた。私に似た者も、鳥の脚を握り締める者達も、見当たらない。為す術なく、泥水の下に沈むしかなかったのか。私は、中身まで亀になったつもりで、そこへ身を滑らせ、泥水の中を泳いで、真っ逆様に降りて行った。額が硬いものに突き当たった。手探りすると真っ平らで、どうやら洞穴の底のようだ。私は、手探りで、夢中になってそこを這い回った。何度も同じ所を這い回ったが、ただ平らな地面が続くだけで、何一つ見付からなかった。その間、何度か、皿の甲羅に小さな石が当たるようだった。初めは気に留めなかったが、愈愈もう、動き回るのに飽きて、する事がなくなると、ひょっとして、それは、私に注意を向けさせるために、誰かが、私の背中に石を投げているのではないかと思えてきた。

見上げると、泥水だとばかり思っていた水が澄んでいた。泥が沈殿して、泥水は、洞穴の底だけになっていたのだ。洞穴の側面の途中に、私に似た者の姿を見付けた。やはりまだ、そこから上にも下にも行けずにいるようだ。私の方

を見下ろし、何か言いたいらしく、口をパクパクさせている。もちろん、その声が聞こえる筈はないが、私には、それが、私が亀でないのを思い出させようとしているように思えた。そうだ、私は亀ではない。人間であるからには、何時までも、重い皿をわんさか背負って、水の底にいたら、どうなるか。水を飲んで死ぬに決まっている。よく見ると、私に似た者は、水の中ではなく、ガラスの壁の奥にいるようだった。洞穴の側面は、そこだけ窪んでいて、そこにガラスが張られているのだ。私だけが、一体何のために、こんな所で、こんな恰好で、こんな事をする羽目になったのか。どうすればいいのか。

私に似た者は、色々身振り手振りで、私に何かを伝えようとしているようだった。私はまた、泥に潜り、それが指差しているように思える方に、這っていった。暫く進むと、マンホールくらいの穴を見付けた。泥の中なのに、どうしてその穴だけが見えるのか不思議だ。どうやら、そこには分厚いガラスの蓋がされてあって、その下が、透明な水だからのようだ。私は、ガラスの蓋の取っ手を口に銜え、首に力を入れて、思い切り引っ張った。蓋がほんの少し横にずれて、泥水が、一気にそこに流れ込んだ。私の体は、瞬時に仰向けにひっくり返り、皿の甲羅がガラスの蓋にぶち当たって、更に蓋を横にずらした。洞穴を満たす水が、その隙間に押し寄せた。私は、その隙間の上に乗って、物凄い水流の圧力を受けて、そこを動けなくなった。皿の甲羅を纏っていなかったら、疾

っくに、その穴に吸い取られて、私の体は、バラバラになっていただろう。
　水がグルグル渦を巻き、私は、その場で独楽のように回った。水が全て穴に落ちると、私は跳ね飛ばされたまま、まだ暫くは独楽のように回っていなければならなかった。やっと止まってみて、首と手足を亀そっくりに引っ込めていたので、何処も無傷でいられたと分かった。ただ、皿はボロボロで、縄でしっかり括り付けてあったのも、弛んで、今にも皿はバラバラと崩れそうだった。それで、私は、亀の甲羅を背負っていると言うより、皿の山の下に埋まっているようだった。手足を動かしても、私の体はビクともせず、割れた皿が、手足を傷付けるだけだった。溺れ死ぬ事は免れたが、このまま誰も助けに来なければ、いずれ餓死するしかないではないか。せめて上を向いて、私に似た者の様子なり、洞穴の縁から下を覗き込んでいる者が居るかどうか、見て取りたいのだが、俯せであるよりなかった。（二〇〇一年十一月十一日）

話題

　洞穴の泥水を全て呑み込んだ排水口から、黄色っぽい光が差し上っている。洞穴の底は、それ程暗くもなかったが、排水口は、そこから真上に光の円柱を

立てた。その形が激しく崩れ、排水口の中から人の姿が現れた。髪は短いが、女のようだった。頭に金色の輪が嵌っていて、額の辺りで輝いている。続いて、男が、穴から出て来た。男は、髪を全て剃っていて、頭の皮は浅黒くくすんでいた。二人は、バラバラに洞穴の底を歩き回るようだった。声を掛けたいが、私の側には来なかった。私が、皿の山の下敷きになっているのは、見えている筈だ。二人の話し声が聞こえた。すると、私の体は、磁石の針が北を向くように、その声のする方に、くるりと向いた。

　水を吸って脹れた真っ白な人の体が、何体か、並べて横たえられているのが見えた。それが、この洞穴を掘った鳥の脚を握り締める者達であるのは、容易に想像が付く。彼らは、助からなかったのだ。その一番端の体の、丸く脹れた腹に、女が、折った膝を揃えて乗せ、そこに体重を掛けた。女の脚は、剥き出しで、裸足だった。腹を圧された者の黒ずんだ唇が、ゴムのように開いて、泥水が噴き上がった。それは、全く地面に染み込まないで、丸くなって、コロコロと転がった。泥水は、そうしてあちこちに散らばって、最後には皆、動きを止めた。地面は、真っ平らなのだ。しかし、男が近付くと、水玉はまた動いて、男から逃げた。水玉の方が、ずっとすばしこくて、追い付けそうにない。男は、直ぐに追うのをやめた。女が、隣の腹の上に乗り、また口から泥水が噴き出し、水玉が同じ動きをした。男は、今度は、それに追い付こうというのではなく、

その進路を操ろうとするような動きをした。水玉は、私から見て、洞穴の左の脇に、寄せ集められて行った。女が、また隣の腹に乗った。男が女に近付いて、もうやめるように言った。女は、やめようとしなかった。また黒ずんだ唇から、泥水が噴き出した。

「こんな水が、飲めると思うか。こいつらと同じ目に遭うだけだ。」

男の声は、かすれていた。語尾は、殆ど歯の間から息を吐くだけだった。気力を振り絞って、やっとそれだけを言って、もう後が続きそうにない。喉が、カラカラに渇いているに違いない。

女は、四人目の体を跨ぎ、跪いた。今度は、腹に馬乗りになるのではなく、下の体とぴったり向き合って重なるように、自らの体をゆるゆると横たえていった。そうして、肘を突いた両腕を調節しながら、少しずつ、下の体の腹に、体重を掛けて行くようだった。噴き上がる泥水を、直に飲もうという積もりらしい。男は、険しい目つきでそれを眺めるだけだった。止めたくても、声が出ないのだ。

「毒が好きなんですね。」と、代わりに私が、大きな声を出した。それが、効いたかどうか分からないが、女は、巧く一口分だけ噴き出させた水を、飲み損なった。女は、私の方を向いて少し微笑んで、また、同じように試みた。しかし、水が噴き出てしまってから、そこに自分の口を持って行くので、水はま

た、地面に零れるだけだった。どうやら、私の声は、関係なさそうだ。ただ、私は、声を出した事によって、随分と身軽になったのを感じていた。試しに、仰向けになってみようと思った。すると、皿は、私の体の上から消えていた。皿の山は足元にあった。私の声が、私の体を、皿の下から、滑り出させたのだ。私は、また皿の山の下に埋もれない内に、立ち上がろうと急いだ。しかし、地面と体がぴったりくっつく感じがして、手も足もまるで動かせず、どうにもならなかった。頭だけでも起こそうと頑張ったが、ダメだった。見上げると、女と男が、私の直ぐ側に立っていた。男が、私の首を持ち、女が脚を持って、私を持ち上げようとした。

「毒が好きなんですね」と、私は、咄嗟に声を張り上げた。彼らに持ち上げられたくなかったからだ。私の体は、彼らの手を易々と振り解いて、スーッと地面を滑り、並べて横たえられている者達にぶつかって、止まった。もし、それにぶつからなかったら、私の体は、洞穴の中をぐるりと回って、最後には、泥水の水玉の中に突っ込んだに違いない。それは恐ろしい事だった。

私にぶつかられて、女に腹の水を吐かされた者達の上体が起きた。そのまま、それらの体は回転し、腹を脹らませたままの者達の上に乗った。一対一で、上の者は、下の者の腹の上に馬乗りになって、女がしたように、水を吐かせた。上と下と四人ずつで、計八人だ。彼らは、皆同じ体型に戻ると、手足を縺れ

させ、組んず解れつした末に、全員立ち上がった。それから直ぐに、私を取り囲み、銘々違う姿勢で腰を落とした。八人の手が一斉に私を掴んだ。今度は、私は、声を上げなかった。是非、彼らの手で、助け起こして欲しかったからだ。しかし、巧く行かない。それもその筈だ。彼らはまだ、両手に一本ずつ、鳥の脚を握り締めていて、私の体を掴むというより、指先でつまんでいるだけだ。

「こんな立派な洞穴を掘ったんだから、もう、鳥の脚は、要らないんじゃないですか。」と、私は言った。

「要らないかも知れませんが、また何かで、要るのかも知れません。それに、穴を掘るのと、鳥の脚は、別の事ですよ。だけどそれが、あなたと何の関係があるんですか。」

「いや、起こして貰うにしても、鳥の脚を握ったままでは、やり難いかと…」

「起こすって、何を？」と、一人が言って、彼らは、顔を見合わせたが、誰も答える者はなかった。

では、彼らは、何のために、私を掴んでいるのだろうか。そう聞いても、多分、まともな答えは、返ってきそうになかった。私の体を掴んでいるのさえ、彼らは、分からないのかも知れない。私が、何のために掴んでいるのかを聞けば、彼らは、自分達が私を掴んでいるのに驚いて、慌てて手を離してしまうかも知れない。彼らは、他にどうしていいか分からず、知らず知らず、私の体を

掴んでいるだけではないか。しかし、黙っていても始まらない。
「他の人達はどうしたんですか。八人ばかりじゃなかったでしょう。皆さんで、洞穴を探してみたらどうですか。案外、簡単に見付かるかも知れませんよ。」
と、私は、出来るだけ彼らの立場に同情するような口調で言ってみた。彼らは、顔を見合わせ、彼らだけで、話し合いを始めた。
「そう。確か、もう八人居た筈だ。何処へ行ったんでしょう。やっぱり、全員揃ってないと、まずいのかも知れませんね。八人だけでは、洞穴が広すぎるように感じませんか。」
「もう八人って、何の事ですか。何も知りませんよ。大体、数なんて、誰も数えなかったじゃないですか。」
「知らないんですか。割れた皿と一緒に、ここの地面に埋まってますよ。何度も、胸や背中を踏んだじゃないですか。」
「いや、そうじゃない。彼らは、水に浮かんで、そのまま流されて行ったじゃないですか。見なかったとは言わせませんよ。」
「そんな筈はない。何で、彼らだけが水に浮くんですか。誰もそんなもの、見てませんよ。」
そこでまた、彼らは、黙り込んでしまって、話など何もしなかったかのような、虚ろな目つきになった。居なくなった八人の事など、今更どうでも良さそ

うだった。彼らの顔は、焼け爛れたようなままだった。私としては、話題にするとしたら、もう、その顔の事しか思い浮かばなかった。しかし、それは、私が、毒だと分かっている池の水を彼らに掛けて、そうなったのだ。ここで、私を非難して当たり前だ。それとも、彼らがそうしないのは、その事を、もう忘れてしまっているのか。では、何が、彼らの心を占めているのだろう。

　女と男の、言い争う声が、洞穴の中を響いた。八人は、私を掴んだ手は放さないまま、揃ってそちらを向いた。私の位置からは、二人の姿は見えなかった。声は、ひどく耳障りだった。外国語のようで、全く意味不明なのだ。八人の、眉を顰めて口を歪めた顔を見ると、私以上に、それは耐え難いようだ。どれも、もう殆ど泣き顔で、私を掴む手も震えだした。その震えた唇から、呻き声が漏れて出て、それは次第にはっきりして、二人を罵る言葉になった。八人が一斉に立ち上がると、私の体も、持ち上がった。脚をばたばたさせて、地面に足を着こうとしたが無駄だった。私は、仰向けにされたまま、首を下に反らして、逆さまに洞穴の中を見た。女と男が、巨大な泥水の水玉の前で、立ったまま、組み合っていた。また、水を巡って争っている。今度は、女が水を飲もうとして、男がそれを止めているのだ。しかし、どうして男は、女の好きにさせないのだろう。女が毒の水を飲んで、どうにかなってしまえば、争う相手がいなくなって、好都合ではないか。私が脚をばたつかせるのをやめると、八人は、そ

れを待っていたかのように、私を放り、二人の方に走り出した。私は、頭から落ちて、反らしたままの首が、更に後ろに曲がって、殆ど息が出来なくなった。それでも、八人の逆さまの後ろ姿が、二人を避けて、左右の暗い方へ、消えて行くのは見えた。（二〇〇一年十一月十三日）

宙返り

女と男の、言い争う声が、耳の中で大きく響いた。私の落ちた頭は、地面を陥没させていて、耳もそこに埋まって、二人の声が、地面を伝って来たのだ。そして、その声は、少しずつ大きくなっていった。私の仰向けの体は、陥没させた地面に頭が嵌り込みながらも、落ちた勢いで、二人の方に、滑って近付いているに違いない。私は、拡げた両腕を地面に押し付けて、それを止めようとした。二人の声は少しだけ遠ざかった。私は止まったようだ。それとも、私はずっと動かずにいて、二人が、争いながら、私に近付いたり遠ざかったりしていたのだろうか。

「何をしてるんだ。毒が回っても、知らんぞ。」と、低い穏やかな声が落ちてきた。私は、急いで目を開こうとした。しかし、目は、地面の中だった。両

目に、鋭い痛みが走って、私は堪らず腰を拗らせた。頭が地面の陥没から抜けたかどうかは、分からなかったが、私の体が、地面の上を転げ回っているのは分かった。地面が、殆ど垂直に近い程、傾いているように感じられた。そして、そんな私を、誰かが、受け止めたようだ。今度は、恐る恐る目を開いた。その誰かに、抱き留められているようでもあった。だとしたら、私は、直ぐにも、その腕を振り解いて、逃げ出すべきだ。そのままで居たら、私の体は、鈍って動かなくなるだろう。しかし、男が、私の腰を、短い右脚で踏んづけているだけだった。男は、まだ目から翼を生やしたままだったが、私には、男が、薄笑いを浮かべているのが分かった。

「掌を見てみろ。」と、男は、顔から薄笑いを掻き消しながら、言った。私の両掌は、びっしょり濡れていて、手の甲まで貫かれた深い傷が、泥塗れになって口を開けていた。それを眺めている内に、ズキズキと、痛みが戻って来た。もう、散々毒を含んだ水に浸けてきたのだ。毒が回っているなら、疾っくに手遅れだろう。私は、頭を横に向けて、地面を見た。地面は、片目が水に着く程、水浸しだった。そこから更に頭を巡らして、排水口を見た。そこからは、まだ、黄色の光が円柱を立ち昇らせていた。排水口から、水が溢れ出しているのではない。それで、少しだけ安心出来た。水は、地面全体から染み出ていて、地面と同じ色をしていた。それが何色かは、暗くて分からない。穴の底は、先程か

ら、随分暗くなっていた。地面が水を滲ますなら、私も水を吐きたかった。別に口からでなくても、体のどの穴からでも、水を吐けるなら、それまで溜め込んだ毒を、全てではなくても、かなり外に出せるのではないか。

「では、どうしたら、いいんですか。」と、私は、男の目の翼を見詰めて、言った。男の目の翼をもいで、それを私の掌の傷に埋めれば、ちょうどいいのではないか。男は、その翼を少しだけ震わせて、私の腰を踏んでいた右脚を浮かせ、それで地面を強く踏み締めた。水が跳ねる音の直ぐ後に、皿と皿が打ち当たるような音がした。

「一体、何の音ですか。私に、地面の中の皿を掘り出せとでも、言うんですか。それに、地面の中の、多分粉粉に割れている皿が、そんな音を出す筈がない。私の掌の傷口が益々開いて、それを見て、また『毒が回っても知らんぞ』とか、言いたいんでしょう。」

「お前なんかに、固い地面が掘れる訳がない。さっさと立ち上がったらどうだ。お前の体は、水に流れてきたゴミの塊が、絡み合ってるみたいだ。幾ら何でも目障りだ。」

「じゃあ、私は立ち上がれるんですか。立ち上がれるくらいしか、まだ毒は回っていないんですか。」と言って、私は、体の中の、スースーと冷たい風が体の中を吹き抜けるような感じを、確かめた。

「試してみればいいじゃないか。尤も、多分ダメだろうがな。」
「じゃあ、どうして、立ち上がれ、なんて、言うんですか。」
「さあな、他に言いようがないからだ。お前を黙って消せれば、それに越した事はないんだが。」と、男は言って、目の翼を羽ばたかせ、体を宙に浮かせて、一回転させた。すると、その後ろから、先程甲羅のように背負っていた皿の山が、ガラガラと音を立てて、山のまま流れてきた。初めに、全身を波が覆った。押し流されるどころか、私はその波に抱かれて、締め付けられるのさえ感じた。それから皿がやって来て、私の周りに積み上がっていった。皿に遮られて、洞穴の中が見えなくなった。直ぐ上で、ガチガチと皿と皿が当たる音が、立て続けにした。皿の山の上に、男が降り立ったのだろう。男にしてみれば、私の体が、皿の残骸の山に隠されて、少しは満足しているのだろうか。
皿と皿が擦れ合うもっと凄い音がして、いきなり、私は、分厚く硬い湿っぽい冷たい手で、喉元を強く掴まれた。私の体は、喉を掴まれて反り返ったまま、皿の中を強引に引き揚げられていった。気が付くと、男と並んで、私は、皿の山の上に立っていた。いや、立っていたと言っても、ただ男の馬鹿力で、体を縦にされて支えられているだけかも知れない。感覚がないので、はっきりとは分からないが、足は、浮いているようだ。男が、右腕を斜めに突き上げていて、その手に喉を掴まれて、私の体は、そこにぶら下がっているだけではないのか。

そうでなくて、もし私が自分の足で立っているとしたら、恐らく直ぐにも、横になりたくなるだろう。立っていると考えただけでも、体の中の毒が、何倍も速く回って、私の体から熱を奪うように思えてしまう。しかし、そんな感じはしない。

そのまま、それならやはり、私は、ただ、ぶら下がっているだけに違いない。

気が急いているのか、私は、洞穴の側面を見回した。ガラスの壁の奥で、私に似た者が、狭い中を、盛んにうろうろ動き回っていた。殆ど裸だった。しかし、本当にガラスなのか。そう見えるだけで、実は、直ぐに破れるビニールか何かではないのか。それを誤魔化すために、動き回って、私の目を欺こうとしているだけではないか。

「何をしている。なんで、ガラスの奥なんかに居るんだ。そんな所に居ても、何にもならないだろう。それとも、そこから出られないのか。足元を探せよ。石ころくらい落ちてるだろ。それで、ガラスを割って、出て来いよ。いいや、そんなガラスなんか、唾を吐いただけで、割れそうだ。」

私は叫んだ。

私の叫び声は、ガラスの表面を震わせて、その奥に伝わったようだ。私に似た者は、その伝わった私の声に傷付いて、裸の肌のあちこちに血が滲ませた。

私は慌てて、叫ぶのをやめたが、ガラスの表面は震え続け、私に似た者は、飛んでくるガラスの破片を受けた傷の痛みにでも、のたうつようだった。しかし、男に喉を締め付けられていて、どうして、私は、叫び声を上げる事が出来たの

か。男の手は、まだしっかり私の喉元を掴んでいた。私は、男にそれを尋ねようとしたが、その途端に喉が苦しくなって、息が止まった。私は、痛みに耐えるために、私の目は、グリグリと見開かれた。それで、暗い洞穴の中が、白っぽく明るく見えて来た。その洞穴の中を見回した。私の首は、骨を抜かれたかのように、クルクル回り、三六〇度同じように見渡せた。洞穴の底は円くて、その八方に、綺麗に散って、八人の者達が、しゃがみ込んで、地面を掘っているようだった。皆、洞穴の側面の方を向いて、私には、丸い背中しか見えなかった。時々、振り下ろさせる腕と、握り締めている鳥の脚が、見えた。泥水の水玉と、組み合う男女の姿が、見当たらない。私は、何度も首を回して、その姿を探した。

「どうした。何を探してる?」と、男が聞いてきた。答えてはいけないのだ。また耐え難い喉の痛みに襲われるに違いない。しかし、男にならば、二人の姿は見えているかも知れない。暫く迷って、思い切って聞いてみる事にしたのだが、二人を言い表す言葉が出てこなかった。たとえ出て来ても、それを男に向かって口にする事は、どうしてか憚られるようだった。

「ほら、そこだ。」と、男が、上から指差した。男は、目の翼を羽ばたかせて、私よりずっと高い所にいた。では、私は、どうして立っていられるのか。皿の山を転げ落ちる覚悟をしたが、私は、そのままだった。私の喉は、背の低

い、赤く細い幹のひょろひょろと曲がった木の枝の股に、挟まっていた。どうやって、この木を皿の山の上に植える事が出来たのか。それもまた、男に聞いてみたくなった。その瞬間、さっきよりもっとひどい痛みが喉を襲った。舌ビラが飛び出し、喉の奥までが飛び出そうになって、私の体は、枝の撓みの反動で、そこから抛り出され、宙返りして、地面に叩き付けられた。地面は、湿ってはいたが、水は殆ど引いていた。（二〇〇一年十一月十五日）

樹液

四本の足が、横に並んでいた。見上げると、その二人は、私には似ていなかったが、私に似た者には似ていた。その内の一人の目は、二つとも真っ白で、もう一人の目は、二つとも真っ黒だった。少しだけ、背の高さに違いがあるのは分かるが、どちらが背が高いかは分からなかった。私は、腹這いで、首をいっぱいに反らしていた。二人は、腕を後ろに組んで、少し胸を張って、私から目を逸らすように、真っ直ぐ前を向いていた。白目の方が、大きく開いて尖ったまま前に突き出した口から、黒い息を吐いた。それは、一塊りになって、私の顔に落ちてきて、私は、それを、それまでずっと息を止めてきたかのように、

思い切り吸った。喉を締め付けられるように感じて、咳き込んだ。喉はまだ潰れたままで、私は、痛みに耐えかね、喉元を両手で押させて、何とか、咳を止めようとした。黒目の方が、黄色い息を吐いた。それは、黒い息よりずっと大きな塊になって、私の顔に落ちてきた。私は、目がチカチカして、涙が溢れてきた。その涙を通してみると、私の吐く息は、真っ青で、それが、スプレーを吹き掛けたように、四本の足の内の内側の二本を、青く濡らしていた。それに連れて、外側の二本の足が、白っぽく見える程だった。咳は、段々と細かくはなっても、止まらなかった。しかし、私の青い息が、二本の足に吹き掛かるのを見ていると、痛みは、少しだけ、忘れていられるようでもあった。

　その四本の足が、バラバラに左に向きを変えた。何処かに行く積もりだ。私は、右側の青い足を、何とか両手で掴んで、引き寄せた。そこに、間近で息を吐き掛けると、息は、その脚を伝って、拡がりながら、昇って行くようだった。二人は、甲高い咳を立て続けにした。それは、なかなか止まらなかった。彼らは、肩を抱き合って、体を左右に揺らしながら、それを堪えているようだった。私は、もう一本の青い足も掴んで、その両足に頬ずりしながら、更に息を吐いた。私の咳は、止まっていた。二人は、尚も細かく咳き込みながら、ゆっくりと足の向いた方に歩き出した。私の体は、薄い布切れのように、引きずられた。二人が皿の山に向かっているのが分かったところで、私は、手を放した。もう

皿は沢山だ。私の体は、そのまま風を孕んで、地面スレスレを浮き上がって、洞穴の端に向かって、流されて行った。自分で向きを変えられないものか、試してみると、案外巧く行った。地面に着く事なく、洞穴の底を動き回れるようだが、風に乗っているからには、一度止まったら、そこで地面に着いて、それっきりなのだろう。それに、風は、皿の山から吹き下ろされて来るように感じられて、取り敢えずは、皿の山の周りを、回り続ける事にした。

私に似た者に似た者達は、甲高い細かな咳を止められないまま、皿の山をよじ登ろうとしていた。黒目の者が先に登って、その小さな尻を、白目の者が押し上げていたが、二人は、その姿勢のまま、なかなか上に進まない。下の白目の者は、まだ皿に足を掛けてもいなかった。それでも、皿の山は、二人の足元で、ガチャガチャと細かく崩れた。そのせいか、山の上の赤い細い幹の木が、少しだけ傾いた。二人の息に、色は着いていなかった。しかし、それは、木の葉が、二人の色の着いた息を吸い取っていて、私の目に見えないだけではないか。独りでに揺れるような木の葉を付けた枝先は、もうすっかり黒ずんでいて、幹の方では、黄色の樹液が滲んでいないだろうか。ただ、まだ、少しだけ目がチカチカしていて、自分の目を信じ切る事は出来なかった。私は、二人の姿から目を離したくなかったので、皿の山の周りを回るのではなく、二人の居る側の前で、出来るだけ小さな８の字を描いて、そこに留まる事にした。すると、

それを、黒目の者が、無理な姿勢で振り返って、見咎めた。私が８の字を描くから、それに引っ張られて、少しも登れないのだと、咳き込みながら叫んで、毛むくじゃらの両腕を振り上げて身を翻したので、その体は、下から支える白目の者の手を滑り落ちて、地面に転がった。黒目の者は、直ぐに立ち上がり、二人揃って、私の方に近付いて来た。このままでは、布切れのように踏み付けられてしまう。直ぐにも逃げたいが、私の姿勢は、８の字を描くまま、固まってしまっているようだ。それで、８の字の向きやスピードを変えては、二人の足元で、逃げ回るばかりだったが、二人は私の動きの付いて来られず、私は、彼らの足の間を、危なっかしくも擦り抜け続けた。

　二人はまた、激しく咳き込んで、黒と黄色の息を吐いた。しかし、それは、先程よりずっとドロドロしていて、私の所に落ちてくる前に、彼らの体に纏わり付き、彼らの動きを更に鈍くさせた。二人は、私の事など忘れてしまったかのように、互いに相手を罵りだし、地団駄踏む度に、私から離れて行った。そのドロドロの息の塊は、彼らより大きく膨れて、二人の間に挟まった。二人の体は、そこから生えた二枚の翼のように見えた。私は、それを、何時の間にか立ち上がって見送っていた。ただ、地に足を着けているかどうかは怪しくて、布切れのようなまま、風の力で、体が縦にされているだけのようだった。

　薄二人が洞穴の隅まで行き着くと、その息の塊が、洞穴の側面にへばり付き、

そこで二人が、咳き込みながら藻掻くと、彼らの体は、独りでに、その垂直な側面に引き上げられて行くように彼らに近付いて、皿の山に登るのはどうなったのかと、立ったまま、滑るように彼らに上の赤い幹の木に聞かれては、まずいように思えたからだ。彼らは、口も耳も、自らのドロドロの息に塞がれているようで、返事は返って来なかった。背中に一筋冷たい風を感じ、洞穴の側面に沿って、真っ直ぐ上をずっと見上げると、目から翼を生やした男が、洞穴の上の縁から、下を覗き込んでいた。目の翼は微かに揺れて、洞穴の中に風を送り込んでいて、その風のせいで、私は、立っていられるのかも知れない。男の姿をもっとよく見るために、私は、知らず知らずに後退っていた。改めて二人を見ると、やっと足が地面を離れた所で、もうそれ以上登れなくなっているようだった。私は、彼らのために出来る事もあるかと思い、話を聞ければと、また彼らに近付いて行った。

「それ以上、近寄るな。お前の息のせいで動けなくなったんだ。」と、黒目の方が、私を睨んで言った。

「そんな筈はない。私の咳は、もう止まっていますよ。あなた方が動けないのは、自分達の息のせいでしょう。」と、私は、尚も近付きながら言った。

「デタラメを言うな。お前は、ずっと咳をしてるじゃないか。」と、黒目の者が言うと、確かに、私は咳をしていた。それは、今、黒目の者と話して、そ

の息を吸ったからではないか。しかし、黒目の者の息に、色は着いていなかったし、咳もしていなかった。いや違う、私に咳をさせたのは、白目の方の黒い息だ。白目の者は、黒目の者の後ろに隠れていて、その息の色も見えなかった。一方、咳の止まらなくなった私の息は、黒かった。どうして黒いのか。青ではなかったのか。それともそれは、黄色い息を吐き掛けられて溢れた涙が、全て乾いたと言う事か。

風が止まるのを感じ、私はまた、そろりそろりと、地面に俯せになるしかなかった。布切れのようだった私の体も、元の重い体に戻った。地面の匂いが鼻をついて、喉がひりひりし、咳が出るたびに、足を激しくばたばたさせて、喉の痛みを堪えなければならなかった。真上から、細かい唾と一緒に、男の声が、響き落ちてきた。洞穴の中を反響して、低音に聞こえた。

「何時まで、横になってるんだ。」

確かに、足をばたつかせる力があるなら、その力で立てるかも知れない。それで、地面の匂いも嗅がずに済む。しかし、それには先ず、咳を止めなければ、どうにもならない。黒い息を全て吐いてしまえば、咳は止まるだろうか。私は、わざと大きく咳き込んだ。

「後ろを見てみろ。」と、また、男の声が落ちてきた。体の向きが変わると、黄色い光を差し昇らせる排水口が見えた。それは、みるみる近付いて来た。私

の体は、そちらに向かって滑っていて、そこに落ちるのは、時間の問題だろう。排水口との間の、後ろに流れ過ぎて行く地面の一点をじっと見詰めると、鈍く光る小さな点が見付かった。それは、二度跳ねて、私の口に飛び込んだ。甘い味かも知れなかった。そう思う事にした。まだ地面には、泥水の水玉が、少しは残っているのだ。私は、排水口に向かって一直線に地面を滑りながら、腕を拡げたり縮めたりして、その水玉を掻き集めようとした。（二〇〇一年十一月十七日）

霧

水玉は、殆ど目には留まらなかったが、口を開けたままでいると、次々に、直に喉に届いた。そうして潤った喉の痛みは癒され、咳は止まった。直ぐにもその場で立ち上がろうと、背筋を反らして、両腕を地面に突き立てた。滑る速さは一遍に落ちたが、両掌の開いたままの傷口に、また泥が詰まって、裂かれるような痛みが走った。それでも構わず、膝を折って、地面を斜めに蹴ると、私の体は伸び上がって、棒のように突っ立った。そこは、排水口の真上だった。黄色い光の中に居た。足の下に地面はない。真っ直ぐ、排水口に落ちるしかな

い。最悪のタイミングで立ち上がってしまったようだ。横になったままでいれば、その滑る勢いからして、何もなかったかのように、排水口の上を行き過ぎる事が出来たに違いない。私の背の方が、排水口の直径より、長いのだ。それとも、横になって滑りながらでも、排水口の上に来た瞬間、私の体は、そこで、急に真下に向きを変えて、穴の中へ真っ逆様だったろうか。それなら、頭から落ちるか足から落ちるかの違いでしかない。いや、勢いを付けて頭からでは、何も出来ないが、殆ど止まり掛けたところで、足から落ちようとしているのなら、まだ遣りようはあるのではないか。私は、両腕をがむしゃらに振り回した。上体が傾いて、落ちる途中で、腰が排水口の縁に当たった。腰は、その縁をくるりと一回転し、私は、その先の地面へ、仰向けに投げ出され、そこからまた、後ろに滑って、洞穴の側面に頭をぶつけた。

　そこは、私に似た者に似た者達が側面を登ろうとしている、ちょうど向かい側だった。彼らは、もう、見上げなければならない程、その中程まで登っていた。私は、今度こそ立ち上がろうと、先ず上体を起こした。しかし、掌が、どうしても地面から離れないのだった。無理に剥がせば、逆剥けのもっとひどい傷を負うだろう。地面を掘り返して、地面ごと持ち上げれば何とかなるのかも知れないが、手が塞がれていては、それも出来ない。

　排水口から、女と男が、後ろ向きに、頭だけ出した。下から黄色い光を受け

て、首筋と耳を、透き通るように輝かせた。私は、掌を地面に着けたまま、腰を浮かせ、雑巾掛けのような恰好で、彼らに近付こうとした。前に進んではいるようでも、なかなか近付けない。真上から、誰かが私を呼ぶように思えて、上を向くと、私に似た者が、殆ど逆立ちに近い姿勢で、大きく目を剥き、額に皺を寄せて、じっと私を見下ろしていた。ガラスの壁と、洞穴の側面との間に、隙間が出来ていて、そこに無理に頭をこじ入れているようだった。もう少し頑張れば、そこから、胴体も出して、私の所に降りて来られそうだ。しかし、無理をすれば、ガラスの壁が丸ごと剥がれて、私の上に落ちてきそうだった。そこに隙間が出来ているのも、ガラスの壁が剥がれ掛けているからではないか。私は、しかし、何をどうして欲しいとも言えず、成り行きを見守るしかなかった。私に似た者も、その苦しげな表情からして、そこを動けずに居て、何をどうしていいか、分からずにいるようではないか。

　それを見上げている内に、私は、排水口の直ぐ手前に来ていた。まるで排水口の方から、こちらにやって来たかのようだ。二人の頭はどちらも、髪の毛を全て剃ってツルツルだった。どちらが男で女かも分からない。息を吐き掛けてみれば、何か分かるだろうか。黄色い光の中で、私の息は青かったが、それが、二つの頭に掛かっても、その輝きはそのままだった。間近で見ると、金属のような輝きだった。これが人間の頭だろうか。私は、それに触ろうとした。私の

両手が、吸い付くように、二つの頭の上に乗った。両掌が、左右の頭の丸い形を感じ取った。しかし、生き物の頭なら、少しは歪な所があっていいのではないか。頭は、完全な球体のようだ。私に似た者の声が、真後ろの斜め上から落ちてきた。洞穴の中を反響して、巧く聞き取れない。何かに怯えるように、細かく震えているのは、聞き取れた。怯えているような奴の意見に、聞く耳は持たない。私は、私の掌の傷口がどうなっているか、感じ取ろうと、二つの頭をゆっくりと撫でた。掌も、頭と同じようにツルツルに違いなかった。その掌を、ずっと頭に密着させていたかった。たとえまだ傷が塞がっていなくても、傷などないように感じられるからだ。

　二つの輝く球体は、少しずつ沈んで行き、そこに掌を置いたままの私の体もまた、排水口の中に、ズルズルと滑り降りて行くしかない。真面に見る黄色い光は強すぎて、何も見えなくなった。両足の甲が、排水口の縁を擦って、全身が穴に呑まれると、私は、自分が何処にどんな姿勢でいるかも分からずに、掌を置いた球体に導かれるままだった。いや、球体はもう掌を離れ、掌はただ、球体の上に置かれていた形のままであるだけではないか。その形さえ保てば、私は、まだ、奥へ進む球体に導かれるかのように、奥へ進めるに違いない。ずっと先の遠くで、微かに風が鳴った。排水管の出口に風が当たって、笛のように鳴るようだった。それに耳を澄ませたせいで、私はバランスを崩した。球

体と同じ丸みに揃っていた指先も、すっかりバラバラになって、何かをまさぐるように、振り立てられるしかなかった。私は、何処へか落ちて行くしかない。何も見えないでは済まされない。何処へ落ちるか見定めて、体勢を整えるのだ。出来る限り目を細めて、光の中に、物の形を探った。

艶々した四つの黒い楕円が、四方に浮きがって見えた。そのそれぞれを、柔らかそうな肉の塊が支えていた。それらは、四方から真ん中に集まって、一つに成りたがっているようだった。黒い楕円のそれぞれが、その真ん中に向かって、前後に振られた。真ん中は、白く輝いて、四角くなった。白い四角いテーブルの四隅の角に、剥き出しの腹をきつく押し付けて、四人が向かい合っているのだった。そして、どうやら私は、そのテーブルの真上に、照明器具か何かのように、逆さまに吊り下がっているようだ。四人とも、手に一本ずつ、鳥の脚を握っていて、それをテーブルに突き立てては、頭を振り振り、グリグリと動かしていた。テーブルは、白いままで、鳥の脚で幾ら小突かれても、傷一つ見当たらなかった。四人は、それぞれの腹を、テーブルの角にグリグリ擦り付けて、盛んに向かい側の者に向かって、透明な息を吐いていた。周りには、白い霧が迫っていて、その吐く息によって、辛うじて、互いの姿が霧に包まれてしまうのを、防いでいるようだった。

「そんなに、腹を、角に押し付けたら、腹の皮が破れてしまいますよ。」と、

私は、四人の内臓が一斉に噴き出して、真っ白なテーブルが汚されるのが心配になって、つい鋭い口調で言った。私の声は、音ではなく、光になって、テーブルの上に落ち、それを四人が見て取ったようだった。四人は無言で、同じ事を続けた。声を光にする能力が、私には備わったのだ。そのような私なら、四角いテーブルを丸くする事くらい簡単ではないか。私は、四隅に向かって、丸くなるようにと、声を掛けた。声は、光になって、四隅を溶かすように見えた。しかし、それは、光が強く当たりすぎて、眩しくて見えなくなっただけではないか。私はまた、知らない間に見開かれていた目を、しっかり細め直した。すると、四隅は、私の声の光によって、益々角張っていて、もう四人の腹に突き刺さっているのが分かった。角が溶けたように見えたのは、角が腹に埋まったせいだ。四人の表情に目を向けた。四人とも顎の尖った色白の細面で、目を閉じて、鳥の脚を握ってはいたが、手はどれも止まっていた。私は、慌てて、彼らの腹に向けて、次々に息を吐いてみた。私の顔が水浸しになった。息の積もりで吐き出されたのは、全て泥水だった。彼らは、それを避けようと、テーブルから飛び退いた。テーブルは、十文字の割れ目が出来て、彼らの腹に突き刺さったまま、四等分された。

　私は、そのテーブルのあった所に頭から落ちた。そこは恐ろしく硬くて、全体重の掛かった額が、粉々に砕けるようだった。白い霧がそこだけ立ち込め、

私の潰れた体を隠すようだった。それとも、その白い霧が、潰れた私の体かも知れない。確かにそれは、肉の塊のように、そこに凝り固まって動きそうにない。それは、次第に青味を増して、黄色いドロリとした液体を吐きながら、ヒビの入った所から剥がれて、何処かに飛んでいった。そうして霧が晴れた後には、すっかり小さな体になった私が、バラバラになった私のために、忙しく立ち働いていた。しかし、よく見ると、その小さな私は、バラバラの私の間を走り回っているだけで、何の役にも立っていないようだ。どうやら、小さな私は、私ではなくて、泥水の水玉が、その表面を乾かして皮を張って出来た、鼠か何かの小動物の似姿のようだ。そいつは、自分が毒の水を飲んだ事を知っていて、走り回って、何とかそれを排泄したがっているに違いない。（二〇〇一年十一月十九日）

無知

　丸くなりすぎて、つんのめっては、そいつは、全身から、細かな霧を吹いた。バラバラの私は、どれも濡れていって、その水気に含まれた毒を染み込ませた。私は、バラバラなまま、間違いなくその毒のせいで、冷たくなっていった。そ

の中の一番冷たい私は、冷えすぎてそのままではいられず、小さな穴になった。
走り回っていた奴は、一目散にその中に落ち込んで、見えなくなった。
見えなくはなったが、その穴になった私には、そいつが中で、まだ走り回っているのが、分かった。そして、そう分かる事によって、その私が、私の心臓だと分かった。そこには、どうやらもう、血の一滴も、その匂いさえもなくて、それが不安で、その鼠か何かの似姿は、何でもいいから何か感じ取れるものを探そうと、鼻を鳴らして走り回らずには居られないようだ。そこでは、冷たくなりすぎて、まだ残っているかも知れない体内の毒も、とても、霧にして吐き出せそうにない。凍えて固まってしまわないためにも、動き回るしかなさそうだ。他のバラバラの私の内の幾つかが、歪な自らの体を、やっとの事で擦り合わせて、それぞれに、小さな声を作った。冷たい空気の中では、それらは直ぐに一つに固まって、心臓の穴の上で光になって、中に差し込んだ。中に入ると、光は、何もない中でも、黄色っぽい一本の光線にはなれたが、少しもその周りを照らせなかった。動き回る似姿は、その光線を伝って、穴の外に向かって走ったが、途中で、すっかり、光に呑まれた。光線は、崩れて光を失い、灰のように散った。吸い取った毒も、全て燃え尽きたに違いない。すると、バラバラの私の内で、どれが私の心臓か、分からなくなった。どれにも穴が開いていて、どれもが、一番冷たそうに見えた。

それらの穴の上は、次第にまた、霧に覆われた。バラバラの私の中で、ただ一つだけ、霧の中に浮き上がる事の出来る私が、穴を見渡して、その中に一斉に、息を吹き掛けた。湿りきった冷たい風が穴の中に送り込まれると、開いたままの穴が、どれもボロボロに崩れて、消えて行った。残された、息を掛けた私は、独りでは、とても寒くて、そのままでは居られなかった。私は、宙に浮いたまま虚ろに固まって、眠気が、その私を掬い取って行くようだった。

　気が付くと、私は、バラバラになって、テーブルの上に乗っていた。その有り様を細かい所まで見る事も出来たが、一つ一つの私が、どんな形をしているのかは、分からなかった。何処に目を付けても、そこが、どんな形のように、一度にあらゆる方向から、細かく見えてしまって、そこが、回る独楽の部分なのか、見て取ろうとしても、目が回るだけだった。そのテーブルに向かっているのは、一人だけだったが、しかし、それも私ではないのか。

「私じゃありませんよ、そんな訳ありませんよ。私は、私じゃありません。おかしいですか。しかし、そう言うあなたは、誰ですか。」と、その一人は言って、陽気に笑った。私は、テーブルの上を見渡した。真っ白で、傷一つなくて、そこには何も乗っていなかった。

「もうやめましょう。馬鹿馬鹿しい。」そう言ったのは、一人でテーブルに向かっている私に違いなかった。私は、辺りを見渡して、その私に向かって私

ではないと話し掛けて笑った者の姿を、追った。誰も居なかった。
「ここですよ。」と言って、男がテーブルの下から、窮屈そうに出て来た。目から翼を生やしていたが、初めて見る顔だった。男は、翼をパタパタさせながら、辺りをキョロキョロ見渡した。すっかり姿を現したのに、尚も「ここですよ。」「ここですよ。」と、繰り返しながら、椅子を探しているようだった。
「遅かったですかね。それとも早すぎたのかな。驚く事なんて何もありません。これは、約束事の内です。いやいや、それを私に教えてくれたのは、あなたでしたね。すると、驚くのは私の方か、ハハハ。だったら、あなたはもっと、角張った顔付きをしていればいいのに。そんな、柔らかそうな丸まった顔じゃなくて。顔色にしても白すぎます。今にも、溶けてしまいそうで、見ている方が、ハラハラします。毒でも飲んで、遊んでる方が、ずっと呑気な気分で居られます。毒と言えば、毒を食らわば皿まで…。あなたの顔は、食われた皿のように、白くて、粉々に砕けてませんか。尤も、そう見えるのは、ここだけの事ですか。ハハハ。」
　そう言って、男は、目から、丁寧な手付きで、その小さな翼をもぎ取った。それから、少し先まで響いて行った彼の笑い声が、椅子になって戻って来たかのように、椅子を取り寄せ、そこに座り、テーブル越しに私と向き合おうとした。しかし、そこには、彼一人しか居ないようだった。小さな目を奥の方でパ

チクリさせ、笑っていた口をきつく結んで、テーブルの縁を、なぞるように何度も見渡した。そのテーブルは、円くて白かった。更に、男が、繰り返しその円い縁を、強く見開いた目でなぞると、そこだけが、ジリジリと赤くなって、湿ってゆくようだった。私は、少し慌てた。

「そういう事は、やめた方がいいんじゃないですか。毒を呼び寄せては、啜るようなものです。霧は、これだったんですね。見えないんですか。円い縁から、輪になって、次から次に、立ち上っています。そして、私達の頭の上で大きくなって、風を巻き込んで、拡がって行きます。輪になって拡がったその風が、私達を遠くからぐるりと取り囲み、そっと沈み込んでから、一斉に私達の方に向かって流れて来ます。ですからここは、集まってくる風の中心です。」

と、私は、早口に言いながらも、どうして説明口調になってしまうのか、考えていた。私の言葉の後に、それに従って、霧や風が起こるからではないだろうか。それとも、そう勘違いしたくて、わざと、その口調を用いるのか。しかし、霧や風の事など、どうして、私に説明が出来るのか。寧ろ、私は、自らの無知を男にさらけ出したくて、そうしているのではないか。では、男は私より知っているのか。それとも、私よりもっと知らないので、私は、安心して無知をさらけ出せるのか。

　そうして尚も考えながら、椅子から腰を浮かすような姿勢で、テーブルの縁

を、ゆっくりゆっくり撫でているのは、私だった。私独りが、そこに居るだけだ。椅子すら、尻の下にはないだろう。私の掌は、擦れて血塗れになってゆくようだった。生温かかった。私はテーブルから手を離し、掌を見た。真っ赤だと思えた掌は、少しドロリとした透明な液体が、滴り落ちるだけだった。掌を指先で撫でても、傷らしいものはない。指を舐めると、血の味がする。もし血なら、テーブルの縁から染み出したに違いない。それとも、指が血の味がするのは、当たり前なのか。指は、血で出来ているのだし、私の舌ビラは、その血を吸うように、ザラザラしているのだから。もう一度、その色を確かめようと目を凝らすと、掌は、白い霧が掛かって、見えなかった。やはり、ここは風の集まる中心なのだ。私は、風と霧について知っていたのだ。いや、そんな事に喜んではいられない。見失われた両手は、直ぐにも、目から翼をもぎ取った男によって、切り取られて、何処かに持ち去られてしまうのではないか。両手を合わせて、それがまだ有るのを確かめようとしたが、霧の中で、両手は、なかなか合わさってくれなかった。私は、強く息を吹き掛けて、霧を払おうとした。指の先の冷たい感覚が、戻って来たようだった。後は、左右のそれを、真ん中で一つにするだけだ。そうして、冷たさが合わさった所からは、しかし、何の手応えも返ってこなかった。手は、もう持ち去られたのか。

　私の周りは、濃い霧で覆われていたが、目を少し遠くに向けると、そこには

霧は掛かっていなくて、左右の二ヶ所で、四人ずつの、手に鳥の脚を握り締める者達が、固まっているのが見えた。彼らは、背中を丸めて立っていて、それぞれ内向きになって、その中で、私の掌を調べているのではないだろうか。彼らの話し声が、両方から聞こえて来る。その内容は、写し取ったように同じで、私の掌そっくりの形で、私の左右の耳の中に、一つずつ、入り込んできた。彼らは、私の掌がとても柔らかい事ばかりを、言い合っていた。放って置けば、彼らは、私の掌に、鳥の脚の尖った先を突き立てて、穴だらけにしてしまうだろうか。私は、真っ直ぐに駆け出した。しかし、左右の間には、距離がある。両方に行き着くには、体が二つに裂けでもしない限り無理だ。私は、直ぐに、先に進めなくなって、霧の中で、真横に拡げられた両腕を、動かせなくなった。もう、前を見ても、何もない。(二〇〇一年十一月二十三日)

瞼

伸びた腕の先に、四人ずつの者達が居て、私の手首を掴まえているのだろう。それを離せと叫ぶのは簡単だが、彼らによって、却って、私の手は、守られているようにも思えた。彼らが、尖った鳥の脚で、私の掌に洞穴を掘る積もりな

ら、私は、掌を彼らに差し出すべきではないか。掌に洞穴があるなら、それだけ私は、大きくなれたのだ。どれ程のものを、そこに蓄えられるだろう。私は、彼らに、私のその気持ちを伝えたかった。彼らに掌を委ねているのを、私が嫌がっていると、彼らは思っているかも知れない。私は、左右交互に忙しく首を振った。額を突き合わせるようにしている彼らの頭だけが、見て取れた。彼らは皆、髪を短くしていて、その白い耳の形を、全て露わにしていた。そして、どの耳の穴も、初めから、そこには穴など開いていなかったかのように、綺麗に塞がっていた。私は、鳥の脚でなくても、何か尖ったものを見付けてきて、それで、その耳の穴を塞いでいる、微かに盛り上がった白い肌を、突っついてみたくなった。一突きすれば、そこから余分な血が噴き出して、直ぐにもそこに、穴が開きそうに見えた。気持ちを言葉で伝えるには、そうして、私の声を、耳の奥まで通すしかないのだ。

それとも、彼らは、私の掌に穴を開けて、そこを彼らの耳の穴にしようとているのだろうか。私は、彼らから、掌を取り返したくなって、両腕を振り立てた。脚がふわりと持ち上がり、頭より高くなった。私は、掴まれた両腕を伸ばしたまま、空中で逆立ちして、上下のひっくり返った後ろの様子を見る事になった。

その私の目の位置より、やや低い辺りに、男が、円いテーブルに向かってい

て、その上の、バラバラの私を、あれこれ手に取っては、テーブルの上に並べ直している。男は、また目から翼を生やして、パタパタさせていた。翼はそれだけでなく、よく見ると、バラバラの私も、それぞれ二枚の小さな翼を着けていた。それらは、男の目のものと違って、萎れたように畳まれていた。

「また、翼を付けたんですね。」と、私は、言った積もりだった。声までも逆立ちしているようで、それは、空耳のようにも聞こえた。ただ顎をガクガクさせただけかも知れない。

「こっちに来ませんか。」と、男は言った。私は、返事をしそうになったが、それは、私の両脇の八人に向かって掛けられた言葉だった。彼らは、私の腕を放して、テーブルの方に行った。私は、宙返りの途中で、止まってしまったように、空中に取り残された。また、両腕を振り立てようとしたが、びくともしない。テーブルには、二人の者が、男と向き合って、椅子に掛けた。つまり、両側から一人ずつが呼ばれて、残り三人ずつは、まだ、私の腕を掴んだままなのか。

テーブルの三人は、バラバラの私を手にしては、言葉を交わし、品定めでもするようだった。いや、それらはもう、バラバラの私ではなくて、別のもののようだ。緩い風が微かに私の方に吹いていて、彼らの口から出た臭い匂いが、鼻をついた。それは、人の口の臭さではなかった。ケダモノの匂いとも違う。

よく洗って乾かした石ころを、鼻に持って行って、嗅いだような匂いだった。彼らの口の中が覗くと、歯も歯茎も舌も、黒っぽい石に見えた。そして、その息が、テーブルの上のものに吐き掛けられると、それらは、嫌でもまた、バラバラの私になるのだった。そして、そのどれにも、穴が開いていて、その中は真っ暗だった。私は、逆さまの息を吐いた。息は、穴の数だけに分かれて、一斉に、穴に吹き掛かった。穴の縁が音を鳴らした。テーブルの三人は、素速く手で耳を塞いだが、まるで手遅れだった。三人の六つの耳が、テーブルの上に落ちて、バラバラの私の中に混ざり込んだ。彼らには、それがどれだか分からなくなってしまったようだ。私には、見分けがついた。耳朶は、バラバラの私に比べて、一際白かった。

二人の目からも翼が生えて、三人の顔は、同じになった。それから、彼らは、立ち上がっては、席替えをした。ただ、後の二人の方が、ずっと体ががっしりしていたので、区別は付いた。彼らの臭い口の匂いを吹き払うために、私はまた、唇を尖らせて、大きな長い息を吐いた。それは、また、テーブルの上に吹き掛かったが、今度は、テーブルの上を一回りして、六つの耳の穴の中に吹き込まれた。耳朶が、薄い紙のように震えて、楽器のような細く長く高い音を鳴らした。それで彼らは、彼らの耳とバラバラの私とを見分けられたようだ。

「もうそろそろ、はっきりさせましょうか。」と、一人が言った。何時の間

にか、三人は、体格まで揃って、私には区別が付かなくなっていた。
彼らは、テーブルの中心に、彼らの耳だけを集め、三人掛かりで、そこに盛んに息を吹き掛けた。彼らしたような音を鳴らそうとしているのかも知れないが、聞こえてくるのは、私が鳴らした彼らの息の音だけだった。六つの耳は、それに、彼らの息の湿り気と唾で、ヌルヌルと濡れていった。六つは、それで一塊りになり、三人が、三方から、一斉にそれを掴むと、それは、細長い花瓶のような形になった。私は、そこに、一輪挿しのように挿されたかった。声を出して、それを口にしたかも知れない。
「そうですか。そうしたいと言うのなら。」と、私に一番近い者が振り向いて、逆さまの私に近付いてきた。私が腕を振ると、私の体は少しだけ舞い上がった。近付いて来た者が、背伸びして、腕を伸ばしたが、後ほんの少し、私に届かないようだった。両腕は、風に乗った翼のように軽かった。しかし形は、逆さまの翼ではなく、剥き出しの、細い人の腕のままだった。ただ、私の掌には、鳥の脚の大きな洞穴が掘られていて、その底では、三人がしゃがみ込んで、爪を突き立てては、まだ掘り進んでいた。
「どうして逃げるんですか。」と、近付いて来た者ではなく、テーブルの向こう側に腰掛けている者が言った。その声で、私は、それが、最初から目に翼を生やしていた男だと分かった。

「別に逃げる積もりはありません。ただ、この人に無闇に触れられたくなかっただけです。」と、私は、逆さまの声を、その男の方に投げ掛けた。もう一人も、私の方に近付いてきていた。二人は、左右に分かれ、それぞれ私の掌を見上げて、その中の洞穴を覗き込んだ。きっと仲間と一緒に穴を掘り進みたいと思っているのだろう。しかしもう、目に翼を生やしてしまっては、加わる事は出来そうにない。

「翼をもぎ取れば、また元に戻れますよ。」と、私は言ってみた。私としては、もう彼らには、今更、洞穴に入って来て欲しくはなかったが、逆の態度を見せておいた方が、彼らを丸め込めるように思えた。それに、翼をもぎ取れたところで、彼らの体は大きすぎる。洞穴に入るには、先ず、私の掌に乗らなければならないだろうから。

二人は、私の言った通り、目から翼をもぎ取ろうとしたが、手に鳥の脚を握っていて、なかなか巧く行かなかった。その内、短気を起こしたのか、鳥の脚で、翼を突っつきだした。翼は、細かく羽ばたいたので、尖った鳥の脚の先は、何度も瞼に突き刺さった。その度に、彼らは、歯を食いしばって、体をブルブルと震わせた。目の周りは、みるみる、突き傷でいっぱいになっていった。

「もう、いい加減、分かったでしょう。何時まで続ける積もりなんですか。諦めて、テーブルに戻った方がいいですよ。」と、私は言った。言いながら、

言わなくてもいいような事だと、思った。
「ふん、本当は、私達がずっとこうして目を突っついて、弱り切って、どうにかなってしまえばいいと、思っているんでしょうね。」と、一人が言った。
「最初っから、こうさせる積もりで、忠告めいた事を言ったんですね。」と、もう一人が言った。二人とも、そう言いながらも、翼を狙っては、瞼を突っつくのをやめなかった。
私は、念のため、また腕を振って、彼らが、私の掌の洞穴に向かって飛び上がっても届かない所まで、昇ろうとした。しかし、却って、私の体は重くなって、彼らが腕を伸ばせば、私の首根っこを掴まえられる程に沈んでしまった。ただ二人はもう、その下の地面にへたり込んで、鳥の脚を両目の瞼に突き刺したまま、殆ど動かなくなっていた。私は、彼らの頭を見下ろした。彼らには、先程から、耳はないのだ。では、どうやって私の声を聞き取ったのか。彼らは、交互に左右の掌を見た。それは、見ようによっては、耳の形をしていた。私は、掌は、もう彼らの耳になってしまっていたのか。それなら、洞穴は、彼らの耳の穴なのだ。私は、飛ぶ力を失って、二人の上に落ちて、重なった。（二〇〇一年十一月二十五日）

二人に覆い被さる私が、翼を拡げて、二人を守っているかのようだった。二人は、背中を丸めてしゃがみ込み、耳のあった所に掌を押し付けて、耳を塞ぐ恰好だが、掌をそこに擦り付けて、自分の手を、耳にしようとしているようだった。

「成る程、耳朶に見えますよ。でも、相変わらず、耳の穴は、塞がれたままですね。」と、私は、額と額を擦り合わせる二人の脳天に向かって、声を掛けた。耳など通さなくても、頭蓋を通して、直に声は、頭の中に通じてゆくのではないか。すると、私の頭の中に、水の流れ落ちる音が鳴った。私は、俯せのまま無理に首を捻って、上を向いたが、眩しいだけで何も見えなかったし、そうすると、水の音は、下から湧き出すような音になった。私は、首を一回転させた。当然、体もそれに引き回されるように、一回転しただろう。私の下の二人が、何処かに見失われた。仲間の掘った洞穴に、私が、彼らを、突き落としてしまったのだろうか。水の音が、私の両方の掌の中から、籠もって聞こえてくる。私は、それを耳に近付けて、その水の動く形を、思い浮かべようとした。そうしている私を、誰かが、覗いているのに気付いた。その覗き穴は、ポツンと宙に浮いていた。私は、そちらに身を乗り出し、その覗いている目を、間近

に覗き返した。目の玉ではなく、小さな二枚の剃刀の刃が、細かく震えていた。思わず、穴から少しだけ目を離すと、二枚の翼が、パタパタと羽ばたいているのが、目に入った。覗いているのは、テーブルに独り残った男のようだ。その翼が、ぐにゃりと柔らかくなって、穴を通って、私の目玉に乗り移ってきた。その穴は塞がり、私の目は、私を覗いていた男と、その翼を共有する事になった。私達の目は、その翼によって結び付けられ、離そうにも離れなかった。額や頬や唇は、翼の厚みの分だけ、離されていた。

「水は、何処から来るんですか。あなたが、引いて来たんでしょう。翼の中だって、きっと、血ではなくて、透明な水が通っているんでしょう？　その水が、管のようなレンズになって、外のものを、映し取るんでしょう？」と、私は、畳み掛けるように言った。私の唇が、男の唇に触れ、男の唇の肉の中に、水の弾ける音が聞こえた。その音は、そこからどんどん湧き出て、私の体の中にも、流れ込んできた。その量と勢いは、半端でなく、私の体は、その水の力で、細かく千切れ、流されて散らばった。それが、バラバラと白い平面の上に落ちると、もう水は、追ってこなかった。男の手が、そのバラバラの私の体を、掻き回した。男は、椅子に掛け、テーブルに向かっていた。

「ハハハ、これで、はっきりしましたね。あなたはあなたで、私は私だ。バラバラの私を、私自らが、弄んだりは出来ませんからね。」と、私は言ったが、

それは、目から翼を生やす男の声だった。私は慌てた。声の出所を探した。テーブルの真ん中に、ガラスで出来た細長い花瓶が置かれている。声の出所は分からないままだが、その声を聞き取ったのは、その花瓶の口のようだった。それは、どんな声も、男の声に聞こえてしまうのではないか。

「そうですか、三人分の耳には叶いませんね。でも、私にも耳はありますよ。しかも、目の横に付いているのは、私の耳だけですしね。」と、今度は注意深く、自分の声色を用いて、私は言った。

「そのあなたの耳は、何処にあるんですか。」と、男が、その声色を真似た私の声で、言った。男は、得意げだった。私の耳は、男の乱暴な手付きで、テーブルの上を、転げ回されているに違いないのだ。花瓶の形に固められたのと似たようなものか。その男の顔が曇った。

「あなたの目は、何処にあるんですか。あなたは、何処から、私を見ているんですか。」と、男は、私の声で続けた。私は、男の目から生えている翼を、これ見よがしに、羽ばたかせた。

「そんな筈はない。これは、私の目だ。あなたの目は、きっと…」男は、言いよどんだ。

「きっと…、何なんですか。あなたこそ、翼を自分でもぎ取ったじゃありませんか。それを何処へ遣ったんですか。」と、私は、わざと男の声で言った。

男の声を奪い取った気分になった。男は、声を詰まらせたまま、手の動きも止めて、メリメリと反らせた胸から音を立てて、高い所を見上げた。その隙を狙って、私は、前脚をちょこまか動かす鼠のように、テーブルの下に潜り込んだ。ただ、私の目だけは、小さな二枚の翼になって、水平に並んで宙に舞って、男とテーブルを見下ろしていた。テーブルの上には、何枚もの割れた皿が、山になって、今にも零れ落ちそうだった。花瓶は、そこに埋もれたのか、見えなかった。男は、その中から、一番目立つ尖った鋭い割れ目を選んでは、指先でそっと、なぞるのがやっとだった。テーブルが皿の残骸の重みで圧し潰されでもしたら、また私は、その皿の山の甲羅を背負う亀になってしまいそうで、冷や冷やした。直ぐにも、テーブルの下から飛び出したかったが、そこは狭すぎて、余りに窮屈な恰好を強いられ、動きが取れなくなっていた。

　男は、ずっとなぞっていた刃物のような、その一枚の皿の破片を手に取って、それに慎重にゆっくりと唾を落とし、指で、満遍なく、その裏表の両面に、引き延ばした。それが乾くと、その表面は、土気色の鏡になった。咄嗟に、男は、目を背けた。

「見ればいいじゃないですか。自分の顔でしょう。」と、私は、テーブルの下で、首をあらぬ方向にひん曲げたまま、声を出した。その声は、まるで潤滑油のようだった。それによって、私の体は、そこにずっと吹いているほんの微

かな風で、くるりと回った。回る私の体は、卵が真っ直ぐに立っているようだった。鏡になったのは、皿の破片だけではなかった。男の頭が、丸ごと、鏡になっていた。目の翼も目も鼻も口もなく、顔はノッペラボウで、男の頭は、鏡張りの卵のようだった。それを見て、私は、笑いが込み上げてきた。しかし、笑ったのは、テーブルの下の私ではなく、空中の翼の根元に開いた、小さな口だった。二枚の翼は向き合って、その根元を突き合わせていた。それぞれの翼の根元に、一枚ずつ薄く捩れた唇が付いていた。どちらが上唇か下唇かは分からないが、それが重なって、口の形になっていて、翼はその分、不自由で、羽ばたくのもぎこちなく、段々と下に降りてきて、ツルツルの男の頭の上に止まった。翼の根元の濡れた唇が、吸盤のように、頭の表面にくっついた。翼が自らの姿を鏡の中に見る間もなく、男の頭が、虚ろな乾いた音を響かせて、割れた。粉々に散らばった鏡の破片は、どれも恐ろしく薄くて、頭の中が、すっかり空っぽだったのを明かしていた。割れて当然のようだ。

テーブルの下の卵形の私が、素速くそこから転がり出て、代わりに、男の首の上に乗った。しかし、それは、大きすぎたし、重すぎた。男の体では、支え切れず、その頭でっかちの、私と男の合作は、テーブルの縁にしがみついたまま、横に倒れた。皿の残骸は全て、テーブルから滑り落ちた。さぞかし派手な音がしただろうが、殆ど聞き取れなかった。冷たい土の匂いが、鼻の穴を拡げ

るように染み通って来た。翼はまだ、宙を舞っているだろうか。ものを見ようとしても、何も見えず、替わりに、何かが、込み上げてきた。吐きたいが、上と下が分からない。土の匂いの来る方が下だろうが、土の匂いは、そうして上下を探り取ろうとする程、卵形の私のツルツルの表面を滑って、渦を巻くようだった。それでも、私の腹の中からそれが込み上げてくるようなら、顔に掛かるのを覚悟の上で、吐いてしまえただろうが、それは、男の腹の中のもののようで、恐ろしく汚く思えた。それが、喉を逆流したら、その臭い匂いが、ずっと喉に残って、始終吐き気を催していなければならないに違いないし、その空気に触れて変質したものが、顔に掛かりでもしたら、ツルツルの卵は、あっと言う間に、皺くちゃに縮んでしまうのではないか。私は堪えた。しかし、どう堪えているのか。もう、吐いてしまっているのではないか。土の匂いで、分からないだけだ。土の匂いは、鼻の中だけでなく、喉や口の中まで、押し広げてしまって、もうどうしようもないのだ。吐いたものが、辺りに散らばっていて、それだけが、見えるようだった。散らばったのなら、私の顔には掛からなかったのか。いや、それらは、私の顔に掛かって、綺麗な卵形を無残に潰し、その皺くちゃの部分部分が、細切れになって、辺りに飛び散っているのではないか。だから、それらを、見えるように感じられるのだ。私は、それらに向かって、もしそれらが、私の顔の部分なら、何かの合図を送るように、呼び掛けた。そ

れらは黙り込んで、益々黒く潰れて行くようだった。それは、私への合図なのか。合図だとしても、私と全く違うものだと言う合図ではないのか。(二〇〇一年十一月二十七日)

柱

土の匂いが、ドロリとした塊のようになって、私の中を満たした。頭が、どんどん重くなって割れるようだが、その頭は何処にあるのか。割れるまでもなく、もう辺りに飛び散っているではないか。それとも、飛び散って黒く潰れて行くのは、吐き出された男のはらわたか何かだろうか。土の匂いの塊は、私には、もうぎりぎりで、はち切れそうだ。その塊の一番重い底の辺りで、水の音が鳴り出した。どうやら、水は、ずっとそこで音を立てていて、土の匂いは、それを探り当てただけのようだった。私は、自分が、何一つ吐いていないのを、確信した。私に吐けるとしたら、その水の音だけだろう。そこはずっと、その水の音を鳴らすために、空っぽだった。吐き出せるものなど、蓄えようがない。

吐いたとしたら、男だ。そして、男が吐き出したのは、男自らであるに違いない。男は、土の匂いをとことん嫌って、真っ先に、この体から、飛び出さず

にはいられなかったのだ。そして、男が出て行って、私は愈愈、土の匂いを、体の隅々にまで染み通らせるしかない。私を吐き出す事は出来ないし、幾ら頭が割れそうでも、自ら頭を割る事も出来ない。飛び散ったものは、もう見えるようでなくなった。私は、手探りで、それらを掻き集めようとした。私を、どうにかしなければならない。土の匂いに圧し潰されそうになっている私を救えるのは、男しかないだろう。集めたものをこね合わせて、男を造り直す積もりだった。しかし、両手は、空をさまようだけだった。

私は、腹這いの私が、背筋を反らせて、手足をばたばたさせているだけなのを、また宙に舞う二枚の翼から、見下ろしていた。翼は、二枚横に揃って、並んでいる。私の体は、割れた皿の破片が積み重なっている上に乗っていた。そこへ、目から翼を生やした男が、その皿の残骸を全て片付けるためだと言って、何処からか、水を引いてきた。勢い良くやって来た水は、横倒しになって、その縁を幾らか地面にめり込ませたテーブルによって、堰き止められ、溜まっていった。

皿より先に、私の体が、水に呑まれそうだった。男も、どうやら、先ず私を片付けようと、テーブルの向きを変えては、水の流れを操作しているらしかった。水の流れて行く先には、何もなかった。明るくも、暗くもなかった。じっくり目を凝らせば、その暗さも見えてくるのかも知れないが、その暗さを囲む

明るさも見えてしまって、その明るさが、暗さを照らし、またそこを、明るくも暗くもなくしてしまうに違いない。そんな所へ流されてしまえば、もう二度と戻れないだろう。私は、腹這いの体を棄てる事にして、そこから抜け出し、二枚の翼を目指さなければと思った。頼れるのは、土の匂いだけだ。私は、ありったけの息を吐き、その中の土の匂いに乗り移った。直ぐに、私の体は、水に沈んで見失われた。しかし、男は、私がそうするのを待っていたかのように、その匂いに溶けた私を、掴まえに来た。匂いは重くて、水の直ぐ上を漂うだけだ。男から身を隠す場所を、探さなければならなかったが、どちらを見ても水ばかりで、私は途方に暮れた。隠れる事の出来そうな場所を知っているのは、男しかいない。男の方が、水面スレスレの私より、見通しが利く筈だからだ。男の姿を探した。男は、水から突き出た棒にしがみついて、動けずにいた。私を油断させるための、見せ掛けだろうか。私は、男に少しだけ近付いて、水の他に何が見えるか聞こうと思った。棒は、見るからにヌメヌメしていて、男が頑張ってしがみついても、体は少しずつ沈んでいた。棒の天辺に、私の二枚の翼が留まって、羽を休めていた。

　男は、口に、ピンと張った糸を銜えていた。私の質問に答えるどころではなさそうだ。しかし、このまま、男が、水に沈んでしまっては、何も聞けなくなってしまう。

「糸を銜えているから、沈んでしまうんですよ。口を開けて、息を吐けば、体か軽くなって、そのまま棒にしがみついていられるじゃないですか。」と、私は、全く自分にだけ都合のいいように言った。

男は、私に怒りを示そうとするのか、両目の翼を激しく羽ばたかせた。私は、少し離れたかったが、棒の天辺の翼に惹かれて、却って、近付いてしまう。男の下半身が、水に沈んだ。私は、男の目から、二枚の翼をもぎ取って、土の匂いを、棒に絡み付かせた。男は、尖った口だけ出して、後は全て水に沈んだ。その口から糸の先を目で追ってゆくと、二本に分かれていて、一本は、何処までも真っ直ぐ延びて行き、もう一本は、風を受けて緩やかに弧を描いていた。私は、男からもぎ取った翼に、土の匂いを擦り付け、その弧を描く方の糸の上に、投げて乗せた。翼は、糸を伝って飛んでいった。それに引っ張られるように、男の体が、水から引き揚げられた。男は、もう一本の真っ直ぐな糸だけを銜えていて、水の直ぐ上で、全身を拗らせた。そのまま引っ張り上げられてしまうのに、抵抗しているようだ。

土の匂いは、棒の天辺に辿り着いて、私は、そこに留まっている二枚の翼に、引き渡された。棒は、私の重みで、急に傾いて、横倒しに水に沈んだ。水の上で身を拗らせているのは、私の体だった。私は、それに乗り移って、直ぐに、男を探した。男はまだ、私を掴まえようとしているに違いない。棒が沈んだ少

し先の辺りの水面から、二本の糸が出ていた。その下に男は居るのだろう。そこから、土の匂いが、水の上を、少しずつ遠ざかって行く。私の体も、その土の匂いに乗って、流されて、そこを遠ざかる。

　事態は少しも好転していない。私は、相変わらず、水面スレスレを漂っていて、周りは水ばかりで、何処にも身を隠す場所はない。男は、その水の下の何処かにいて、私を掴まえようとしているのではないか。水の下では、彼に隠れ場所を聞く事も出来ない。男の姿が見えないだけ、寧ろ、私の身は危うくなっている。ただ一つの慰めは、また私の目から生えた二枚の翼だろうか。私は、それを水面に付けて羽ばたかせ、水音を立てた。そうする事で、男を水の下に封じ込めておけるように思えた。その内に、ドロリとしていた土の匂いも、流石に少しずつ弾力を失って、水の上を、薄い膜になって拡がりだした。私は、立ち上がって、その上を、水の流れを遡って、歩き出した。男はもう、追ってこられないだろう。

　その直ぐ下には、相変わらず、水が流れているのかも知れないが、私は、ひんやりした硬い真っ平らな地面の上を、歩いていた。水の音も気配も失われても、進む方向は分かった。そちらだけ、空気が、程良く濁っている。そして、一本の白い石の柱が立っている所に、辿り着いた。その辺りだけ、地面は緩やかに脹らんで見える。その後ろに、身を隠す事が出来そうだ。目の翼は、もう

要らないと思い、もぎ取って捨てた。それから、私は、柱の奥に身を滑り込ませた。そこは、柱の太さと同じ位の大きさの窪みで、隠れる身としては、ほっと出来た。そこから少し先に、赤く細い幹のひょろひょろと曲がった木が、こんもり盛り上がった地面の上に生えているのが、見えた。その真横に撓った枝の上に、女が腹這いになっていて、剥き出しの長い腕と脚を、バタバタさせていた。男は、しゃがみ込んで、木の根元の脹らみに、剥き出しの胸と腹を、擦り付けていた。その肌は、赤いミミズ腫れでいっぱいだった。

　目の翼を捨ててはいけなかった。直ぐに、柱の奥を出て、それを探しに戻った。柱の奥を出た所からは、どちらを向いても、決して、赤い幹の木は見えなかった。二枚の翼は、ナイフのように、地面に突き刺さっていて、そこから、微かに、水が滲んでいた。私は、腹這いになって、一番濡れている辺りの地面を吸った。唇はズルズルと音を鳴らし、水は、喉を潤した。水を吸われた地面から、またあの強い土の匂いが、立ち昇った。私は、それを鼻先から手で払い、直ぐに立ち上がった。両手に一本ずつ、鳥の翼にも見えるナイフを手にしていた。湿った息を吐くと、表面が、露で曇った。右手のナイフの露の色は黄色で、左手のは緑だった。腕を振って、露を振り払うと、ナイフは透き通るように輝いた。

　それを持って、また柱の奥に滑り込んだ。赤い幹の木も、男も女もそのまま

だったが、随分暗くなっていた。見上げると、広い屋根が、斜めに差し掛かっていて、その裏側は、隅から隅まで水滴がびっしり並んで、微かな風に揺れては、少しずつ落ちてきた。地面に落ちると、コロコロと、全て一ヶ所の細長い水溜まりに転がり込んだ。水は澄んでいて、ナイフの表面に似た煌めきを放ち、そこだけ際立っていた。それは、何を映して煌めくのか。上は、すっかり屋根で覆われているではないか。屋根の裏側に何か秘密があるに違いない。もっと良くその全体を真っ直ぐ見渡せる所がある筈だと、赤い幹の木の生えている盛り上がった地面を、ぐるりと回り込んだ。しかし、殆ど効果はなく、屋根の裏側は、相変わらず斜めにしか見えなくて、同じように暗いだけだった。ただ、そこから、振り返って水溜まりを見直すと、その縁が、ぐるりと細く輝いているのが分かった。（二〇〇一年十一月二十九日）

無防備

水溜まりの中に、光源があるようだった。私は、近付いて、爪先立ちで、水溜まりを真上から覗いた。中は、明るくて、ただ透き通っていて、底は見えなかった。縁を輝かす光源も、見付からなかった。私は、しゃがみ込んで、水面

にそっと息を吹き掛けた。水面は、少しも揺れなかった。それは、水ではなく、何か透明な硬い物質なのではないか。それとも、凍っているのか。ナイフを握った右手の甲で、そっと触れてみた。冷たいどころか、微かに熱を帯びていて、ガラスのように硬かった。よく見ると、転がり込むと見えた水滴は、縁の輝きに触れて、全く蒸気も立てず、一瞬で蒸発しているようでもある。

男が、右手で胸のミミズ腫れを撫で、左手で腹のミミズ腫れを撫でながら、眠そうな目で、トボトボと近付いて来た。私は、立ち上がって、身構えた。ただ、両手のナイフの刃先は、下に向けた。男は、私など居ないかのように、私の直ぐ脇にしゃがみ込んで、水溜まりを覗き込んだ。木の匂いがした。

「底の方に、耳が落ちているだろう。見てみろよ。誰の耳だ？」と、男は、言った。そう言われてみると、立ったままでも、金色に光る耳の形をしたものが、二つ、水溜まりの中に見えたかも知れない。それが、水溜まりの中を照らし、その縁を輝かせている光源だろうか。しかし、その下もまだ、ずっと明るいようではあるし、その耳らしきものの輪郭より、水溜まりの縁の方がずっと、輝いて見えた。

「耳を拾いに来たんだろう。お前が初めてじゃない。もう、何人も来たんで、直ぐに分かる。」と、男は、私を見上げて言った。その目は、奥に引っ込んでいて、小さすぎて点のようにしか見えなかった。私は、その目に、ナイフを突

き刺したくなった。そうすれば、ナイフはまた、目から生える翼になるのではないか。ナイフが、翼に変わる瞬間など、滅多に見られるものではない。握る手に、力を込めた。

「このナイフを、どう思いますか。いや、ナイフじゃない。この鳥の翼を、どう思いますか。」と、私は、多少興奮気味に、声を張り上げてしまった。

「なるほど、役に立つかも知れない。ここの水溜まりの水は、硬すぎる。ナイフでも使わなければ、どうにもならないか。素手で挑戦した奴らは、みんな、指の骨を折って、その場にしゃがみ込んで、呻いてたな。呻きながら、水玉みたいに転がって行ったのか。それからどうなったんだろう。それとも、水玉が転がるのが、そう見えただけか。それにしても、随分、分厚いナイフだな。ぐるりと反り返ってるところなんか、耳朶を切り取ってきて、磨き上げたみたいじゃないか。何処で拾ったんだ。拾ったんだろ。」と、男は、上体を起こして、ナイフの表面を、舐めるように見詰めながら、呟くように言った。

「木の上の女は、放っておいていいんですか。」と、私は、碌に木の方を見ずに、小声で言った。男は、私の右手のナイフの刃先を、自分の左目に押し当て、それをさも愛おしそうに、大きく息を吐いた。息を全て吐き終わると、点のような目を震わせて、急に咳き込んだ。弾みで、ナイフの先が目に突き刺さった。何処からどう見たら、これが耳朶を磨いたように見えるのだろうと思い

ながら、私は、ナイフを手放し、更に、左手のナイフを、男の顔の前に差し出した。男は、立ち上がって、目に刺さったナイフを、頬の上でブラブラさせて、私に背を向け、私に聞こえるように数を数えながら、歩き出した。

「もう一本のナイフは、持って行ってくれないんですか。」と、私は、声を掛けた。男は振り返って、目からナイフを引き抜き、私の顔に投げ付けてきた。私は、左手のナイフで、それを払った。高い金属音が、辺りに響いて、その反響はなかなか已まなかった。そのせいか、白い石の柱が、グラグラ揺れた。男は、跳ねるように、ヒョコヒョコとそちらに走って、柱にしがみついた。何とか揺れを収めようとしているらしかったが、腰が退けていて、逆に、振り払われ、二、三メートルは飛ばされて、尻餅を搗いた。それを見ながら、私は、男の投げたナイフを拾いに走っていた。そのままにして置いたら、翼に戻ってしまうように思えた。もし、片方だけ先に翼になったら、左手はずっと、ナイフを握り締めたままでいなければならないような気がした。しかし、ナイフは、ナイフのまま、先に女が拾い上げていた。女は、長い手足を伸ばして、地面に腹這いになっていた。彼女は、それを先ず舌で舐め、ゆっくり口に含み、最後に、喉の奥へと突き刺すようにした。ただ、女の手で隠れて、はっきりとは、見極められなかった。手がどけられると、女の口から、緑色の鳥の翼が生えていた。いや、口からと言うより、女の舌の上に生えていた。女は、大きく口を

開け、仰け反って、舌を細かく動かした。それに連れて、翼は羽ばたいた。しかし、それは、一枚だったので、彼女は、飛ぶ事は出来ず、替わりに、左へ左へと、体を引きずられた。両脚を揃えて跳ねると、少しだけ、体は浮いた。

「耳を掘り出しに来たんだろ。女なんかに見蕩れてていいのか。」と、男の声が、足元から聞こえた。男は、上体だけ起こし、私の左手のナイフに、頬擦りせんばかりに見入っていた。

「もう片方の目も、突いて欲しいんですね。それとも、舌に突き刺して欲しいんですか。」

「そんな事言って、頼んだ通りにしてくれるのかな。」

　そう言われると、そうしたくなくなった。私は、自分の舌に、ナイフを突き刺したくなった。取り敢えず、ナイフを舐めてみようと、口に近付けた。

「お前が、いきなりそんな事したって、ダメだ。舌ビラを切るだけだぞ。」と、言って、男は、その剣幕からして、止めようと、私の左腕にしがみついて来るのかと思ったら、却って、私と距離を取って、じっと私を見詰めた。それから、左腕を耳に付くくらい真っ直ぐに上げて、手首を捻って、揃えた指先を回すと、それが合図のように、女が、爪先立ちで、フラフラと近付いて来た。翼は、もう羽ばたいていなかったが、口の中に仕舞う事も出来ず、女は、顎を突きだして、目をキョロキョロさせ、大口を開けていなければならなかった。

男は、掲げていた左腕を素速く降ろし、後ろに居て見えない筈の女の舌の翼の根元を、正確に掴み取った。女は、翼を振り立てたが、羽ばたかせるまでは出来なかった。

「それを、切り取れとでも…」と、私は、言った。

「喉が渇いただろう。やっぱり、水だ。違うか。だけど、刺す所を間違えるなよ。」と、男は言って、腕を振り回し、女の体を、私の前に突き出した。女は、黙って、じっと動かなかった。表情は、翼で隠れて見えなかった。少ししかない髪の毛が、次から次に抜け落ちて、私の足元に溜まった。

「誰の喉が、渇いているんですか。女のですか。確かに、水があんなに硬くては、飲めませんね。ずっとここに居るなら、あなた達は、長い事、何も飲んでいないんですね。翼の中は、革袋のように、水がいっぱい入ってるようにも、見えますけど。でも、もし私が、この女の腹なり胸なりを刺したとして、そこから水が出ても、それをまた、女が飲むなら、同じですね。」と、私は言ったが、男は、女の後ろに、影のように隠れてしまっていた。私は、舌を出し、ナイフの先を、そこに走らせた。開いた傷口からは、血も水も出ない。毒のせいか。いや、毒はもう、何処かで、全て吐き出したのではなかったか。それにしても、刃先が、妙に生温かく感じられた。ナイフが温かいのではなくて、私の体が、冷たくなっているのか。何か体を温めるものを、探すべきではないか。

それはやはり、水だろうか。いっそ、誰かの血でも浴びた方が、温まるのかも知れない。しかし、この二人の血は、水よりずっと冷たそうだ。

「水が欲しいのなら、あの木の根元を掘ればいいんじゃないですか。あれは、水があるという目印でしょう。」と、私は、言った。男は、ブルブル体を震わせた。高い声が、歯の間から微かに洩れるのが聞き取れて、男は、笑いを堪えているらしかった。ただ、腕だけは震わせず、女の体は動かなかった。

「何だ、分かってるじゃないか。ナイフを持っているのは、お前だけだ。しっかり頼んだ。」と、男の声が、女の後ろから聞こえると、二人は、石のように動かなくなった。実際、それは、固まって、柱と同じ、白い石になってしまったようにも見えた。そうなってしまってから、私は、そうなる前に、女の翼を掴んでいる男の手首を、ナイフで切り落として置くべきだと悔やんだ。一振りで、スパッと切り落とせそうだった。私は、フラフラと、赤い幹の木の生えている盛り土の方に、歩いて行くしかなかった。振り返ると、男は向きを変えて、また、女の後ろに身を隠した。それとも、身を隠すのではなく、女を盾にして、私から身を守ろうとしているのか。しかし、私に何が出来るのか。私は、男の手首を切り取りたかったのだ。男はそれを、全く無防備で、私の目の前に晒していた筈だ。（二〇〇一年十二月一日）

輪

　なかなか前に進まないので、足元を見ると、少し窪んでいて、女の長い髪が両脚に絡み付いて、地面を蹴っても、その髪の上を滑るだけだった。私は、左腕を降ろして、その髪の毛をナイフで切ろうとした。しかし、足の裏だけが、そこの窪みを滑る感触の快感に取り憑かれでもしたかのように、足踏みは、止めようとしても止められなかったので、足の甲や脛は、切り傷や刺し傷で真っ赤になった。舌と違って、ちゃんと血が出たのだ。私は、両脚を手で押さえながら、腰を曲げ屈んで、何とかその血を啜った。冷たくて、血の味は、全くしなかった。土の匂いと腐った水の匂いが、口の中に残った。ナイフに着いた血の匂いを嗅ぐと、鳥の腹に鼻を押し付けて嗅いだように、匂いに思えた。だ、そんな風にして、鳥の腹の匂いなど嗅いだ事があっただろうか。鳥の方から、私の鼻先にぶつかって来ただろうか。その時、確か、私は、葉をびっしり繁らせた木々に囲まれた、暗い池の中に居て、腰から下は、温い水に浸かっていた。北側だけは、木が生えていなくて、明るい緑色の光に溢れた小さな湿原が、望めた。その光に目が慣れた途端、そちらから真っ直ぐ飛んで来た鳥が、私の顔に激しく当たり、鳥の腹が、私の鼻に擦り付けられたのだ。しかし、そ

んな事があったように、思えてしまうだけかも知れなかった。

蹲った姿勢のまま、顔を上げると、橙色の地面に、脚を切り取られた黄色と緑の鳥達が、横倒しにされて、輪になって、黙って、私を取り囲んでいた。鳥達は、嘴を突き立て、弾けるような細かな息を、私を狙い撃つように立てながら、体を揺すって、少しずつその輪を狭めて来た。なかなか止まらない私の足の血が、目当てなのか。女の髪の毛は、何時の間にか、血塗れになって、両脚に繋がったまま、私の左手にも巻き付いて来ていた。私は、腰を上げる事は出来ても、左手は足の位置から上げられず、左に傾いて、腰を折ったままの姿勢でいなければならなかった。それでも、手首を捻って、ナイフを地面に突き刺して、グルグル回す事だけは出来た。

そこから、水が溢れてきた。透き通っていたが、ほんの微かに、何色とも分からないが、色が着いているように見えて、それで、毒を含んでいると分かった。その色を見分けてしまったばかりに、更に体が冷えてゆくのを感じた。私は、ナイフを引き抜き、また腰を落として、前に屈み込んだ。そのまま顔面を地面に着け、ナイフで開けた地面の裂け目の縁に嚙み付いた。喉に流れ込んできた水は、出来るだけ喉を絞って、飲み込まないようにはした。その裂け目が拡がると、水に混じって、皿の割れた破片が、湧き出してきた。それらは、水浸しの地面の上を滑って、直ぐに、鳥達に辿り着いた。鳥の体は、みるみる皿

の破片で覆われていった。鳥と鳥の間は、大分狭まっていたので、私は、皿の破片の白い輪に、隙間なく囲まれた。中で、鳥達が、鳴き声を上げ出した。それは、陶器を震わせて、ビンビンと響き渡り、地面も震わせた。裂け目の縁を銜えたままの私の頭までが、ガタガタと震えて、頭は割れそうだった。私は、口をそこから放したかったが、顎はきつく締まったままで、言う事を聞かなかった。堪らず、私は、その場にひっくり返った。地面が更に大きく裂けたが、その裂け目の縁に、私の歯は、食い込むだけだった。伸び上がった両脚は、それでもまだ、宙に向かって、足踏みを已めなかった。ただ、髪の毛で縛られてしまったような両足首の間に、ナイフを差し込んで、その髪の毛に、刃を当てる事は出来た。もう、足を傷付けずに済みそうだが、刃は、ヌルヌルした髪の毛の上を滑るだけだった。

　見上げると、広い屋根の裏側の端だけが、細長くガラスで出来ていて、そこに、ガラスの端が欠けたような隙間が、覗いていた。縄梯子を使って、そこから降りてくる者の姿が見えた。殆ど裸で、煤けたような濡れた肌に、細かなガラスの破片がびっしり張り付いて、輝いた。縄梯子は途中までしかなく、そこからでは、高すぎて、飛び降りられそうになかった。その者は、縄梯子を揺すって、その向こうの、切り立った崖の途中に飛び移った。そのままなら、崖を転げ落ちるところだが、炭になったような、真っ黒な細いひょろりとした幹の

木に、しがみつけた。その根元を囲む辺りにだけ、狭い足場があるようだった。一本しかない下を向いたくねくねした枝に、手を掛けると、それが、私に似た者だと分かった。

　鳥達は、閉じ込められた恐怖からか、愈愈激しく鳴き立てた。私を囲む白い輪は、更には縮まりはしないようだったが、皿の破片は、まだまだ水と一緒に、地面の裂け目から湧き出て来て、輪の内側に溜まる一方なので、その分は狭くなった。ただ、水は、輪の中を流れ過ぎて行って、溜まる事はなかった。しかし、このままでは、皿の破片の山の中に、いずれ私も埋まってしまうだろう。血が脚を伝って、腹まで赤くし、臍に血が溜まった。私は、腰を思い切り振り上げ、頭だけ地面に着けて、体を殆ど逆さまにした。臍に溜まった血が、顔に零れ掛かり、それが口の中に流れ込むと、歯と銜えている地面の裂け目の縁がヌルヌルと滑って、やっと、そこから口を放せた。裂け目は閉じ掛かり、水しか通れなくなった。体はそこで横倒しになった。脚を蹴り出せば、皿の輪を蹴って、足の裏に傷を負うだろう。そうならないために、背中を丸め、膝を抱え込んだ。すると、その恰好のまま、私の体は、すっぽり皿の輪の内側に嵌って、動きが取れなくなった。鳥達は、一斉に鳴くのを已めた。左の腋の下の下が、地面の裂け目で、尚そこから水が湧き出して、水は、私の胸や顔に掛かった。私がすっぽりそこに嵌り込んだ事で、皿の輪は、却って引き締まり、隙間を全

て圧し潰したに違いない。輪の内側に、水が溜まり出した。輪の縁を見上げると、どうやら私の肩より高そうだった。丸くした自分の体一つがやっと入る狭い中で、私は、溺れ死ぬのか。

　横向きの顔は、すっかり水の中だ。遂に、右の耳までが、水に沈んだ。私は、水の中で、舌を突き出した。舌の先は、先程ナイフで切り付けて、二つに割れていた。そのせいか、それは、何時もより長く伸びて、くねくねと拗った。舌の先は、右の耳朶に届いた。その耳の周りを、いきなり沸き起こった鳥の鳴き声が取り囲んだ。私の舌を、威嚇する蛇の舌とでも勘違いしたのか、それとも、他の理由か。水が揺れているのが分かった。その鳴き声のお陰で、また、皿の輪の中に隙間が出来て、水はそこから染み出してくれるだろうか。しかし、私の体は、また水に沈んで行くようだった。横目で睨み上げると、皿の輪の縁が、少しずつ上へと遠ざかって行く。ただ、その分、体の自由が利いた。私は、固まった節々を痛みを堪えながら和らげ、手足を伸ばしていった。絡み付いた女の髪の毛も、血を水に落として、解けたに違いない。自ずと脚が下がって、私は、体を縦に出来そうだった。しかし、首だけは、右を上にして、横を向けたまま動かせなかった。また横目で睨み上げると、皿の輪の下の縁から、皿の破片がパラパラと剥がれて、水の中を落ちてくる。その尖った小さな一番手が、私の右の耳朶をチクリと刺した。次々と、それらは、私の右の耳の上に積み上

がるらしかった。私はまた、先の割れた舌に活躍して貰いたかったが、それは、口から力なくだらりと伸び、ゆらゆら揺れて、戦意喪失の体だった。そこに、細くて柔らかい髪の毛が一本、くっついた。それを振り払おうと、舌は少しだけ震えた。すると、また髪の毛が一本、舌の上に落ちて、次々に髪の毛は、舌に絡み付いてきた。上からまた、鳥達の鳴き声が、一纏まりに落ちてきた。それは、何かを歓んでいるような声音に聞こえた。はっきりとは分からないが、もう、私の頭の大きさと同じくらいの量の皿の破片が、耳の上に積み上がっているのではないか。

上の小さな円い水面に、影が差すようだった。誰かが、中を覗き込んだのなら、私がここに沈んでいるのを、伝えなければならない。長すぎる舌のせいか、口は開かなかった。それに、もし口を開けたら、舌は、ぽろりと抜けて、口を後にして、独りで、蛇のように泳いで行ってしまいそうでもあった。頭に乗った皿の破片の山を振り落とし、右の耳朶から光を出せれば、一番目立つだろう。私は、耳朶の根元に力を入れてみた。耳では何も起こらなかったが、それに釣られてか、だらりとしていた舌が、硬く尖ってきた。二つに割れた舌の先に絡み付いて脹れ上がった女の髪の毛を、ぐるぐる振り回して、渦を描く事も出来た。

その脇に、黒く細い木の枝が、皮の鞭のように、くねくねと降りてきた。上

から誰かが、それを降ろしたのだ。私は、首を横にしたままでも、何とか右手でそれを掴んで、そこを登って行こうとした。その右手に、激しい痛みが走った。目の前に、私に似た者が現れた。水の中でも、体中に張り付いたガラスの破片がキラキラ輝いているところをみると、それらは皆、肌に突き刺さっているらしい。（二〇〇一年十二月三日）

合奏

　私の右手の甲も、キラキラしていた。鞭のような木の枝を伝って、物凄い勢いで降りてきた、私に似た者に、強か踏み付けられたのだ。私に似た者は、片手で、垂れた枝の先を掴み、もう片方の手で、私の舌に絡む女の髪の毛を、一束にくるりと束ねて、掴んだ。それから、目を真ん丸に見開いて、私の目の中を覗き込むような顔を近付け、私を真似て、首を真横にした。その動作は、どうして私が首を横に向けているか、不思議がるように見えた。私は、右の耳の上に積もった皿の破片の山に触れようと、右手を持って行った。私の指先が、直に耳朶に触れた。では、皿の破片は、私に似た者と当たった時に、振り落とされてしまったのか。私は、横目で、下を見た。少し下に、水の底が見える。

綺麗な八角形をしていて、それぞれの角に、その角に頭を押し付けるようにして蹲る者達の、丸い背中が、黒っぽく見下ろせた。その背中に、皿の細かな破片が、突き刺さっていないだろうか。私は、恐る恐る、首を縦にしていった。私に似た者の目付きが、見開かれたまま険しくなって、三角になった。私は、首を縦にしてはいけなかったのか。すると、私達二人の体は、突っ立った姿勢のまま固まって、水の中を、更に沈んで行った。それでも、私に似た者の手は、しっかり木の枝の先を掴んでいた。それだけが頼りで、見失うまいと、私は、それぱかりを見詰めていた。私の舌は、愈愈硬くなるようで、痛みを覚えた。

私に似た者が、水の底に足を着けたようだった。それでも、両腕を拡げ、肩を傾かせた姿勢は、そのままに固まっていた。私達は、そこで止まったが、私の足は着かなかった。舌の先に絡む女の髪の毛を、がっしり掴まれているからだ。私に似た者は、その腕をピンと伸ばして、斜め上に向けていた。その先に、それと同じ角度で、私の舌が突っ立って、そのまた先に、私の体が、ゆらゆら揺れている。何のために、私に似た者は、水の中に降りてきたのか。聞きたくても、もちろん口は利けない。ただ、私を助ける為であろうとなかろうと、用を済ませてからでも、木の枝を登って行けば、水の中から抜け出せるだろう。もう片方の、私に似た者の手を見直すと、確かに、それは、木の枝の先を掴んではいたが、その枝は、水の底から生えた、背の低い細い木の幹から、伸びて

いた。私は、目を疑って、何度も見直した。木の幹は、赤くて、ひょろひょろと曲がっていて、枝の根元も赤くて、その先端だけが黒ずんでいる。そして、それを掴んでいるのは、私の右手だった。舌の先に絡む女の髪の毛は、別の枝に絡まっていた。私に似た者の姿は、消えていた。しかし、そこは、そんなに見通しが良い訳ではない。見下ろせた八角形も、蹲る者達の姿も、見えなくなっている。少し先は、白く濁って、ただぼやけているだけだ。そこからまた、ひょっこり姿を現しそうだった。

　私は、足を着けようと、重心を下げた。右手が掴んでいる枝は、もう十分ねじ伏せていた。問題は、舌の先の女の髪の毛の絡み付いた方だ。或る程度は、その枝を、撓らせる事は出来たが、手で掴むようには、巧く力を掛けられずに、脚は、水を蹴るだけだった。そうしている内に、水はどうやら、目には見えないが、下から上へと流れ出したようだ。私の体は、浮き上がり始めた。直ぐに、右手を放した。枝に絡まった女の髪の毛が、解けさえすれば、私の体は、何もしなくても、その流れに乗って、水面に向かって、上って行けるのだ。枝を、左手のナイフで切ろうとしたが、枝はゆらゆら揺れて、右手で掴む事さえ出来なかった。腰から下が、消えるように軽くなって、とうとう私の体は、水の中で、逆さまになった。血は止まっているが傷だらけの足の、ずっと上の先に、少し括れた楕円の小さな水面が見えた。濁っていた水が、澄んでいた。水の底

の方に目を向けると、直ぐ先に、大きな白い八角形を、見渡せた。相変わらず、それぞれの角に、八人が蹲っていた。その内の一人が、横を向いて、隣の者に話し掛けたようだった。隣の者が、顔をそちらに向けて、それに応えた。隣の。水の中で、どうしてそんな事が出来るのか。私は、頭から、逆さまに、落ちて行った。

真っ先に、強張った舌ビラが、硬くて白い地面に打ち付けられた。その痛みで、硬かった舌が、あっと言う間に柔らかくなった。見上げると、水面が、真上に向かって、遠ざかって小さくなって行くのが見えた。舌に絡んでいた女の髪の毛は、直ぐに取れた。伸びきった舌を、手で、口の中に押し込めて、立ち上がると、足を滑らせそうになった。白い地面は、恐ろしくヌルヌルしていた。立ち上がれたのが、不思議なくらいだ。私は、直ぐに、赤い幹にしがみついた。それだけでは不安で、何時、バランスを崩して、ひっくり返るか知れない。私は、木に登った。すると、二股に分かれて横に伸びていた枝が、硬くなって、上を向いてゆく。その二本の枝を、片方ずつ両手に掴み、片足ずつを掛けて、その垂直に突っ立てられた、細い先まで、登っていった。俯くと、枝は、私の頭の重みに幾らか撓って、八角形が一目で見下ろせた。下の八人も、腰に手を当てたりしながら、ゆっくりと立ち上がり掛けていた。どの手にも、白っぽい滓か何かをこびり付かせた鳥の脚が、一本ずつ握られていた。どの足元にも、

円い穴が掘られてあって、そこを吹き上げてくる風の音を、微かに鳴らしていた。八人は、中腰のまま、その穴の縁に手を掛けて、後退り始めた。すると、八角形のそれぞれの角にあった穴が、少しだけ、内側に向かって動いた。穴は楕円になった。それから八人は、角と穴の間に出来た空間に回り込み、角を背にして、そこにしゃがみ込んだ。両脚を開き、股の間に、穴を臨む恰好だった。

　八人は、肩を怒らせて、腕を前に突き出し、掌を、穴の上に翳した。すると、穴は、一斉に、高くはっきりした音を鳴らし始めた。八人は、その指の角度や拡げ具合や、鳥の脚の持ち方を次々に変えて、その音を、色々に操れるようだ。彼らは、互いの顔を見交わし、合奏を始めたに違いない。ただ、私の耳に届くその音は、とても聞き辛いものだった。私を苦しめて、木から落とすために、彼らは音を立てているようにも思えた。

　風と音に乗って、乾いた女の髪の毛が、フワフワと舞い上がってきた。地面に落ちていた時には、地面の白さに溶けて、殆ど目に付かなかったが、宙に浮かぶと、その量は意外に多くて、地面の白を翳らせた。ただ、一本一本は、すっかり細くなっている。簡単に丸められそうだ。出来れば、それで、耳に栓をしたい。しかし、枝から手を放すのは、危なすぎた。また舌を使って、髪の毛を集めるしかなさそうだ。口を開けたが、舌は、出て来なかった。あるのかないのかさえ、分からない。替わりに、私は、私を取り囲んで漂っている髪の毛

に向かって、飛び切りネバネバした唾を、立て続けに吐いた。唾は、細く長く伸びて、どれも、その先に、易々と髪の毛を取り込んだが、そのまま、八面の側壁まで届いて、そこに張り付いてしまった。まるで、蜘蛛が八方に糸を吐いたようだ。そして、その唾の糸が、合奏の音に共鳴して、震えだした。私は、唾から髪の毛を取り出す事も、唾を切る事も出来ず、唇を通して、頭の中にガンガンと響き渡る、立て続けにものが壊されて已まないような音に、耐えなければならなかった。二本の枝の先は、撓って前後に揺れだし、愈愈目が回ってきた。このままでは、また、下の硬い地面に落ちてしまう。突き立てられた枝はかなり長く、ここで落ちたら、衝撃は先程の比ではない。それとも、八本の唾の糸が、体を支えてくれるだろうか。

　真下を見下ろすと、私に似た者が、赤い木の幹を揺すっていた。直ぐに、私は、それに向けて、九本目の唾の糸を垂らした。何処かで、音が止まった。八本の唾の糸だけが、震えて低い音で鳴っていた。下の合奏は止まっていた。八人が、一斉に、真ん中の、私に似た者目掛けて、飛び掛かろうとしている。いや、彼らは、私の唾に触れたいのではないか。私は、咄嗟に、垂らした唾の糸を、吸い上げようとした。しかし、その丸く膨れた先端は、私に似た者の頭に達する間際で、もう、八人の手が掛かっていた。八人は、唾の糸に絡まって、一塊りになって、私の方へと、飛び上がってきた。枝が何処かで折れたに違い

ない。私の体は、ゆっくりと、後ろ向きに倒れていった。目も回っていて、それから、私の体は、捩れて、振り回されているとしか、分からなかった。何処へか、投げ出されたかも知れない。

前後左右の感覚が戻って、目は、ぼやけたまま動き回る人の姿の輪郭を、見極めようとしていた。八人が、透明な狭い檻の中に閉じ込められて、突き出した腕を振り立て、威嚇するように口を大きく開けていた。檻は、私の吐いた唾の糸で出来ているようだった。檻は、私の前に置かれているのではなくて、私が口に銜えていた。私は、まだ木の上に居た。（二〇〇一年十二月五日）

翼

垂直に突き上がっていた二本の長い枝は、節々で殆ど折れ掛けては、くねくね曲がって畳み込まれ、細い幹の上で一纏まりにこんがらがって、造り掛けの鳥の巣のようになってしまった。その上に、私の柔らかい腹が乗っていた。私に似た者が、幹の根元の白い地面に、ザクザクと音を鳴らして、ナイフを突き立てているのが、枝と枝の隙間から見下ろせた。ナイフに荒い息が吹き掛かると、表面が、緑色の露で曇った。私の左手に握られていたナイフだ。その直ぐ

上で、唖の糸の檻が揺れていた。そこから、伸びた腕が真っ直ぐ降りても、私に似た者には、後少しで届かなかった。私は、木から降りたかったが、このままで降りようとすれば、檻の中の八人が、私に似た者を、圧し潰してしまう。退くように声を掛けたかったが、八人分の重みの唖の糸を銜えていては、おいそれと口を開ける訳にも行かない。

「何か、言いたい事があるんだろう。何故、黙ってるんだ。」と、私に似た者が、下を向いたまま、地面のナイフの傷に向かって、言った。檻の中の八人が、一斉に喋り出した。檻が、更にゆらゆら揺れて、私は、もう少しで首が抜けてしまいそうで、後先の事など考えられなくなって、口を開いて、唖の糸を放した。檻の中なら突き出た腕が、一斉に、赤い幹を掴んで、そこに留まったので、私に似た者は、間一髪、潰されずに済んだ。

「何を、掘り出すんですか。また、水ですか。」と、私は、尖った枝の折れ目で皮膚を傷付けないように、ゆっくりと上体を起こしながら、言った。

「まさか、木から降りる積もりじゃないだろうか。」と、私に似た者が、やはり下を向いたままで、ナイフを地面に突き立てながら、言った。

「こんな所に、乗っかっていても、仕方ないし。それに、水に沈んだ耳を探さないといけない。命綱の枝が、こんなになってしまって、どうやって、ここ

から抜け出せるんだろう。」
「そんな事はないさ。そうしてくれているお陰で、大助かりだ。」と、私に似た者は、わざとらしく、嬉しそうに声を弾ませた。
「木から降りたら、どうなるんですか。」
「知らない。このままで、何の不足もないんだから、お前はそこでそうしていればいいんだ。」
私は、こんがらがった枝の上に、何とかしゃがみ込む事までは出来たが、そこから動くのが大変だった。体の重心を少し移しただけで、思わぬ所から、尖った枝の折れ目が突き出して来る。立ち上がるには、足場が悪すぎる。もし立ち上がろうとして、そこで倒れ込んだりしたら、枝の折れ目で、体中を突き刺されるに違いない。
「皿はどうしたんだ。」と、私に似た者の声が聞こえてきた。ナイフでも、ここの白い地面は硬すぎて、イライラしているようだった。
「檻の中の連中が、背中に貼り付けてるんじゃないですか。もちろん、破片ばかりですが。」
私に似た者は、檻の下から脇にいざって、立ち上がった。地面を掘るのを諦めたのか、それから、八つの楕円の穴の中を、覗いて回った。どうやら、お気に入りの穴を一つを見付けたようで、私の方を見て、笑顔を見せた。

「ナイフは、置いていって下さいよ。」と、私は、大きな声を出したが、その声が届いたかどうかも、分からない。私に似た者の姿は、その穴へと消えて行った。すると、檻の八人が、十六本ある筈の腕を、順送りに操って、そろそろと木から降り、八角形の地面に散らばった鳥の脚を、集めに回り出した。木の根元の、ナイフの突き立てられた跡には、思いの外、大きな穴が開いていた。私は、枝に引っ掛からないように、そこに唾の糸を垂らしていった。穴の中が明るくなって、金属のように輝く丸い形が、二つ並んで見えた。ほんの少しだけ、違う色に輝いていた。どちらかが女で、もう一方が、男だろう。二つの色は、私の脹れた唾の先に、同じように溶け込んで、一つの色になった。それが、穴の中から、出て来た。一つの頭に、体が二つ繋がっているようだったが、すっかり穴から出ると、一つの頭に一つの体で、立っていた。頭は真ん丸で、顔もツルツルで、耳もなかった。男か女か分からなかった。いや、男と女が一つになっているのだから、男でも女でもあるのだ。それでもまだ、頭だけは、私の垂らしていた唾で、すっかり覆われていた。思い切り唾を吸ったが、何も起こらなかった。そいつは、檻の八人の後を追うように、弱々しい足取りで歩き出した。体もついていたが、前と後ろで、色が違っていた。穴の中で見えた二つの色だ。暫く進むと、色は、体の右と左に分かれるようだった。唾の糸は、延びて行くしかなく、曲がった枝にくっついて、私の口から放れた。

暗くなった穴に、また唾の糸を垂らした。穴の中は、暗いままだったが、糸の先は、何かを捕らえて、プルプルと震えた。穴から、上を向いた口が二つ浮かび出て、大きく開かれた。口は、黒と黄色のドロドロの息を吐いた。唾の色も黒と黄色に染まり、それで、唾は、急に粘りをなくして、細く削られた木の棒を銜えるようだった。それが、ほんの僅かに、下に引っ張られ、口から放れてしまっただけで、私は、枝の間を布切れのように擦り抜けて、呆気なく、木から落ちた。穴の縁で腰を打ったが、辛うじて、頭から穴に落ちるのは免れた。穴の中から、折り畳まれた二枚の翼が、重なって突き出され、穴をすっかり塞いだ。私が、横になったまま、腰を引きずって穴から少し離れると、翼は、左右に、大きく拡げられた。それは、まだ穴の周りを漂っている、黒と黄色の息を振り払うかのように、激しく羽ばたいた。私は、その起こする風を間近に受けて、目を開けていられない程だった。八角形の地面と、八面の側壁の境目が、声を限りに鳥が喚き叫ぶような音を立てた。地面が、細かくブルブル震えた。二枚の翼が、ぴったり地面から生えたようになって、地面を引き揚げているのではないか。私の腰は、地面の震動で、細かく飛び上がり、八つの楕円の穴も、今にも動き出しそうな程に、素速く前後左右に揺れた。赤い幹の木は、もう吹き飛ばされていて、短く折れてすっかりばらばらになった枝と一緒に、地面の上を転げ回っている。木は、根元から折れていて、その残された株に、唾に囚

われた八人が、クルクル回りながら、しがみついている。

　その中で、男でも女でもある丸い頭の輝く者だけは、何事もないように、転げ回る枝を面倒臭そうに蹴飛ばしながら、漫ろに歩き回っていたようだった。そいつが、私の方に近付いて来て、手振りで、私に立つように促した。私も、腰を硬い地面に細かく打ち当ててばかりで、立ち上がりたいのだが、地面の震えが止まらない事には、どうにもならない。丸い頭は、まだ、丸ごと私の唾が被さっていた。せめて唾でも吐き掛けて、私にも出来る事があるのを示したかったが、口も細かく震えて、それも叶わない。そいつは、私に背を向けて、両手で頭を何度も撫でて、頭から私の唾を粗方掻き取り、それを、翼の根元に向かって投げた。翼の動きが、少しずつ鈍くなってゆく。地面の揺れが収まった。本当に地面は引き揚げられたのか、上を見て確かめたかったが、首が少しも上に向けられなかった。羽ばたきが収まると、翼はボロボロになっていた。直ぐ側の八人を入れた唾の糸の檻も、ボロボロだった。二つは、激しく当たり合ったようだ。檻の破れ目から、鳥の脚を握り締めた者達が出て来た。六人しかいない。私は立ち上がって、周りを見渡した。転がっている枝の数が、意外と少ない。八つの楕円の穴に、大分落ちたようだ。いや、穴は、六つしかない。私は、地面の形を確かめようと、その場でクルクル回った。どうやら、地面は六角形で、六面の側壁に囲まれているのは、間違いなさそうだ。

六人は、それぞれ、六つの楕円の穴の側まで、真っ直ぐ歩いて行って、頭から、穴に体を差し込んでいった。どれも、腰の辺りでつっかえて、脚を跳ね上げてばたつかせた。私は、一人一人の側まで行って、「鳥の脚を使え」と、指示して回った。それが伝わってなのか、逆さの脚は、少しずつ、沈んで行くようだった。ボロボロの翼は、恐る恐るのように、ゆっくりと折り畳まれて、その折れ目の内側に今にも隠れようとする、それぞれの赤い口がパックリ開いて、それで最後のように、黒と黄色の息を、一塊りずつ吐き出した。（二〇〇一年十二月七日）

垂直

六つの穴は、それぞれの脚が沈むに連れ、縮んでいった。どれも、脹ら脛が沈んだ辺りで、すっかり塞がって、足首を締め付けるようだった。足は、爪先を、反らしたり内に曲げたり、左右に捻ったりは出来たが、それより伸び上がりも沈み込みも出来ず、地面から生えているようになった。翼を突き出している穴も、更に狭まって、畳まれた翼を、その縁で噛み切らんばかりに締め付け、翼は、骨ばかり目立つようになって、少しだけ傾いた二本の棒が、きつく密着

して重ね合わさるだけのようだ。黒と黄色の息の塊は、重そうに、地面スレスレまで沈んで、横に滑って、それぞれ違う方向に、翼から離れて行く。しかし、どちらも、六人の逆さまの足を結んだ六角形の外には出られず、上を向いた爪先に当たっては、翼の方に蹴り戻され、翼に当たっては跳ね返り、また足の方へ滑るのを繰り返した。その六角形の中には、折れた枝は、一本も転がっていない。丸い頭の輝く者が、地面が揺れている間に、全て外に蹴り出したのだろう。

私は、丸い頭の輝く者と並んで、その六角形の直ぐ外で、その息の塊の行ったり来たりを眺めていた。丸い頭の輝く者は、何時の間にか、折れた赤い幹を立てて、少し前屈みに、それに抱き付いていた。ただ、顔はツルツルなので、それが何をどう見ているのか、いないのかは、知りようがない。案外、ただ真ん丸なだけの頭は、球形の仮面で、しかもマジックミラーにでもなっていて、その奥に隠された目で、全ての方向に、目を配っているようでもある。それなら、耳も口も、ただ仮面に隠されているだけか。私に似た者の事が気になって、知らないか尋ねてみたが、耳も口もないように、ピクリともしなかった。それとも、こいつは、私に似た者の変装した姿だろうか。私に似た者が、どれかの穴に落ちて直ぐに、木の根元の穴の中に、二つの色が、輝き出した筈だ。

「しかし、どの穴に落ちたのかな。残った六つの内のどれかか、それとも、

なくなった二つの方か。なくなった方だとしたら、すっかり地面の下で、もう永久にお別れかな。」と、私は、呟いた。丸い頭の輝く者は、私の独り言から逃れるかのように、独りでさっさと六角形の中に足を踏み入れた。ドロドロの息の塊がどんなに危ないか、分からないのか。しかも、自分の背より高い木の幹に抱き付いたままの、辿々しい足取りでだ。足に絡まれたら、間違いなく動けなくなる。一度くっつかれたら、ずっとそれに振り回されていなければならないだろう。しかし、敵の軌道をすっかり憶え込んだかのように、その足は少しも迷わず、真っ直ぐ赤い株に行き着いた。それから、抱き付いている幹を持ち上げ、折れ目の形を揃えて、株に差し込んだ。折れた幹と株は、ぴたりと合わさり、木は、そこに生えたままのような姿に戻った。それから、丸い頭の輝く者は、そこを、恐る恐るのように、登って行った。幹だけで、枝は全て取り払われている。直に、天辺まで登り、そこで仰向けになって、幹の尖った先を尻の穴に差し込むような身振りをしてから、両腕と両脚を大の字に拡げた。見ようと思えば、枝にも見える。

　その見せ掛けの枝が、自らをブルブル揺らして、少しずつ沈みだした。幹自体が、沈んでいる。もう根株は見えない。幹が、地面に、スルスルと埋め込まれてゆく。幹が見えなくなり、そのまま、丸い頭の輝く者の尻も、そこの穴にねじ込まれ、腰が折れて、胴体と手足はピンと伸びたまま斜めに立った。全身

が、次第に角度を狭めるＶ字型になって穴に収まると、そこは穴だけになった。最後の穴だ。垂直に切り立つ六面の側壁を登って行ける筈もない。上にも下にも行けず、独り取り残されてしまう。私は、六人の足を結ぶ六角形の中に踏み込んで、息の塊がどうだろうと見向きもせず、真っ直ぐに走った。そうして、今にも塞がろうとする穴に、首を突っ込んだ。きつくて、こめかみが締め付けられた。鼻や耳朶が潰れるかも知れないが、せめて頭だけはねじ込もうと、腰を逆さに振り立て、首に力を込めた。

唇は、圧迫されて無理にも閉じられたが、なぜか目は、穴の側面に擦り付けられても、真ん丸に開きっぱなしで、しかも、逆さまになった白い地面の中を、ずっと見通せるようだった。地面は、上からでは、ただ白いだけだが、地面の中からなら、上っ面を見透かせるのだ。その半透明な先に、ぼんやりした黒っぽい小さな塊が、幾つか目に付いた。逆さまの六人の影に違いない。重なっていて分かり難いが、数えると、どうやら六つある。しかし、六角形の真ん中に居る筈なのに、どうして六つ共、見えてしまうのか。六つは、更に重なり合いながら、一つの点の中に消えた。その後をもう一つ、小さな影が付いて行くのが見えた。首の取れた私の胴体でなければいいが。その最後の影の軌跡だけが、くねくねくね曲がって、薄い金色に染まった。そんな風に見えるのは、やはりそれが、私の胴体だからだろうか。くねくねしていたのが、真っ直ぐになってきて、

その手前の端が、私の方を向くようになると、そこに一つだけポツンと浮いた丸い塊に見えてくる。金色は濃くなって、輝きを増し、輪郭もはっきりしだした。その形を見て取ろうとすると、その上に、白くて角張った形のものが、幾つも幾つも、水の底に沈むように落ちてきて、それをすっかり覆い隠していった。それでもその中から、白を透かして、金色の光は、周りに滲み出るようだった。

　そこだけが、明るいままで、他は暗くなった。その明るさに群がるように、大小様々な形の足が、そこを行き過ぎて行くようで、金色を透かす白は、踏み付けられて、段々と薄く平らになる。それを、真横から、しかも逆さに見ているので、余り薄くなられては、見失ってしまいそうだ。いや、もう見失っているかも知れない。ただ、そこを踏み付ける斜めを向いた足の裏が、白金の光を受けて、ちらちらと白く浮き上がるので、それがどの辺りにあるかは、見当が付いた。その斜めの足の裏が、少しずつ正面に向いてきた。では、私は、それを、下から見上げているのか。しかしそれなら、その足に踏み付けられる、金色を滲ませる白い平面の裏側が、見えて来ても良さそうだが、見えるのは足の裏だけだった。それらは、暗い中に消えては、順に入れ替わって行ったが、キラキラした粉を塗したように、初めから輝いていた二枚の足の裏だけは、暗い中へと踏み出しても消えなかった。そのまま少し先まで進んで、それは、く

るりと向きを変えて消えた。

　足の裏が隠れる替わりに、暗く青っぽい足の甲が、二つ並んで現れた。それは、それまでの足の裏に対して、蝋燭の炎のように垂直に立っていた。それなら当然、それが踏む地面も、それまでの足の裏が踏んでいた地面に対して垂直なのだ。足の甲は、その爪先の向いている方に、踏み出されて行った。私からすれば、逆さがまたどちらかに逆さになったようで、それを見下ろしているのか見上げているのか、定かでないが、その行く先を目で追おうにも、瞼が塞がっていくのをどうにも出来なかった。

　瞼は、初め、光を一切通さなかった。そして、そのただ暗いだけの中に、初めにやって来たのは、光ではなく、声だった。声が、光そっくりに、瞼の裏側まで、突き通されて来た。それも、一つではなくて、幾つかの光の点が、揺れて見えた。私は、目玉の奥から一本ずつ生えて出た白く柔らかな腕を、忙しく動かすように、それらの光を追い回した。そして、一つ、また一つと、光の点は、その腕によって、押さえ付けられていった。腕は、その一つを押さえる度に、新しく生えて出たが、一度押さえ付けてしまえば、光は、首根っこを掴まれた獣のように大人しくなったので、私は、腕の動きに惑わされて、目が回るような事はなかった。そうして、全ての光を押さえ付けると、それらは、瞼の裏をひどくノロノロと這い回って、結局最後は、綺麗な六角形を作り、それか

ら瞼を捲り上げた。

　六人の声が、天井から降りてきた。それらは、少しも響き合わないので、目を開けてさえ、六つの光る点のままに見えた。六人は、両手に握った鳥の脚を、自分の両耳に突き刺していて、その痛みで、声を上げているようだった。いや、そうとも限らない。六人は、足首だけ白い天井に埋め込まれて、そこから、逆さに吊り下げられていた。しかも、もうずっとそのままにされていたに違いなく、目からも耳からも、顔中の毛穴からも、黒ずんだ血が滲み出ている。その痛みを紛らすために、耳を鳥の脚で突いているのではないか。逆さ吊りの苦しみに比べれば、幾ら耳の穴深くに鳥の脚を突き刺したところで、ただ擽ったいくらいでしかなさそうだ。それなら彼らは、その耳の穴が擽ったくて、笑い声を上げているのかも知れない。しかし、そんな彼らの姿がすっかり見て取れると、声は何処にもなかった。それに、彼らは、腋の下を見せて腕を開き、拳を耳に当ててはいたが、それきり少しも動いていない。（二〇〇一年十二月九日）

蝿、その他

著者　u_

© 2001 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently　published